

勝 雄 遺 跡 I

— 県営圃場整備事業(担い手育成基盤整備事業)勝雄地区に伴う —

— 第 1・2・3・4 次埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2 0 0 0

神戸市教育委員会

勝 雄 遺 跡 I

— 県営圃場整備事業(担い手育成基盤整備事業)勝雄地区に伴う —

— 第1・2・3・4次埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2 0 0 0

神戸市教育委員会

序

神戸市北区淡河町は神戸市の北西部にあたり、西は三木市、北は美嚢郡吉川町に接し、南に帝釈・丹生の山々をのぞむ盆地に豊かな水田がひろがる田園地帯です。また、淡河町は古い茅葺屋根の民家が数多く残り、山の斜面に切り開かれた棚田とともに、現代日本人が忘れかけた原風景を思い出させてくれる神戸では数少ない地域でもあります。

近年、この淡河町にも山陽自動車道の通過など交通量の増加による都市化の波は押し寄せ、農家の高齢化・担い手育成の困難さなど農村のもつ特有の問題も深刻になりつつある現在、農村の生活基盤の整備を含めた土地改良が求められております。

今回報告いたします勝雄遺跡の発掘調査事業もこのような農村の生活基盤の整備を含めた土地改良事業に伴うもので、淡河町の歴史を綴るうえで重要な古代集落を発見し、淡河町では初めて弥生時代の竪穴住居が発見されました。これらの発掘調査成果の概要である本書が、地域の歴史・文化を理解する資料として、文化財保護へのご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査実施にあたり快くご協力いただきました地元県営勝雄土地改良区、ならびに関係各位に感謝いたします。

平成12年3月31日

神戸市教育委員会

教育長 鞍 本 昌 男

例　　言

- 本書は、神戸市北区淡河町勝雄字上ノ原、字宮の裏、字天神の口他において平成8年度から平成10年度に発掘調査を実施した勝雄遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- この発掘調査は、県営圃場整備事業（扱い手育成基盤整備事業）勝雄地区に伴うもので、国庫補助金及び神戸市教育委員会・（財）神戸市スポーツ教育公社が神戸市産業振興局の委託を受け実施した。
- 調査は、神戸市文化財専門委員会・神戸市文化財保護審議会の指導を得て、下記の調査組織によって実施した。

調査組織表

平成8年度（第1次調査）

神戸市文化財専門委員会

埴上　重光	神戸女子短期大学教授
和田　晴召	立命館大学教授
山岡　常人	神戸芸術工科大学助教授
教育委員会事務局	
教育長	駒本　昌男
社会教育部長	久野栄一郎
文化財課長	杉田　年章
社会教育部主幹	奥田　哲通
埋蔵文化財係長	渡辺　伸行
事務担当学芸員	鈴木　宏典
調査担当学芸員	西岡　巧次
	阿部　敬生

平成10年度（第4次調査）

神戸市文化財保護審議会委員	史跡・考古担当
埴上　重光	前神戸女子短期大学教授
工業　普通	立命館大学文化財研究室埋蔵文化財センター長
和田　晴召	立命館大学教授
教育委員会事務局	
教育長	駒本　昌男
社会教育部長	矢野栄一郎
文化財課長	大野　俊一
社会教育部主幹	奥田　哲通
埋蔵文化財係長	渡辺　伸行
事務担当学芸員	東　喜代秀
(財) 神戸市スポーツ教育公社	
理事長	福尾　重信
専務理事	田村　厚雄
常務理事	中野　洋二
事務課長	家根　康行
文化財調査係長	丹治　康明
事務担当学芸員	山口　英正
調査担当学芸員	西岡　巧次

平成9年度（第2次・第3次調査）

神戸市文化財保護審議会委員	史跡・考古担当
埴上　重光	神戸女子短期大学教授
工業　普通	立命館大学文化財研究室埋蔵文化財センター長
和田　晴召	立命館大学教授

教育委員会事務局

教育長	駒本　昌男
社会教育部長	矢野栄一郎
文化財課長	杉田　年章
社会教育部主幹	奥田　哲通
埋蔵文化財係長	渡辺　伸行
事務担当学芸員	阿部　功
調査担当学芸員	第2次調査 阿部　敬生 西岡　巧次 龍野　義

平成11年度（整理・報告書作成）

神戸市文化財保護審議会委員	史跡・考古担当
埴上　重光	前神戸女子短期大学教授
工業　普通	立命館大学文化財研究室埋蔵文化財センター長
和田　晴召	立命館大学教授
教育委員会事務局	
教育長	駒本　昌男
社会教育部長	水川　裕次
文化財課長	大野　俊一
社会教育部主幹	渡辺　伸行
埋蔵文化財係長	丸山　泰
事務担当学芸員	平田　朋子
(財) 神戸市体育協会	
会長	能山　幸俊
副会長	田村　厚雄
副会長	山川　豊
副会長	家治川　豊
副会長	鈴木　昌男
専務理事	川村厚雄副会長事務取扱い
常務理事	中野　洋二
常務理事	斎藤　圭一
常務理事	前田　豊晴
常務理事	中西　光男
常務理事	奥田　哲通
常務理事	丹治　泰明
常務理事	齊木　義
事務担当学芸員	西岡巧次　池田　毅　阿部敬生
調査担当学芸員	龍野　義　阿部　功　中谷　正

4. 現地調査においては、第3次調査では地元の八木美和子、常見紹代、松山安佐子の諸氏には遺物水洗作業員として参加いただいた。第4次調査では神戸女子大学大学院生山下咲美子氏には調査補助員として参加いただいた。また、勝雄土地改良区理事長石倉敏夫、事務長惣田実千代氏他の方々には、終始御協力いただいた。記して感謝いたします。

5. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25000分の1地形図「淡河」「有馬」を、精細位置図は神戸市発行2500分の1地形図「石切山」「勝雄」を用いた。

6. 本書で用いた方位・座標は平面直角座標系第V系で、標高はT.P.で表示した。

7. 第3次調査において実施した航空写真撮影は、(㈱)アジア航測、基準点測量は各年次に㈱大古瀬測量、(㈱)アジア航測、㈱興葉測量に委託して実施した。

8. 遺構写真は各調査担当者が撮影した。遺物写真は西大寺フォト 杉本和樹氏が撮影を行った。

9. 遺物の接合・復元整理は井守芳美、大川美知子、岡 邦子、西馬久美子、橋本千里、和田陽子の各氏が行った。遺物の実測図作成は、各調査担当者が行った。

10. 遺構・遺物図の整図は二次元データ記録業務を(㈱)アジア航測に委託して実施した。その他の挿図は各執筆者が作成した。

11. 本書の作成は、日次に示したように各調査担当者が分担して執筆し、西岡巧次が編集した。

目 次

- i 序
- ii 例言
- iii 目次

本文目次

第Ⅰ章 はじめに (西岡)	1
(1) 位置と環境	
(2) 調査に至る経過	2
(3) 調査の経過	2
第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境	5
第1節 遺跡の立地 (関野)	5
第2節 歴史的環境 (中谷)	9
第Ⅲ章 第1次調査 (西岡)	13
第1節 調査の概要	13
第2節 小 結	18
第Ⅳ章 第2次調査 (阿部敬生)	19
第1節 調査の概要	19
第2節 小 結	24
第Ⅴ章 第3次調査	25
第1節 調査の概要	25
A. 第1調査区-1 (西岡)	25
(1) 検出遺構	25
(2) 出土遺物	36
B. 第1調査区-2 (関野)	38
(1) 検出遺構	40
(2) 出土遺物	48
C. 第1調査区-3 (西岡)	53
(1) 検出遺構	53
(2) 出土遺物	63
第2節 小 結 (西岡)	65
第Ⅵ章 第4次調査	67
第1節 調査の概要	67
A. 第2調査区 (西岡)	67
(1) 検出遺構	67
(2) 出土遺物	69
B. 第3調査区 (中谷)	70

(1) 檢出遺構	70
(2) 出土遺物	72
C. 第4調査区(阿部功)	73
(1) 檢出遺構	73
(2) 出土遺物	76
D. 第5調査区(西岡)	77
(1) 檢出遺構	77
(2) 出土遺物	83
E. 第6調査区(阿部功)	86
(1) 檢出遺構	86
(2) 出土遺物	87
F. 第7調査区(中谷)	89
(1) 檢出遺構	89
(2) 出土遺物	91
G. 第8調査区(阿部敬生)	92
(1) 檢出遺構	92
(2) 出土遺物	100
H. 第9調査区(中谷)	103
(1) 檢出遺構	103
(2) 出土遺物	106
I. 第10調査区(阿部功)	108
第2節 小結(西岡)	108
第VII章 総括(西岡)	109

挿図目次

第1図 位置図	1	第14図 S B02平面図・土層断面図	27
第2図 調査区設定図	3	第15図 S B20平面図・土層断面図	27
第3図 勝雄遺跡周辺微地形復元図	7	第16図 S B11平面図・土層断面図	29
第4図 勝雄遺跡と周辺遺跡	11	第17図 S B03平面図・土層断面図	29
第5図 第1トレンチ遺構平面図	14	第18図 S B18平面図・土層断面図	29
第6図 第2・第3トレンチ遺構平面図	15	第19図 S B13平面図・土層断面図	30
第7図 第1次調査出土遺物実測図	17	第20図 S B36平面図・土層断面図	30
第8図 第4トレンチ平面図	20	第21図 S B14平面図・土層断面図	31
第9図 第4トレンチI区ピット平面図・断面図	21	第22図 S B01平面図・土層断面図	31
第10図 第4トレンチI区北壁土層図	21	第23図 S B04平面図・土層断面図	32
第11図 第5トレンチ平面図	22	第24図 S B03平面図・土層断面図	33
第12図 第2次調査出土遺物実測図	23	第25図 S B07平面図・土層断面図	33
第13図 第1調査区-1遺構配置図	26	第26図 S B08平面図・土層断面図	34

第27図	S B23平面図・上層断面図	34	第62図	S B01平面図・断面図	75
第28図	S T01平面図・土層断面図	35	第63図	第4調査区出土遺物実測図	76
第29図	S T02平面図・土層断面図	35	第64図	S B01平面図・断面図	77
第30図	第1調査区-1出土遺物実測図	37	第65図	S D02平面図・断面図	77
第31図	第1調査区-2F~G区上層図	38	第66図	S K04平面図・断面図	78
第32図	第1調査区-2遺構配置図	39	第67図	S B02平面図・断面図	79
第33図	S B19平面図・断面図	40	第68図	S B03平面図・断面図	79
第34図	S B05平面図・断面図	42	第69図	第5調査区遺構配置図	80
第35図	S B12平面図・断面図	42	第70図	S D01平面図・断面図	81
第36図	S B16・17平面図・断面図	44	第71図	S B04平面図・断面図	82
第37図	S B24平面図・断面図	44	第72図	第5調査区出土遺物実測図	85
第38図	S D08・S K07平面図・断面図	46	第73図	第6調査区遺構配置図	86
第39図	S D07平面図・断面図	46	第74図	第6調査区出土遺物実測図	88
第40図	S K08・11平面図・断面図	48	第75図	第7調査区遺構配置図	90
第41図	S D08出土遺物実測図	50	第76図	S X01平面図・断面図	91
第42図	その他の出土遺物実測図	52	第77図	第7調査区出土遺物実測図	91
第43図	S B28平面図・断面図	53	第78図	第8調査区-1平面図	93
第44図	第1調査区-3遺構配置図	54	第79図	第8調査区-2平面図	93
第45図	S B25平面図・断面図	55	第80図	第8調査区-3平面図	94
第46図	S B26平面図・断面図	55	第81図	第8調査区-4・5平面図	95
第47図	S B27平面図・断面図	56	第82図	S B02平面図・断面図	96
第48図	S B32・33平面図・断面図	57	第83図	S K11平面図・断面図	97
第49図	S B34平面図・断面図	58	第84図	S K12平面図・断面図	97
第50図	S B30平面図・断面図	59	第85図	S X01平面図・断面図	98
第51図	S B29平面図・断面図	60	第86図	S X03平面図・断面図	98
第52図	S B31平面図・断面図	61	第87図	S X02平面図・断面図	99
第53図	S B35平面図・断面図	62	第88図	第8調査区-4・5出土遺物実測図(1)	100
第54図	第1調査区-3出土遺物実測図	64	第89図	第8調査区-4・5出土遺物実測図(2)	101
第55図	S B01平面図・断面図	67	第90図	S D02・S D03平面図・断面図	102
第56図	第2調査区遺構配置図	68	第91図	第9調査区遺構配置図	103
第57図	第2調査区出土遺物	69	第92図	S D05平面図・断面図	104
第58図	第3調査区遺構配置図	71	第93図	S D07平面図・断面図	105
第59図	S D01・S D02集石遺構平面図	72	第94図	S K03・S K05平面図・断面図	105
第60図	第3調査区出土遺物実測図	72	第95図	第9調査区出土遺物実測図	106
第61図	第4調査区遺構配置図	74			

表 目 次

表1 調査区設定一覧 3 表2 第1次調査 土坑一覧 14

写真目次

写真1	淡河小学校校外学習	図版目次	写真5	第3次調査		
写真2	第3次調査 重機掘削状況	3	写真6	第1調査区-3SK12検出状況	63
写真3	淡河本陣	12	写真7	第4次調査		
写真4	第1次調査 作業状況	18	写真8	第5調査区SK04土層断面	85
				写真9	第4次調査 第10調査区全景	107

図版目次

図版1	1 勝雄遺跡全景(空中斜め写真)(北より)	図版8	第3次調査 第1調査区
	2 勝雄遺跡全景(空中斜め写真)(東より)			1 D区全景(北より)
図版2	第1次調査			2 竪穴住居SB03
	1 第1トレンチ1区全景(東より)		図版9	第3次調査
	2 第2トレンチ全景(西より)			1 竪穴住居SB20
	3 第2トレンチ西部(北より)			2 竪穴住居SB11
図版3	第1次調査			3 掘立柱建物SB04
	1 第3トレンチ南部(北より)		図版10	第3次調査 第1調査区-1
	2 第3トレンチ北部(南より)			1 掘立柱建物SB03(東より)
	3 第1トレンチ4区SX01			2 掘立柱建物SB03(北より)
	4 第2トレンチSX01			3 掘立柱建物SB07
図版4	第2次調査		図版11	第3次調査 第1調査区-1
	1 第4トレンチA・B区全景(南東より)			1 土坑SK04
	2 第4トレンチI区全景			2 墓壙ST01
	3 第4トレンチI区SP01断面	(北東より)		3 墓壙ST02
図版5	第2次調査		図版12	第3次調査 第1調査区-1
	1 第5トレンチA区全景(北西より)			1 E区全景(西より)
	2 第5トレンチA区全景(南東より)			2 竪穴住居SB13(西より)
	3 第5トレンチB区全景(北西より)		図版13	第3次調査 第1調査区-1
	4 第5トレンチB区全景(南東より)			1 竪穴住居SB18
図版6	第3次調査 第1調査区-1			2 竪穴住居SB14
	1 A・B区全景(西より)			3 掘立柱建物SB08
	2 A区全景(北より)		図版14	第3次調査 第1調査区-1
	3 A区水溜め遺構			1 掘立柱建物SB23
図版7	第3次調査 第1調査区-1			2 掘立柱建物SB12
	1 C区全景(西より)			3 土坑SK08
	2 竪穴住居SB02(北より)		図版15	第3次調査 第1調査区
	3 掘立柱建物SB01(北より)			1 E~G区全景(北より)
				2 F~H区全景(南より)

- 3 I～L区全景（北より）
- 図版16 第3次調査 第1調査区-2
- 1 壓穴住居S B19（南東より）
 - 2 壓穴住居S B19（南東より）
 - 3 壓穴住居S B19（南東より）
- 図版17 第3次調査 第1調査区-2
- 1 掘立柱建物S B05・S B06
(南より)
 - 2 掘立柱建物S B12（西より）
 - 3 掘立柱建物S B16・17(南西より)
- 図版18 第3次調査 第1調査区-2
- 1 溝S D07（東より）
 - 2 溝S D07断面（東より）
 - 3 溝S D08・落ち込みS X02
(北東より)
- 図版19 第3次調査 第1調査区-2
- 1 土坑S K07断面（東より）
 - 2 土坑S K11（西より）
 - 3 F区ピットS P11遺物出土状況
- 図版20 第3次調査 第1調査区-3
- 1 M・N区全景（北より）
 - 2 壓穴住居S B28（北西より）
 - 3 壓穴住居S B27（南東より）
- 図版21 第3次調査 第1調査区-3
- 1 掘立柱建物S B29（北西より）
 - 2 掘立柱建物S B30（南東より）
 - 3 掘立柱建物S B31（西より）
- 図版22 第3次調査 第1調査区-3
- 1 O・P・Q区全景（東より）
 - 2 壓穴住居S B32・S B33全景
(東より)
 - 3 壓穴住居S B32（南東より）
- 図版23 第3次調査 第1調査区-3
- 1 壓穴住居S B34（南より）
 - 2 掘立柱建物S B35（北より）
 - 3 Q区全景（東より）
- 図版24 第4次調査-第2調査区
- 1 A・B区全景（南西より）
- 2 C区全景（南東より）
- 3 D区全景（南東より）
- 図版25 第4次調査-第2調査区
- 1 掘立柱建物S B01（東より）
 - 2 E・D区全景（南東より）
 - 3 落ち込みS X01（北西より）
- 図版26 第4次調査-第3調査区
- 1 調査区全景（北西より）
 - 2 調査区全景（南東より）
 - 3 S D01・S D02・集石遺構
- 図版27 第4次調査-第4調査区
- 1 A区全景（北より）
 - 2 B区全景（南より）
 - 3 C・D区全景（北より）
 - 4 掘立柱建物S B01（北より）
- 図版28 第4次調査-第5調査区
- 1 A～C区全景（西より）
 - 2 A～C区全景（東より）
 - 3 A・B区全景（西より）
- 図版29 第4次調査-第5調査区
- 1 掘立柱建物S B01（西より）
 - 2 溝S D01（北より）
 - 3 溝S D02（北より）
- 図版30 第4次調査-第5調査区
- 1 D・E区全景（西より）
 - 2 D・E区全景（東より）
 - 3 F区全景（西より）
 - 4 G区全景（東より）
- 図版31 第4次調査-第5調査区
- 1 掘立柱建物S B04（北より）
 - 2 溝S D05須恵器出土状況
 - 3 G区西部遺構検出状況
- 図版32 第4次調査-第6調査区
- 1 A区全景（北東より）
 - 2 A区全景（北東より）
 - 3 A区全景（南西より）
 - 4 B区全景（東より）

図版33 第4次調査—第6調査区

- 1 ピットSP01土層断面（東から）
- 2 ピットSP07土層断面（西から）
- 3 ピットSP32土層断面（南から）

図版34 第4次調査—第7調査区

- 1 A区全景（東より）
- 2 A区遭構検出状況
- 3 B区全景（北より）
- 4 落ち込みSX01土層断面

図版35 第4次調査—第8調査区

- 1 第8調査区-1全景（南より）
- 2 第8調査区-2全景（北東より）
- 3 第8調査区-3全景（南西より）
- 4 第8調査区-5南半全景（南西より）

図版36 第4次調査—第8調査区

- 1 第8調査区-5土坑SK12（北東より）

2 第8調査区-5落ち込みSX02（北東より）

- 3 第8調査区-5落ち込みSX03（南東より）

図版37 第4次調査—第9調査区

- 1 溝SD02・03・06（西より）
- 2 溝SD06（北より）
- 3 D区全景（西より）

図版38 出土遺物 第2次調査

- 第3次調査 第1調査区-1

図版39 出土遺物 第3次調査 第1調査区-1

- 第3次調査 第1調査区-2

図版40 出土遺物 第3次調査 第1調査区-2

- 第3次調査 第1調査区-3

第4次調査

図版41 出土遺物 第4次調査



写真1 濱河小学校校外学習（平成9年12月）

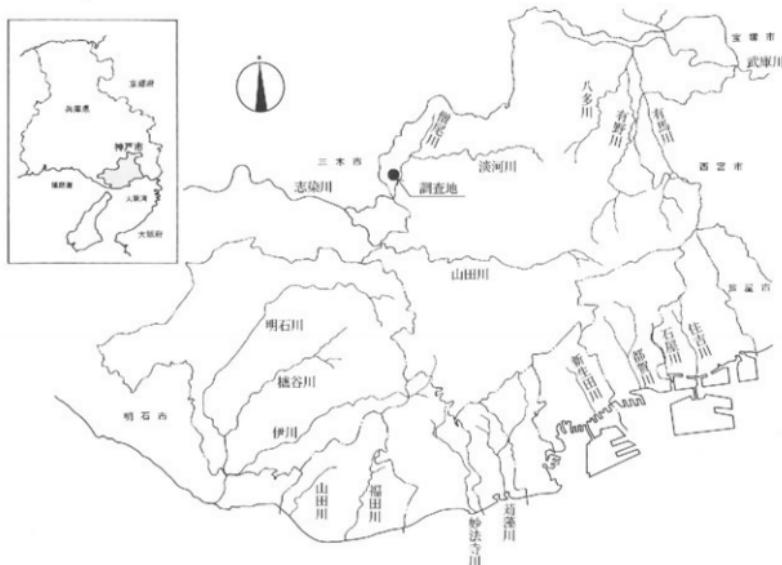
第Ⅰ章 はじめに

(1) 位置と環境

神戸市北区淡河町は、神戸市の北西端に位置し、昭和33年神戸市に合併・編入される以前は、行政区画上美嚢郡淡河村・上淡河村であった。美嚢郡は旧国制の播磨国東端にあたり、概ね八多町屏風と淡河町神田との境が摂津国との境となっている。

もともと淡河地域は、六甲・帝釈山の造山活動における隆起によって形成された隆起準平原面の緩やかな斜面が河川などによって侵食され、多くの谷地形および丘陵が形造られてきた。その結果、現在の淡河地域では八多町屏風のナダレ尾山(527.4m)の西麓を源とする加古川の一支流淡河川が東西に貫流し、狹小な東西約9km、最大幅約1kmの谷平野が形成されることになった。

前述したように古代の淡河地域は、播磨国美嚢郡に属し、「風土記」によれば美嚢郡は志染里・吉川里・牧野里・高野里の四里に分かれ、このうちの志染里の東部が所謂「淡河」に相当すると考えられる。従って、淡河地域は、古墳時代以来「縮見屯倉」所詮大和政権直轄地として開発された地域の東部山間部にあたるといえる。このように淡河地域は古墳



第1回 位置図

時代以来、ないしは「風土記」の記述された奈良時代前期以降には淡河川流域は東からの重要な交通ルートとして利用され、開発も進められてきたものと推定される。中世以降、この交通ルートは山陽道の脇街道として使われ、石峯寺・勝雄経塚など中世仏教関連遺跡や淡河城・萩原城の中世山城が街道沿いに点在し、少なからず人口も定着し、中世村落も形成されていったものと考えられる。中世以降、羽柴秀吉の三木攻めの際淡河城・萩原城が落城したのち、現在の淡河本町周辺に「樂市・樂座」が設けられ、近世宿場町の体裁が整い、名実とともに「湯山」街道として有馬・京・大阪への主要ルートとなる。

淡河町勝雄地区は、淡河町の西端に位置し、近世に宿場町として繁栄した淡河本町の西対岸に位置し、東西に「湯山」街道が通じていて、三木にいたる木梨峠への登り口にあたる。さらに西は三木市志染町、北は美嚢郡吉川町に接する地域である。勝雄地区の南部の丘陵沿いを淡河川が南西に流れ、三木市との境となる谷の狭隘部で北流して、志染町御坂で志染川に合流している。

淡河町勝雄地区は、淡河川流域の中でももっとも谷平野が発達した地域であり、東隣の淡河本町・中村地区とともに淡河地区の中心部を形成する地域である。

勝雄遺跡は、この淡河川の右岸東西1000m、南北450mの河岸段丘上及び扇状地上に占地している。

(2) 調査に至る経過

勝雄遺跡の東部にあたる宮ノ谷川の扇状地には、鎌倉時代に勧請されたとされる淡河八幡神社が鎮座し、現在社域となっている社からは、室町時代の土師器皿・須恵器片・瓦片が出土し、昭和45年～昭和46年実施の神戸市埋蔵文化財分布調査で「兵庫区c-413淡河八幡神社遺物散布地」として周知されてきた。

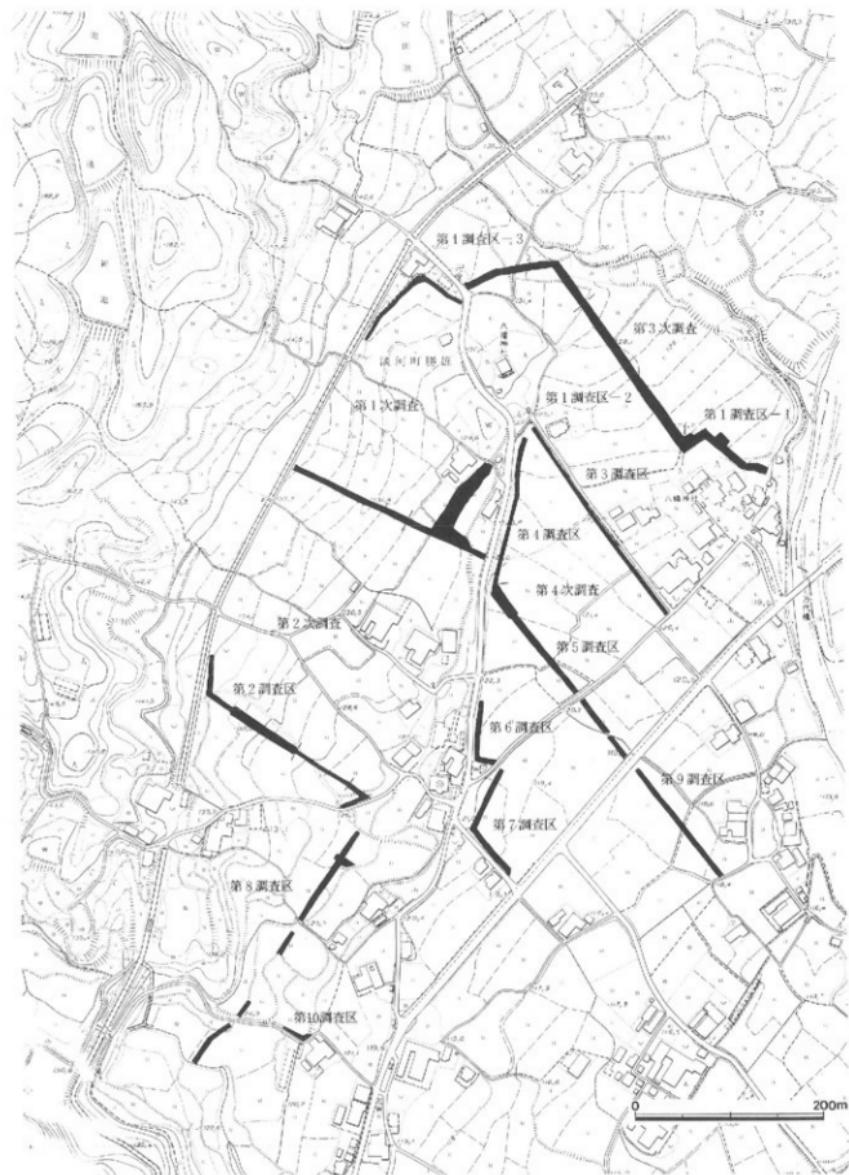
平成7年淡河町勝雄地区において圃場整備事業の計画が策定され、平成7年4月・平成8年2月、施工予定区域において試掘調査を実施した。平成8年2月に実施した試掘調査では、淡河八幡神社周辺の自然堤防上の試掘坑から奈良時代～中世の須恵器・土師器片と柱穴などが検出された。また、調査区北東部で中国貨幣「開元通宝」が出土した。県道三木・三田線南側、淡河川の自然堤防上の試掘坑からは弥生土器底部片が出土している。

(3) 調査の経過

試掘調査の結果をうけて、農林土木課による土地改良事業の実施設計がなされた結果、第1次調査は淡河天満宮の北側第11号支線排水路（第1トレンチ）、天神池西側第64号水田切り土部（第2トレンチ）、第17号支線排水路（第3トレンチ）を平成8年度事業として実施することとなった。

第1次調査は平成9年1月20日より第1トレンチより実施し、順次第2・第3トレンチに調査を進めたが、第3トレンチの第17号支線排水路部分については、東部のみを調査実施して、西部については次年度に持ち越すこととなった。

第2次調査は、平成9年4月より実施した。先年度持ち越した第17号支線排水路西側（第4トレンチ）、第17号支線排水路の南西200mの第33号支線排水路（第5トレンチ）に



第2図 調査区設定図

おいて実施したが、第5トレンチは植木等の作付けのため中央66mについてのみ調査実施した。

第3次調査は、平成9年9月より実施した。第12号支線排水路を第1調査区として、淡河八幡宮北側周縁部を第1調査区-1、排水路中央部を第1調査区-2、天満宮北側周縁部を第1調査区-3、として調査実施し、弥生時代～中世の集落址を検出した。第2次調査で調査実施しなかった第33号支線排水路西部の一部を調査実施した。

第4次調査は、平成10年4月より実施した。第1次・第2次・第3次調査を実施した段丘及び崩状地の東・南側で調査実施した。今回の勝雄遺跡の調査は、下記のような調査区の設定で調査を実施した。

次数	調査区名	調査期間	原因工事	調査面積
第1次	第1トレント	1997年1月20日～1997年3月28日	第11号支線排水路	1610m ²
	第2トレント		第64号水田切り土部	
	第3トレント		第17号支線排水路	
第2次	第4トレント	1997年4月8日～1997年6月30日	第17号支線排水路残り	540m ²
	第5トレント		第33号支線排水路	
第3次	第1調査区-1	1997年9月25日～1998年3月8日	第12号支線排水路	2200m ²
	第1調査区-2		第33号支線排水路残り	
	第1調査区-3		第9号小排水路	
第4次	第2調査区	1998年4月13日～1998年9月30日	第19号支線排水路	2530m ²
	第3調査区		第20号支線排水路	
	第4調査区		第25号支線排水路	
	第5調査区		第26号支線排水路	
	第6調査区		第34号支線排水路	
	第7調査区		第21号支線排水路	
	第8調査区		第37号支線道路拡腹部	
	第9調査区			
	第10調査区			

表1 調査区設定一覧



写真2 重機掘削状況（第3次調査）

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 遺跡の立地

位置

淡河町は神戸市域の中央北方、三木市や吉川町と市境を接する場所に位置している。南には北区の中に所在する丹生・帝釈山塊があつて神戸市中心部からのアクセスは決して良いとは言えないが、三木・三田両市を結ぶ街道筋にあたる。かつては湯山街道の名称で西方から有馬温泉へ向かう道であったが、現在は県道一木三田線が貫通し、北摂地域と東播地域を結ぶ主要交通路となっている。

地勢

淡河町の西側にある三木市との市境は山の稜線が北から張り出す部分を通るため、一帯は淡河本町を中心とする東西に細長い盆地地形を形成している。盆地の中央には加古川水系である淡河川が蛇行して流れ、その両岸には平地が存在している。淡河川は川幅10~20mの中規模河川であるが、平地の幅は500mを越える広い部分もある。勝雄地区は淡河町の西端に位置しているため、市境の山の稜線が淡河川をダム状に堰止める盆地の出口付近に相当する。従って淡河川の流れも比較的緩やかで、盆地内でも平地の発達が優勢な場所である。地質的に見れば平地背後の山塊は北側が新生代新第三紀に堆積した神戸層群、南側が神戸層群と中生代白亜紀に噴出した有馬層群で、その前面に中位段丘面が形成されている。さらにその前面は沖積地で、現河道あるいは氾濫原との境界には段丘崖状の地形が連続している。

微地形

勝雄地区的地勢の概略は以上であるが、微視的に見れば地区内各部分の立地条件の差を把握することができる。まず淡河川の右岸を見ると、淡河八幡神社から天満神社にかけての部分には扇状地が形成されている。天満神社の西側から盆地の南端に向かって中位段丘崖がほぼ南北に連なっているが、段丘崖はこの扇状地に覆われて半ば埋没しており、他の場所の段丘崖と比較して段の高さが低くなっている。扇状地は北隣の圃場整備完了部分にも広がっており、扇端は現淡河川の河道付近である。南方の県道三木三田線と旧道が分岐する部分周辺にも扇状地が存在し、同様に中位段丘崖を埋没させ、扇端は現淡河川の河道付近となっている。これら2つの扇状地を形成した小河川宮ノ谷川は、現在では扇状地面を深く切り込んでいる。天満神社南側の天神池の周囲、勝雄公会堂の西側、北神倉庫の南北両側の4ヶ所には中位段丘崖を開析する小谷があり、谷の前面には小規模な扇状地が形成されているものもある。同様の小谷は氾濫原背後の北東から南西に連なる段丘崖状地形でも、勝雄地区中央と盆地出口の2ヶ所で確認できる。しかし中位段丘崖を開析する小谷との連続性は不鮮明で、小谷を形成した小河川の流路の追跡は容易ではない。背後の山麓に入りこむ数ヶ所の小谷は耕作地あるいは溜池として利用されおり、また勝雄地区北半の淡河疏水西側一帯は山裾まで開墾が進行している。川沿いの氾濫原では猪之馬場橋西詰周囲と長柄橋西詰周囲の2ヶ所で淡河川の旧河道が確認できるが、前者には中洲状の微高地が2ヶ所存在する。

淡河川の左岸は右岸と比較して平地の幅が狭いため、規模の大きな扇状地は形成されていない。永春禪寺南側の谷を流れる小河川が中位段丘崖を開析した後、氾濫原に小規模な扇状地を形成させるのみである。中位段丘崖は永春禪寺北側で山裾から派生した後、猪之馬場橋東詰で北東から南西に連なる氾濫原背後の段丘崖状地形と重合し、さらに南西に連なって再び山裾に繋がっている。長柄橋東詰から続く道が山裾に達する位置には、氾濫原中に浅い小谷が1ヶ所存在し、その南隣に旧河道が1ヶ所確認できる。背後の山麓には右岸と比較して入り込む小谷が少なく、また山裾の緩斜面地には上記の永春禪寺が造営されている。

遺跡の範囲

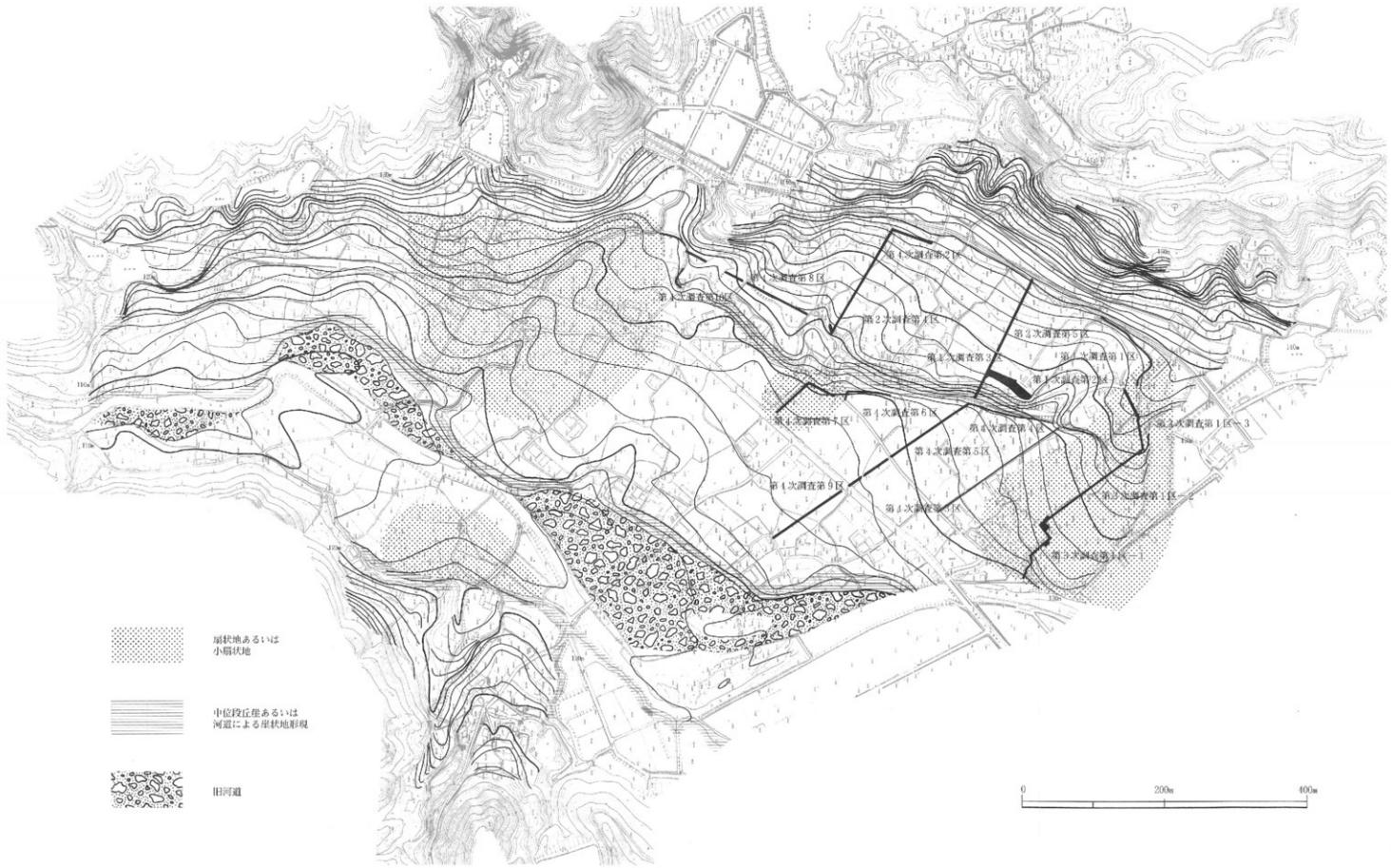
勝雄地区内各所の微地形の概要は以上であるが、かつて生活に適していたであろう場所が埋蔵文化財の分布密度が高い所であると仮定すると、それらは扇状地上に当たる淡河八幡神社から天満神社の周辺、県道三木三田線と旧道が分岐する周辺の2ヶ所と、中位段丘面上に当たる天神池と勝雄公会堂の中間の西側、永春禪寺の西側の2ヶ所、氾濫原背後の段丘状地形上面に当たる勝雄公会堂近くの県道三木三田線東側の計5ヶ所が想定できる。平成7・8年度に実施された岡場整備の事前の試掘調査ではさらに広範囲を埋蔵文化財が存在すると回答しているが、遺構・遺物が濃密に分布する範囲とすればほぼ上記5ヶ所程度に限定されよう。

調査区の立地

各調査区はすべて淡河川の右岸で、それぞれの地理的立地環境は以下のように考えられる。平成8年度に実施された第1次調査第1トレンチが淡河八幡神社から天満神社にかけての扇状地扇央から中位段丘崖を開析する小谷の谷頭にかけて、第2・3トレンチが犬池南側の中位段丘面上で段丘崖の近くに相当する。

平成9年度に実施された第2次調査第4トレンチは第1次調査第2・3トレンチ北隣に位置し、天神池と勝雄公会堂の中間西側の中位段丘面上中央、第5トレンチが勝雄公会堂西側の中位段丘崖を開析する2筋の小谷間の微高地に相当する。第3次調査第1調査区…1が淡河八幡神社から天満神社にかけての扇状地扇端部、2が扇状地扇央の埋没中位段丘崖より下方、3が埋没中位段丘崖より上方に相当する。

平成10年度に実施された第4次調査第2調査区は第2次調査第5調査区の南北両隣に位置して2つの調査区に分かれており、北側が勝雄公会堂西側の中位段丘崖を開析する2筋の小谷間の微高地付け根からその北西隣の中位段丘面上の山裾手前まで、南側が小谷間の微高地先端、第3調査区が中位段丘崖を開析する天神池周囲の小谷前面の沖積地上、第4調査区は第3調査区北半の西隣に位置し、同じ小谷の谷中からその南隣の中位段丘崖直下、第5調査区は第4調査区の南東隣に位置し、天神池と勝雄公会堂の中間東側の沖積地上、第6調査区が勝雄公会堂北側の中位段丘崖直下、第7調査区は第6調査区の南隣に位置し、勝雄公会堂西側の中位段丘崖を開析する小谷前面の小扇状地上、第8調査区が県道三木三田線と旧道が分岐する部分の扇状地扇頂部から中位段丘面上の中央、第9調査区は第5調査区の南東隣に位置し、猪之馬場橋西詰から県道三木三田線へ向かう市道の北側冲積地上、第10調査区は第8区調査区南半の東隣に位置し、南隣を県道三木三田線と旧道が分岐する部分の扇状地扇頂部、北隣の中位段丘崖を開析する小谷で挟まれた、開折され残った段丘崖から直上に相当する。



第3図 勝雄遺跡地形復原図

第2節 歴史的環境

勝雄遺跡（1）は、前節で触れたとおり淡河川によって形成された盆地西縁付近に位置している。遺跡北部の淡河川右岸には天満神社（33）・淡河八幡神社（34）が鎮座し、それを取り巻く鎮守の社が今も残っている。この地域は、三木・三田を繋ぐ交通ルート上にあり、今までその重要性は変わらず、そのため中世の文書などにも淡河の名前が登場する。また近年の発掘調査により勝雄遺跡を含め、多くの遺跡がこの地域に存在することが判明している。以下、発掘調査成果から得られた資料をもとに、淡河地域の歴史を概観することにする。

旧石器時代

～縄文時代

淡河地域で現在判明している最古の資料は、淡河町萩原に所在する萩原遺跡（4）で発見された縄文時代草創期の有舌尖頭器である [村尾 1999]。それに続く資料としては、淡河町野瀬大池に所在する中山大池遺跡（10）で採集された縄文時代前期の土器片が挙げられる [新修神戸市史1990]。縄文時代の早い段階では遺物しか発見されていないため、居住地としてではなく狩猟場のような場所であったと考えられる。しかし中期から後期になると、萩原遺跡では縄文時代後期の竪穴住居 [村尾 1999] が、勝雄遺跡に隣接する淡河中村遺跡（2）では、縄文時代中期後半の竪穴住居が検出され [村尾 1992]、特に淡河中村遺跡では、竪穴住店内から石棒が出土し、屋内祭祀を考える上で重要な資料を提供している。他にも萩原遺跡の対岸、淡河町萩原・野田に所在する萩原城遺跡（5）では縄文時代と考えられる小型竪穴住居が検出されている [黒田 1996]。このように縄文時代後期頃には若干住居跡が検出され、集落が形成されていたことが判明している。しかしこれらの集落は継続性を持たず、短期間で廃絶したものと考えられる。

弥生時代

弥生時代になると、他地域では水田耕作を行い、また集落の周辺に濠を巡らせる環濠集落が形成されるようになる。一方淡河地域では、前期から中期にかけての遺跡はまだ発見されていない。時代が降り後期になると、今回調査した勝雄遺跡では土坑を伴う溝・土坑・竪穴住居などが、淡河町淡河に所在する淡河城遺跡（3）では、丘陵先端部に後期末から古墳時代初頭の竪穴住居が1棟検出されている [宮本 1977]。現在、弥生時代の遺跡数は少ないが、後世に耕作等の削減による消滅を考慮に入れる必要がある。

古墳時代

～飛鳥時代

縄文時代から弥生時代まで、現状では短期的かつ局地的な遺跡分布であるが、古墳時代になると、ようやく遺跡内に継続性がみえてくる。勝雄遺跡東隣、宮谷川左岸の淡河中村遺跡では、古墳時代初頭および後期の竪穴住居が検出されている [村尾 1992・丸山 1994]。さらに西隣の勝雄遺跡では第5次調査で古墳時代後期の横列、第3次調査で飛鳥時代の竪穴住居・掘立柱建物が検出されている。このように淡河地域の開発は、勝雄・淡河中村遺跡の集團によって本格的に始められたと考えられる。また淡河中村遺跡では、韓式土器が出土している [村尾 1992] ことから、朝鮮半島からの渡来系集團との関わりが指摘され、『兵庫県美術館誌』にも百濟系渡来人により、宝亀11（780）年に淡河盆地の開拓が行われたと記載されている。「美術館教育会 1925」。この伝承は勝雄遺跡周辺に、渡来人が存在していたことの傍証になると考えられる。

このように集落の存在が明らかになったものの、それに対応する墓域が現在まで淡河地域では発見されていない。他地域では古墳時代後期になると、横穴式石室などの埋葬施設をもつ古墳が、数十基集まり群集墳を形成するが、淡河川流域では現在古墳は発見されていない。今後発見される可能性はあるが、おそらく弥生時代の遺構と同様に耕作等の削平を受けて消滅してしまったか、もしくは墳丘をもたない墓を営んでいた可能性がある。

奈良時代

続く奈良時代を迎ても、勝雄遺跡では大型の掘形をもつ掘立柱建物や溝・土坑が検出され、また溝からは鉄鉢を模した土器や葉巻が出土しており、ここが一般集落ではなく、官衙・寺院などの特殊な施設がおかれていたと考えられる。先述の淡河開拓譚はちょうどこの時期にあたり、淡河中村・勝雄地域が古墳時代に続いて淡河盆地の中心的な位置を占めていたと考えられる。そして、平安時代には勝雄遺跡の建物群は消滅し、ピットが確認されるのみである。他の淡河川流域の遺跡数もさらに少なくなることから、奈良時代までの活発な開発が平安時代に入り、一時的に弱まったものと考えられる。

鎌倉時代

平安時代まで遺跡は散在的であったが、平安時代末期から鎌倉時代にかけて勝雄遺跡・淡河中村遺跡・萩原遺跡のような複合遺跡の他に、淡河木津遺跡（6）・行原遺跡（7）・東畑遺跡（8）・中山遺跡（9）などで新興集落が出現し、爆発的に増加する。これらの遺跡動向は、淡河町神影に所在する石峯寺（32）に伝わる『石峯寺文書』に記載されている〔兵庫県教育委員会 1987〕ように、寺院勢力が莊園を獲得していく過程で形成されたものと考えられる。先述の石峯寺の他にも寺院は存在していたようで、淡河町淡河に所在する犬正廃寺（11）、淡河町東畑に所在する犬正寺廃寺（13）の存在が伝承されている。勝雄遺跡周辺でも「光泉寺」と呼ばれる山岳寺院の伝承が残っており、第5次調査の淡河川左岸に設定した調査区において、室町時代頃の巴文軒丸瓦が出土し、寺院が存在していた可能性がある。また、勝雄遺跡内の淡河八幡神社も、この時期に成立したと考えられている。〔山岸 1993〕

経塚

平安時代末から盛んになった末法思想の影響で、多くの地域で経塚が築かれた。神戸市域では灘区の瀧の奥経塚などが有名である。淡河川流域に経塚が築かれたのは室町時代前後で、その背景には当時の寺院勢力の隆盛や、経塚自身が現世利益・追善供養など理解され易いものへと変容したことが挙げられる。勝雄経塚（14）・北山経塚（15）・正神経塚（16）・投町経塚（17）・堀ケ岡経塚（19）が挙げられる〔兵庫県立歴史博物館 1993〕。大部分は、近世から昭和初期に発見され伝承が残っているのみであるが、勝雄経塚は平成6年度に山陽自動車道建設に伴い兵庫県教育委員会により調査が行われ、詳細が明らかになっている。〔松岡 1996〕経塚は、淡河盆地西端の丘陵南斜面に素掘りの土坑を掘り、丹波焼の甕を据え置き、その中に法華経8巻を収めた金銅製の經筒を入れている。經筒の表面には享禄3年（1530年）の銘が刻まれてあった。



- | | | |
|--------------------|--------------|--------------|
| 1. 騎維遺跡（弥生～中世） | 13. 天正寺廃寺 | 25. 僧尾城跡 |
| 2. 淡河中村遺跡（绳文～中世） | 14. 聖道經塚（室町） | 26. 尾上城跡 |
| 3. 淡河城遺跡（古墳・鎌倉～戦国） | 15. 北山経塚 | 27. 奥遺跡（中世） |
| 4. 萩原遺跡（绳文・中世） | 16. 正神経塚 | 28. 上中遺跡（中世） |
| 5. 萩原城跡（绳文・中世） | 17. 投町経塚 | 29. 南浦遺跡（中世） |
| 6. 淡河木津遺跡（中世） | 18. 津ノ上経塚 | 30. 蔡田遺跡（中世） |
| 7. 行原遺跡（中世） | 19. 磬ヶ岡経塚 | 31. 筑前遺跡（中世） |
| 8. 東畠遺跡（中世） | 20. 稲雄城跡 | 32. 野所遺跡（中世） |
| 9. 中山遺跡（中世） | 21. 天正寺城跡 | 33. 石峯寺 |
| 10. 中山大粒池遺跡（绳文） | 22. 東畠城跡 | 34. 天満神社 |
| 11. 天正廃寺 | 23. 北畠城跡 | 35. 淡河八幡神社 |
| 12. 石峯寺跡（鎌倉～室町） | 24. 圣岡城跡 | |

第4図 騎維遺跡と周辺の遺跡

中世城郭

鎌倉時代後期頃には莊園制が崩壊し始め、地方有力層が台頭する。淡河地域は三木・吉川・三田に開まれた交通の要所として重視され、流通経路の要である淡河川流域を押さえたため、淡河城（3）、萩原城（5）、天正寺城（21）、北畠城（23）、東畠城（22）、僧尾城（25）などの中世城郭が出現する【兵庫県教育委員会 1976】。当時この周辺を本拠地として活動していたのは淡河氏であり、萩原城・淡河城は居城として使用されていた。特に萩原城は神戸市教育委員会により二の丸部分が調査され、多数の掘立柱建物・土坑などの遺構、土師器・須恵器・陶磁器・弾丸などの遺物が検出し、さらに横矢・楔形などの城郭

の構造が明確になった〔黒田 1996・1997・1998〕。存続期間は播磨国淡河莊地頭職の中嶋氏による建治2（1276）年の築城から、天正7（1579）年の廃城までの300年間と文獻により判明していたが〔兵庫県史編集専門委員会 1987〕、出土遺物からも同年代に城郭が存続していたことが明らかになった。また勝雄地域にも、経塚と同地点に勝雄城（20）が存在していたようであるが、平成6年度の兵庫県教育委員会による調査では確認されていない〔山下 1996〕。これらの中世城郭は安土・桃山時代には、羽柴秀吉の三木城攻めに関わる戦禍にみまわれ、次々に廃城に追い込まれていく。城郭以外に淡河本津遺跡では居館と推定される掘立柱建物群、また萩原遺跡では都城宮域内でしか発見例がない六角形井戸が検出されており〔村尾 1999〕、当地域の有力者層の隆盛がうかがうことができる。

近世以降

近世以降、全国的な耕地開発が進む中、淡河全域で大規模な新田開発が行われていったものと考えられる。萩原遺跡では灌漑用導水管が〔岩崎 1997〕、勝雄遺跡では近世の掘立柱建物が〔岡田 1999〕、平成10・11年度に調査が実施された南僧尾地区でも、近世の掘立柱建物や井戸などが検出されている。現在数多く見られる開析谷をせき止めた溜池や、北・南僧尾地区に現在も残る棚田の情景は、この頃に完成されたと考えられる。この頃、地域内の紐帯を深めるため寺社も整備され、その影響もあり再建される寺社も少なくなかった。勝雄地区の淡河八幡神社が寛延年間（1748～1751年）に現存の建物に再建されたことが、棟札の記載から判明している〔山岸 1994〕。

また、羽柴秀吉によっていわゆる脇往還である湯山街道は整備され、本町地区は湯山街道の宿場町として大いに賑わいをみせることになる。道標などの石造物が街道の要所要所に設置され、現淡河本町には本陣が置かれた。本陣は現在でも町内に残り、土塀や石垣が当時の繁栄を今に伝えている。



写真3
淡河本陣

第Ⅲ章 第1次調査

第1節 調査の概要

第1次調査は、淡河天満宮の北西、淡河疎水の南側を東西に施工される第11号支線排水路部分（第1トレンチ）、淡河天満宮の西にある天神池に予定される第64号水田切り土工部分（第2トレンチ）、第64号水田の西に接する第17号支線排水路の一部（第3トレンチ）について調査実施した。

第1トレンチ 全長136m、幅3～4mの排水路部分の調査であるが、現況の農水路保護のため実際に調査を実施した部分は、幅2.1m～3.8mである。基本層序は、現耕作土・床土の下層に旧耕作土があり、その下層に灰色シルトの遺物包含層が検出される。この遺物包含層直下に黄灰色シルトの造構面を検出した。

第2トレンチ 基本層序は、耕作土・床土・旧耕作土、その下層に遺物包含層である明灰色粘性砂質土が調査区全域に堆積していた。トレンチ全体の傾向として北西から南東に緩やかに傾斜して、所々に旧地形と考えられる段落ちや落ち込みがみられる。これらの落ち込み内からは、室町時代の須恵器片が出土しており、室町時代以降に水田造成が相当な規模で行われたと考えられる。

第3トレンチ 排水路予定地全長185mのうち東部の74mについて調査実施した。調査区の東部は急勾配の段丘斜面、西部は緩やかな段丘面にあたる。東部の段丘裾付近では3面の造構面を検出した。第1造構面ではピット8ヶ所を検出した。ピットは径20cm前後のもので、なかには深さ28cm前後を測り、柱を抜き取った後、拳大の砾を充填するものもある。第2造構面では溝状の落ち込みを検出した。第3造構面では2ヶ所のピットを検出した。段丘斜面では耕作土直下で径30cm、深さ10cmのピット1ヶ所を検出した。西部の段丘面では、不整形な落ち込み・畦・ピット多数を検出したが掘立柱建物等の明確な造構は検出できなかった。

(1) 検出造構

第1トレンチ 調査区東部で18ヶ所のピットを検出した。ピットは径20cm前後で、深さ20cm程度であるが、掘立柱建物としてはまとまらなかった。ピットの中には、人頭大の河原石が充填されているものもあった。ピット内からは少量の土器片が出土した。

S X01 調査区西部で検出した性格不明の落ち込みで、矩形に15m×3mの範囲で緩やかに落ち込み、さらに東側に5.7m×1.0m、深さ10～17cmの矩形の掘形を一段掘りこんでいる。埋土内からは、奈良時代後半～平安時代前半、中世の土器が出土している。

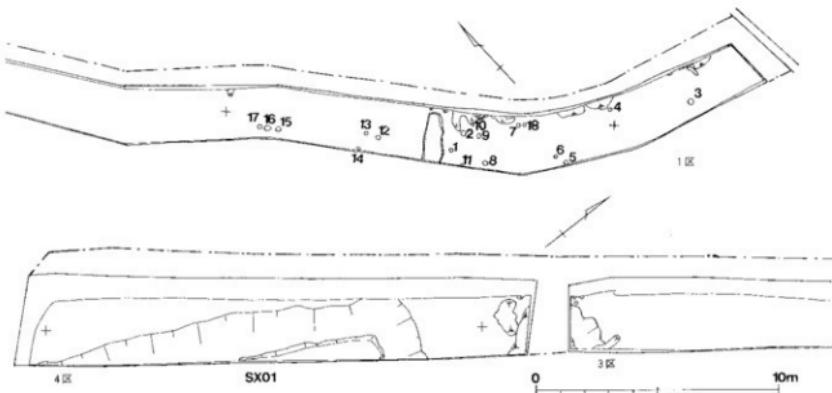
第2トレンチ 調査区全域で柱穴は検出されたが、特に調査区中央部から北部で高い密度で検出された。柱穴の多くが直径25cm前後、深さ25cm前後の円形の柱掘形であるが、調査区中央北よりに検出した柱穴群は、一辺50cm前後、柱痕跡径20cm前後の方形掘形で柱の抜き取り痕跡が明瞭なものも一部ある。この大型方形の柱掘形群の上面には、奈良時代の須恵器を含む暗茶褐色土が被覆していた。この大型方形の柱掘形群でも掘立柱建物としてはまとまらなかった。

土坑 検出された土坑は、規模・形状は下表のとおりである。

遺構名	規模 (m)	平面形	検出状況
S K01	長径1.2・短径0.7・深さ0.25	楕円	断面形舟底状。人頭大・学大の河原石、須恵器出土。
S K02	長径1.2・短径0.4・深さ0.21	長楕円	中央部が深くなる。出土遺物なし。
S K03	長径1.5・短径0.7・深さ0.10	不定形	断面形皿状。出土遺物なし。
S K04	長径3.0・短径1.2・深さ0.20	不定形	断面形皿状。出土遺物なし。
S K05	長さ3.6・幅0.6・深さ0.10	溝状	断面形U字状。出土遺物なし。
S K06	長径2.8・短径1.5・深さ0.20	不定形	断面形皿状。出土遺物なし。
S K07	長径1.7・短径1.1・深さ0.20	不定形	断面形舟底状。埋土から須恵器・上部器出土。
S K08	長径1.7・短径1.1・深さ0.21	円形	断面形皿状。出土遺物なし。

表2 第1次調査 土坑一覧

S X01 調査区南部で検出した鉢型の溝状遺構である。幅80cm、深さ10cm前後で断面形U字形である。南側コーナー部で弥生土器台形上器が出土した。



第5図 第1トレンチ遺構平面図

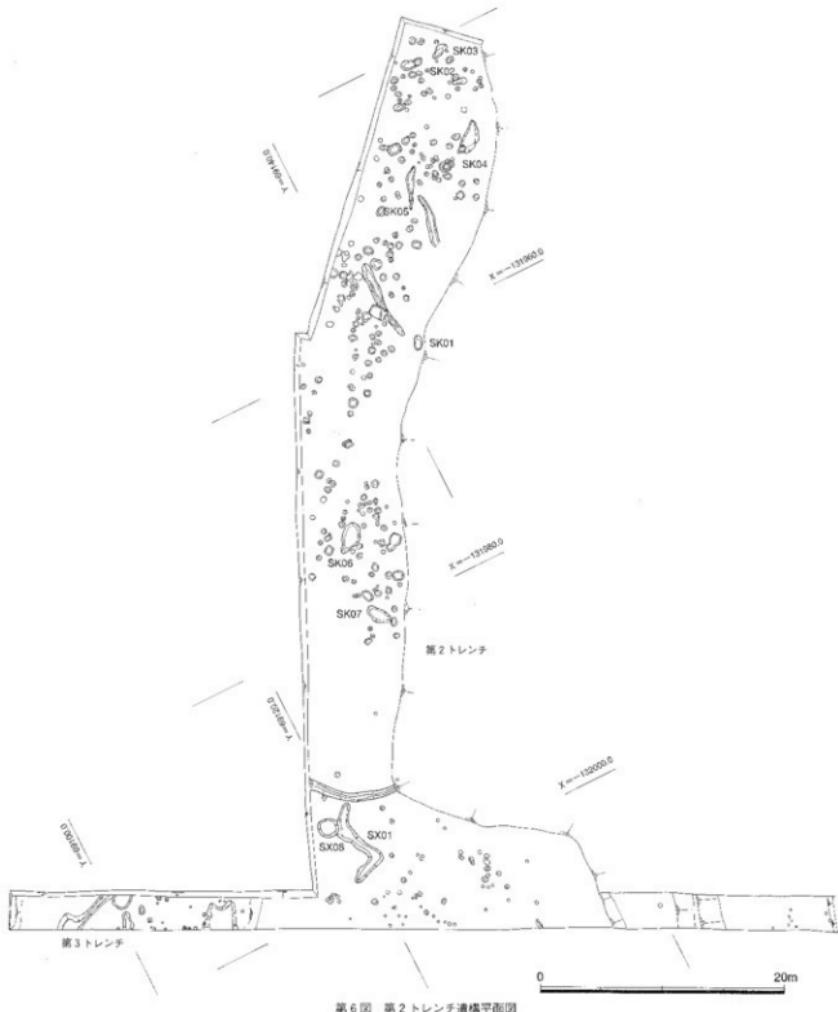
(2) 出土遺物

第1トレンチ 坝A 1、蓋2は落ち込み埋土、坝底部3は落ち込みの底部で検出したS X01から出土した。

坝A 1は中央で窪む底部に、直線的に伸びる体部をつけ、口縁部をやや外反させる。底部はヘラキリ痕跡を残し、粗くヘラケズリしている。体部および器内面は回転ナデで調整する。

蓋2は、平坦な頂部に円環状のつまみを貼り付ける蓋片である。頂部はヘラケズリ、内面は仕上げナデを行なう。金属容器の蓋の模倣品である。

坝底部3は、やや内側に高台をつくる底部に内弯する体部がつく。高台は外側にふんば



り、内側に接地面をもつ。底部内面はヘラミガキを行っているが、他は回転ナデで調整する。

第2トレンチ 須恵器皿4・6、土師器皿7、須恵器蓋5、坏B8、土師器壊9は遺物包含層、須恵器坏B10は落ち込み埋土、須恵器捏ね鉢13はピット内、土師器擂鉢12はSK01埋土内、弥生土器台形土器11はSX01コーナー部から各々出土した。

須恵器皿4は、平底の底部に直線的に伸びる口縁部をつける。底部は板状で分厚く、糸切り底である。法量は口径8.0cm、器高1.0cmである。全体に自然釉がかぶっている。

須恵器皿6は、糸切りした中央がやや窪む底部に直線的に伸びる口縁部をつける。全体に回転ナデ調整を行なう。法量は、口径9.0cm、器高1.7cmである。

土師器皿7は、平底の底部にやや内湾する口縁部をつける。全体にナデ調整を行なう。法量は、口径7.0cm、器高1.7cmである。

須恵器蓋5は、ヘラケズリした頂部と口縁部の境は円線で画する。口縁部は屈曲せず、ほぼ直角に折り曲げて端面をつくる。

須恵器坏B8は、内湾気味に立ち上る体部に、体部直下に外に踏ん張る高台をつける。土師器壙9は、直線的に内傾する体部に短く外反する口縁部をつくる。口縁部と体部の境は断面三角形の凸帯によって画される。底部は欠くが、丸みのある平底と推定される。口縁部は内・外面とも回転ナデ、体部上半はナデ、下半は横方向のタタキ、底部は横方向のタタキで、体部とは別に行っている。

須恵器坏B10は、直線的に立ち上る体部に、やや外反する口縁部をつくる。高台は、体・底部の境のやや内側に少し外に踏ん張って貼り付けられている。全体に回転ナデによって仕上げる。法量は、口径14.4cm、器高4.2cmである。

土師器擂鉢12は丸く内湾して立ち上る体部に、短く外反する口縁部をつける。口縁部と体部の境は、外上方につまみ上げた鍔で画する。口縁部内外面と体部外面は回転ナデ、体部内面は粗いハケ調整を施す。底部内面は摩滅していて、使用痕と考えられる。

須恵器捏ね鉢13は、直線的に立ち上る体部に、内側に折り曲げて内傾面のある口縁端部をつくる。全体に回転ナデによって仕上げられるが、底部に接する体部内面は摩滅して回転ナデ痕跡は明瞭でない。使用した痕跡と考えられる。法量は、口径27.0cm、器高は推定15.2cm前後である。

弥生土器台形土器11は、やや外反する脚部に、中央部に凹部をもつ平坦面をつくる。平坦面は12.4cmを計測する。台形土器としては小型品である。

須恵器直口壺14、須恵器捏ね鉢15は遺物包含層出土、土師器壙16は現耕作土堆疊造成土内から出土した。

須恵器直口壺14は、丸い体部にやや外傾する短い口縁部をつける。口縁端部は膨ぼし、やや内側に水平につまみ出して端面をつくる。内面及び口縁部は回転ナデで仕上げ、体部は横方向のタタキを行なう。

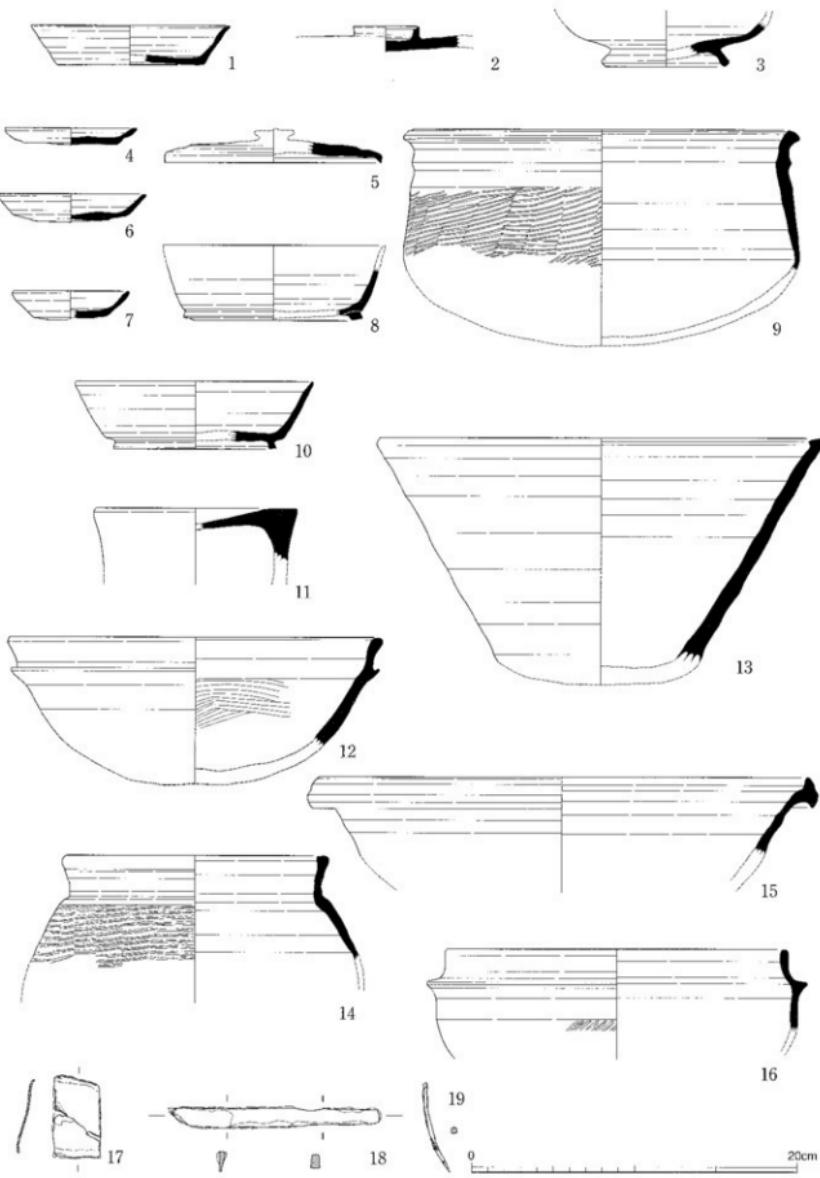
須恵器捏ね鉢15は、やや内湾気味に立ち上る体部に、外上方に外反する口縁部をつくる。口縁部は上下方に拡張して玉線状につくる。玉線部に自然釉がかぶる。法量は口径30.0cmである。

土師器壙16は、丸い体部に内湾する口縁部をつくる。口縁部と体部の境は断面三角形の鍔で画される。口縁部と体部上半の内外面は回転ナデ、体部下半外面はタタキで調整する。

17は薄手の銅板である。両小口を折り曲げ、木材などの化粧板として用いられたものか。緑青が出ておりと鍍金していたか不明。18は全長13.0cm、刃部長7.9cm、茎長5.1cmの平造りの刀子である。19は包含層出土の鉄釘で木材片を付着させる。丁頭を欠く。

第3 トレンチ

金属製品



第7図 第1次調査 漢物実測図

第2節 小 結

第1次調査は勝雄遺跡の西部段丘上において実施した。各トレンチにおいて検出した遺物包含層からは弥生時代・奈良時代・鎌倉時代・室町時代の各時期の遺物が出土している。また、この遺物包含層に被覆された水田畦畔が第2トレンチ・第3トレンチで検出されており、この段丘上における水田開発が室町時代以降に行われたことを示している。

各トレンチにおいて検出した遺構は、柱穴・ビットについては一部に集中しているが散漫であり、上記した室町時代以降に行われた水田開発による造成によって深い遺構、第1トレンチのビット群や第2トレンチの柱穴群などが残存したといえる。

従って、第2トレンチ検出の奈良時代の方形柱穴群は奈良時代集落の広がりを示し、相当規模の集落があった可能性が考えられる。また、性格不明のS X01から出土した台形土器は弥生時代第Ⅲ様式～第Ⅳ様式にみられる器種であり、段丘上に弥生時代中期の遺跡の存在を窺わせる。



写真4 調査作業状況（第1次調査 第2トレンチ）

第Ⅳ章 第2次調査

第1節 調査の概要

調査対象地区は2ヶ所に分かれており、何れも圃場整備工事の水路設置部分にある。

第1次調査地の第3トレンチ西側延長部分の調査区を第4トレンチ、約200m南西側に位置する調査区を第5トレンチと呼称して調査を実施した。

以下、各トレンチ毎に記述する。

(1) 検出遺構

第4トレンチ

幅3m、長さ約111mの調査区である。現況は10枚の水田に分かれており、この水田の区画毎に、東側よりA～J区の小調査区名を付し調査を実施した。

基本層序

調査区は西に高く、東に低い丘陵斜面に位置しており、基本層序も厳密には一様ではないが、基本的に現耕土・床上の下層に旧耕土層を挟んで、数枚の灰色系のシルト層が存在する。これらのシルト層は、上層は砂粒が多く含み、下層は砂粒があまり含まれず粘性の強い土層という違いがあるもの大きく捉えれば旧耕土層にあたる。この下層で基盤層である淡黄灰色シルト層上面を検出した。調査区は丘陵斜面に位置しているため、基盤層の高さも、西端のJ区では134.7m、東端のA区では129.8mと約5mの標高差がある。

全調査区で中世の造構面を確認したが、A～C区、E・F区では上層でもう1面造構面を確認した。A～C区、E・F区の第1造構面で確認したのは、中世のスキ溝痕である。

全体を通して確認した遺構面では、溝2条、不定形及び円形の土坑・落ち込み多数、ビット多数などを検出した。包含層及び造構内からの出土遺物は大半が中世の須恵器・土師器であり、第1次調査で比較的多く出土した奈良時代末～平安時代初めの遺物は極少量であった。なお遺構名については、小調査区毎に個別に遺構番号をついている。

A区 SD01

幅70cm、検出した長さ4m、最深部の深さ7cmを測る。調査区内を南西～北東方向に走り、南西側は調査区外に延びる。遺物は極少量しか出土していないが、磨耗した石器や奈良時代末頃の須恵器、中世の須恵器・土師器などが出土している。

B～G区

不定形及び円形の落ち込みを多数検出したが、人為的な遺構ではなく、自然地形の窪みに湿地状に堆積した上層の灰色シルトが入り込んだものと判断される。

H・J区

遺構は検出されなかった。

I区 SD01

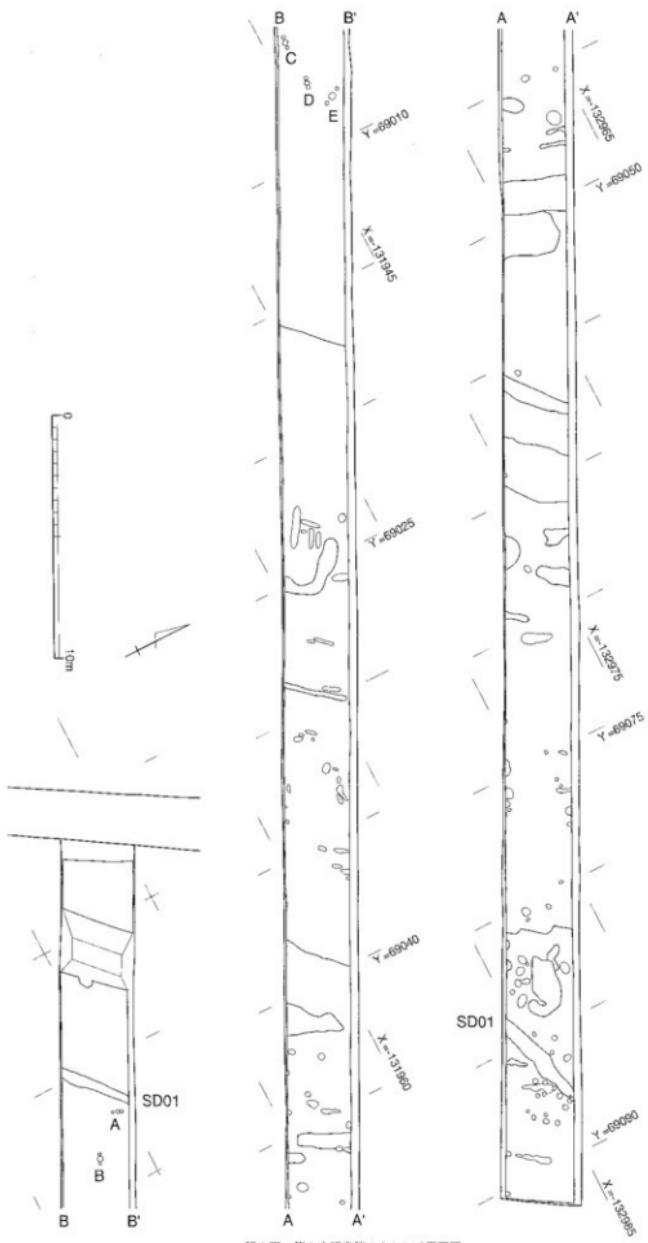
幅30～50cm、深さ8～17cmを測り、調査区内を南西～北東方向に走る溝状の遺構で、北東・南西の両側ともこの調査区外に延びるが、北東側が浅く、南西側が深い。中世の須恵器・土師器が比較的多く出土した。

S D01以西では遺構が確認されておらず、居住域を区画するものである可能性も考えられるが、明確ではない。中世の須恵器・土師器が出土している。

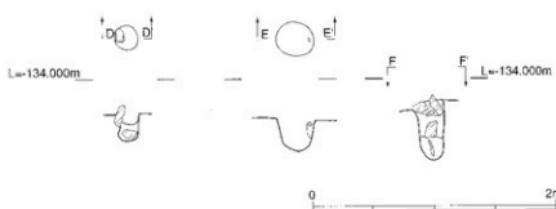
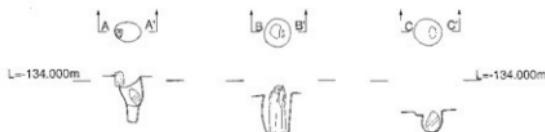
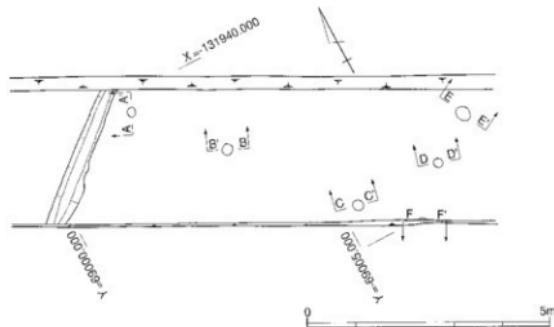
ビット

I区で検出したビットは6基で、何れも径20cm前後のものである。

S P01・04・06の柱穴内部では拳大の躰が検出された。いずれも柱を据え置くための基礎や支柱として使用されたものであろう。また、S P02は径13cm、高さ39cmの柱材が残存していた。柱は、面取り等の加工が施されているが、一部表皮が残っている。また、S P



第8図 第2次調査第4トレンチ平面図



第9図 第4トレーニチ I区ピット平面・断面図



第10図 第4トレーニチ I区北壁土層図

04では、柱材は抜き取られているが、礎盤の一部と考えられる木が遺存していた。遺物は各ピットとも極少量しか出土していないため詳細な時期については不明であるが、中世のものと考えられる。これらのピットはその状況から考えて掘立柱建物の柱穴と考えられるが、調査区内でそのまとまりを捉えることは出来なかった。

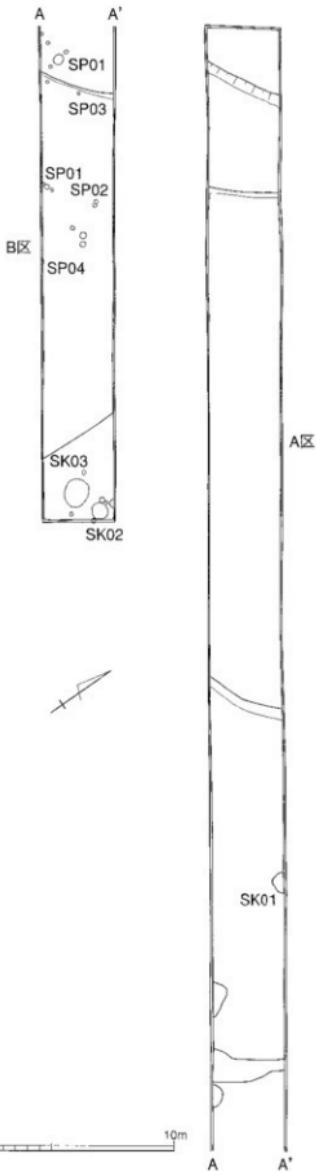
第5トレンチ 幅3m、長さ約66mの調査区である。
西側の約50m部分をA区、東側の約16m部分をB区と呼称する。

A区 床土や旧耕土の下層に灰色のシルトあるいは粘土層が堆積しており、中世の須恵器・土師器が出土している。後世の削平・攪乱によりこの灰色シルト層の堆積状況には違いがみられ、調査区西部では厚さ4~20cm、中央部では17~28cm、東部では15~23cmを測る。この灰色シルト層は第4トレンチで検出したものと同様に粘性の強い土層で、この下層で確認した(淡)黄灰色シルト層上面が遺構面である。遺構が検出されたのは、東半部分のみであり、遺物の出土が比較的多いのもこの東半部である。検出した遺構は、土坑1基、ピット3基である。大半は中世の遺構と考えられるが、土坑とその西側のピットは灰色シルト層上面より掘り込まれており、他の遺構より新しい時期に属するものと考えられる。

ピット ピットは径10cm前後のもの3基と径44×39cmで深さ11cmのもの(S P01)1基である。

S P01 S P01の埋土は2層に分かれしており、底面に有機質土層が堆積し、上層に(暗)緑灰色シルト層が堆積していた。中世の須恵器・土師器が出土している。

B区 後世の削平・攪乱を大きく受けており、床土の直下で淡黄灰色シルト層及び地山面である淡灰色砂礫層の上面を検出した。遺構は西半部と東端部で検出されたが、埋土の状況から判断すると東端部で確認した遺構は西半部で確認した遺構より新しい時期のものと考えられる。検出した遺構は、土坑2基、ピット10基である。



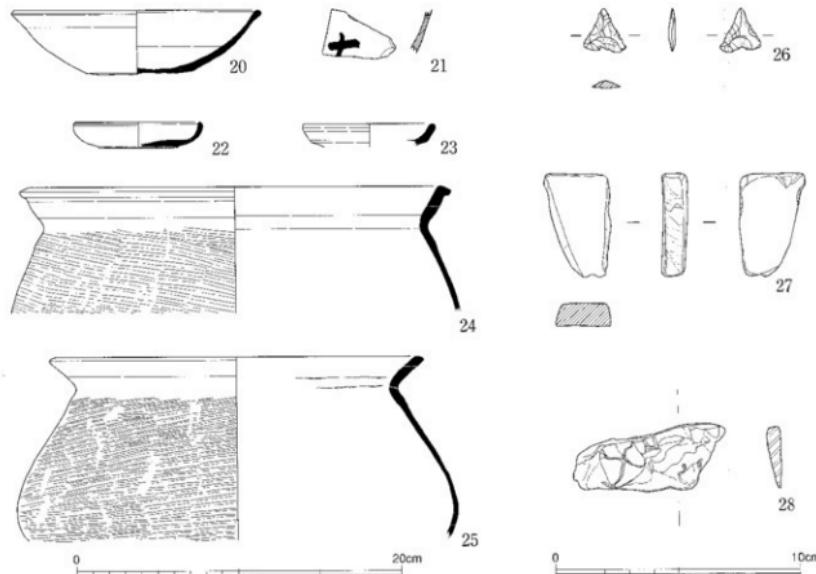
第11図 第5トレンチ平面図

- S K01 1.28×0.98mの平面形がやや歪な楕円形を呈する土坑で、深さ10cmを測る。遺物は出土していないため、詳細な時期は不明である。
- S K02 0.76×0.73mの平面形が円形の土坑で、深さ16cmを測る。土師器の小片が出土しているが、明確な時期については不明である。
- ピット B区で検出したピットは径15~34cm、深さ5~25cmのものである。調査区内で掘立柱建物としてのまとはみられない。S P01（径30×27cm、深さ12cm）より柱材あるいは陸盤の一部と考えられる木が出土しているが、柱穴の底部分が残存しているのみであり、詳細は不明である。
- 土器集中部 B区中央部のS P04の周辺で地山面上において、中世の土器がやまとまって出土した。この土器を直接含んでいた層は暗灰色シルト混じり細砂層（旧耕土層）であるが、元来遺構面上あるいは遺物包含層中に含まれていたものが後世の耕作時に攪拌されたものと考えられる。

(2) 出土遺物

第2次調査で出土した遺物は28点入りコンテナで6箱あるが、器形の全体がわかるほどに復元できるものはほとんどない。図化できたのは土器6点、石器2点の計8点である。

塊20は第5トレンチB区の中央部で出土したもので、口径15.0cm、高さ4.0cm、底径6.5cmを測る。



第12図 第2次調査出土遺物実測図

墨書き器21は須恵器の塊の体部外面に墨書きがみられるものである。「右」、「左」、「土」などの可能性があるが、小片のため断定できない。

小皿22と23はともに小皿で、22の体部は内弯し、口縁端部は丸くおさめるものである。口径7.4cm、高さ1.5cmを測る。

坏や皿、堀が出土しているが、図化できたのは堀2点である。

埴24と25は堀で、外面はタタキ成形である。24は口径24.9cmで、体部下半以下を欠く。口縁部はヨコナデ、体部外面は3本/cmの左上がりのタタキ、内面はナデを施す。25は口径22.0cmで、体部下半以下を欠く。口縁部はヨコナデ、体部外面は4本/cmの右上がりのタタキ、内面はナデを施す。体部上半から頸部の一部にススが付着している。

石器と認定できるものは2点である。

石镰26は長さ1.8cm、幅1.7cm、厚さ0.25cmを測る。全面的に風化による磨耗が顕著である。形態的には绳文時代のものと考えられるが、第4トレンチA区のSD01より中世の土器と共に出土している。後世の流入による結果と考えられる。

砥石27は砥石と考えられる石製品で、表・裏面ともによく使用されている。長さ4.25cm、幅2.65cm、厚さ0.95cmを測る。

第4トレンチの調査では、大半の地区で灰色系のシルト層から鉱滓が出土したほか、A区では鉄製品も出土している。28は長さ6.55cm、幅2.7cm、厚さ0.6cmを測る。鎌の可能性が考えられる。詳細は分析の結果を待たねばならないが、鉱滓のなかには大型・小形の楕円形滓が出土している。

これ以外に、第4トレンチの包含層中より青磁片2点、白磁片1点出土したほか、青磁1点を表採しているが、図化できなかった。

第2節 小 結

第2次調査では、第4トレンチの大半の地区で灰色系のシルト層から比較的多くの遺物が出土したが、建物跡などの明確な遺構は検出されなかった。この状況は東側に隣接する第1次調査の第3トレンチなどの状況と一致する。これらの地区は湿地状の地形に灰色系のシルト層が堆積しており、この地形的な特徴のために、居住域としての利用に適さず、水田としての土地利用しかなされたものと考えられる。ただし、第4トレンチでも標高が高いところに位置するT区では、掘立柱建物の一部と考えられる柱穴を検出し、柱穴の一部には柱材が比較的良好な状態で遺存していた。このことは、標高が高い地区では居住域として積極的に利用されていたことを示しているものと言えよう。第5トレンチについて、ピットを少数検出したが、掘立柱建物としてのまとまりを確認するには至らなかった。B区では遺物包含層が残存しておらず、現耕土の下層はすぐに地山面となっている。後世の削平を受けていると考えられることから、当時の状況を正確に把握することは困難である。しかし、わずかながら遺構・遺物を検出していることから、周辺に居住域が存在することは充分考えられる。

第V章 第3次調査

第1節 調査の概要

A. 第1調査区-1

淡河川の右岸扇状地上に鎮座する淡河八幡宮の東・北に接する排水路予定地部分にあたる水田において、現水田区画に沿ってA～Eまでの小地区割りを行って調査実施した。

A・B区では、耕作土・床土直下に黄褐色粘質土ないし褐黄色礫層の基盤層となり、遺物包含層は残存していなかった。B区では礫面上でピット9ヶ所と性格不明の落ち込みを検出した。ピットは柱痕跡を残すものもあったが、明確な建物等にはまとまらなかった。なお、A区東端は東側に急激に落ち込み、淡河川の河川敷に至っている。

C・D・E区は緩やかに南北方向に傾斜する平坦面が続き、現在の淡河八幡宮もこの平坦面に社域を占地させているものと考えられる。

このうちC・D区では、旧耕作土下に中世～飛鳥時代の遺物を含む遺物包含層が堆積し、その直下淡灰褐色シルトないしは淡黄灰色シルト上面で遺構を検出した。一方E区は、調査区中央を東西に水田造成時につくられた段落ちが走り、段より南側は削平を被りながら遺物包含層を残存させていた。北側では、遺物包含層はほとんど残存させていなかった。いずれにおいても、遺構は淡黄褐色シルト上面で検出した。

(1) 検出遺構

豎穴住居

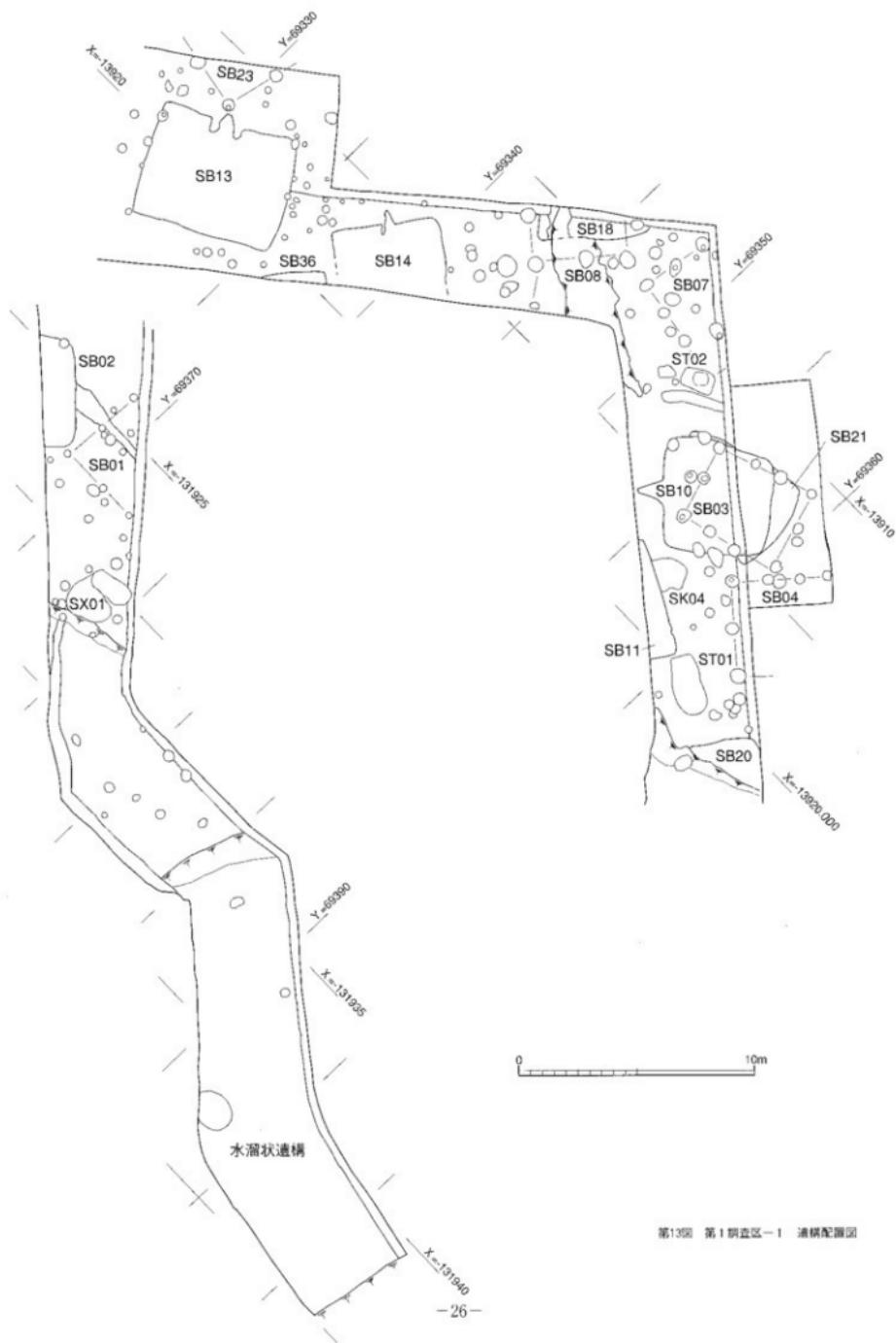
C区西部南壁沿いで検出した方形の豎穴住居である。西辺はD区との境となる現水田高畦畔造成によって削平をうけているものの、45cm前後の壁体を残し、壁溝も幅20cm、深さ10cm前後でめぐる。東辺は、壁体を30cm前後残し、壁溝は幅25cm、深さ10cm前後残す。一方北辺は、壁体を5cm前後しか残さず、壁溝も一部でめぐるに過ぎない。S B02の規模は、東西4.5m、南北1.5m以上を計測する。支柱は、北東隅と南西隅で検出した。支柱穴は径40cm～50cm、深さ35cm前後の円形掘形で、北東隅の支柱は掘形の東肩に径15cmの柱を寄せて据え、南西隅の支柱では径20cm前後の柱を中央に据えて構えている。竈は調査区外で取り付けられているものと考えられる。住居址床面は、豎穴を淡灰褐色シルトの基盤層まで掘り下げた後に、暗黄褐色粘質土（茶褐色砂混じり）を5cm～12cm前後貼り付けて住居床を水平に仕立てている。この後に、壁溝を掘りくぼめている。出土遺物は埋土内より土師器片が出土している以外は、明確な遺物は出土しなかった。

S B20

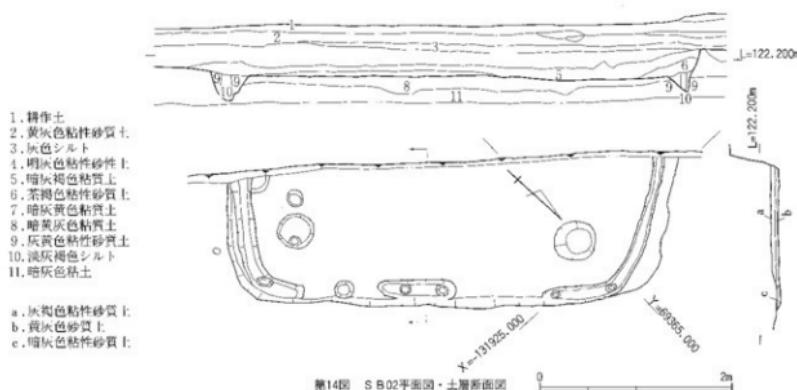
D区東端C区との畦畔際で検出した方形豎穴住居である。豎穴住居の北東隅部を検出したと考えられるが、南西部は現代の水田造成時に削平によって失われている。S B20の規模は、東西3.0m以上、南北2.1m以上である。壁体は、残存状況が良好な西壁で深さ20cmを残し、幅25cm前後、深さ10cm前後の壁溝をめぐらしている。北東隅部の壁溝内には、径8cm、深さ5cm前後のピットを検出した。埋土内より須恵器蓋29が出土している。

S B11

D区の中央南壁沿いで検出した方形の豎穴住居である。豎穴の南側は調査区外で、北辺と東辺の一部、北西隅部を検出した。豎穴住居の規模は、北辺（東西）で4.8m、東辺（南北）で1.2m以上を計測する。壁体は20cm～25cm前後計測し、幅22cm～14cm前後、深



第135図 第1胡蓋区-I 潜構配図



さは床面から10cm前後の壁溝をめぐらせる。壁溝内からは須恵器壺A31や土師器細片が出土した。床面は、竪穴全体をほぼ壁溝の深さまで掘りこんだ後に、黄褐色粘性砂質土を厚さ10cm～20cm前後敷き詰め、さらに床面の水平を確保するため、西側で2cm前後の黒灰色粘性砂質土、東側で厚さ3cm前後の灰色粘性砂質土の貼り土を行っている。なお、これら床形成土内からは遺物の出土はなかった。支柱の位置は不明で、調査区外に位置すると考えられる。床面上では北東隅部のやや西よりで貯蔵穴状のピットを検出した。ピットは南北60cm、東西55cm、深さ16cmのほぼ方形の掘形で、断面形は皿状である。ピット内の埋土は黒灰色シルトである。埋土内からは、須恵器壺33や土師器片が出土している。

S-B03

D区の中央と東側拡張部で検出した方形の竪穴住居である。南辺中央に竈を設け、各辺に周壁溝をめぐらせる。竪穴住居の規模は東西4.7m、南北4.9m、深さは床面まで14cmある。竈は南辺から70cm張りだす。平面形長ナスビ形で断面形舟底状の竈掘形を検出した。竈掘形の規模は長さ2.1m、幅80cm、深さは煙出し部で20cm、焚き口部で15cmを計測する。竈内からは、上層部から灰白色の竈壁体の残片と考えられる粘土片が検出されたが、竈壁



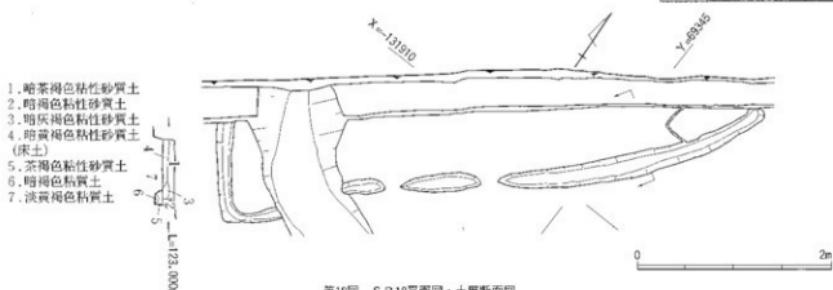
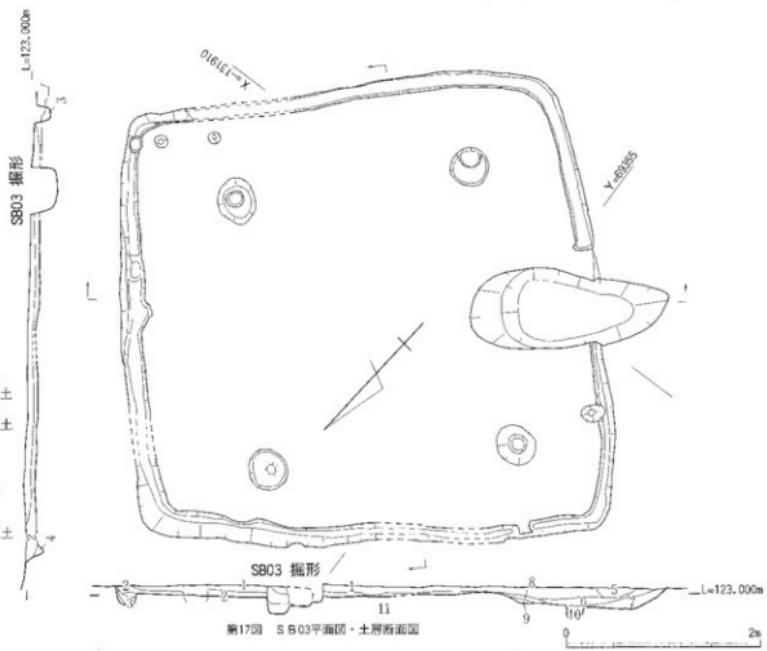
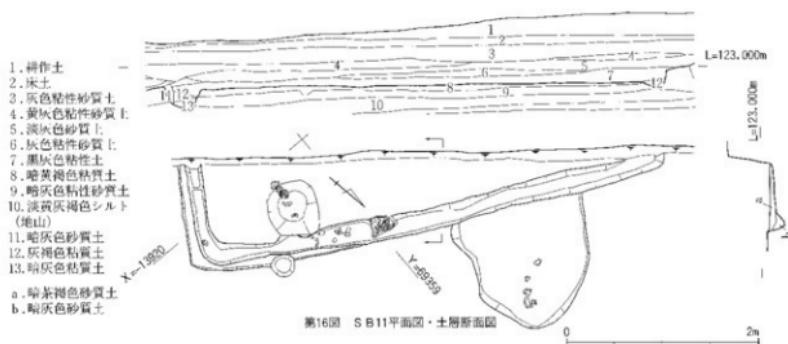
体は遺存しなかった。竪掘形の底部中央に径10cm前後、深さ5cmのピットを検出した。支柱は径40cm、深さ30cm前後の円形の掘形を掘り、竪穴住居隅部よりやや内側に4ヶ所検出した。支柱間の柱間は、東西で2.8m等間、南北2.5m等間を計測する。竪穴住居の床部は、南側で2cm、北側で7cm前後の貼り土によってほぼ水平な床面をつくっているが、竪穴の北側ではS B03造営前の竪穴住居S B21、S B21廃絶後のSK12を埋めたてて床面を形成している。出土遺物は、埋土内から比較的多量に出土したが、細片が多い。図化できる資料は、支柱掘形内から出土した蓋32がある。

S B21 D区拡張部中央、S B03の北側で検出された南北4.0m、東西1.5m以上の方形竪穴住居である。竪穴壁体はほとんど残存させていない。竪穴の大部分がSK12によって掘り潰められ、東辺の一部を検出するにとどまる。壁溝は、幅15cm、深さ5cm前後で、南壁・東壁の一部で検出したが、S B03の床下では検出できなかった。支柱の痕跡は確認できなかった。出土遺物は、埋土内から須恵器・土師器の細片が出土したが明確なものはない。

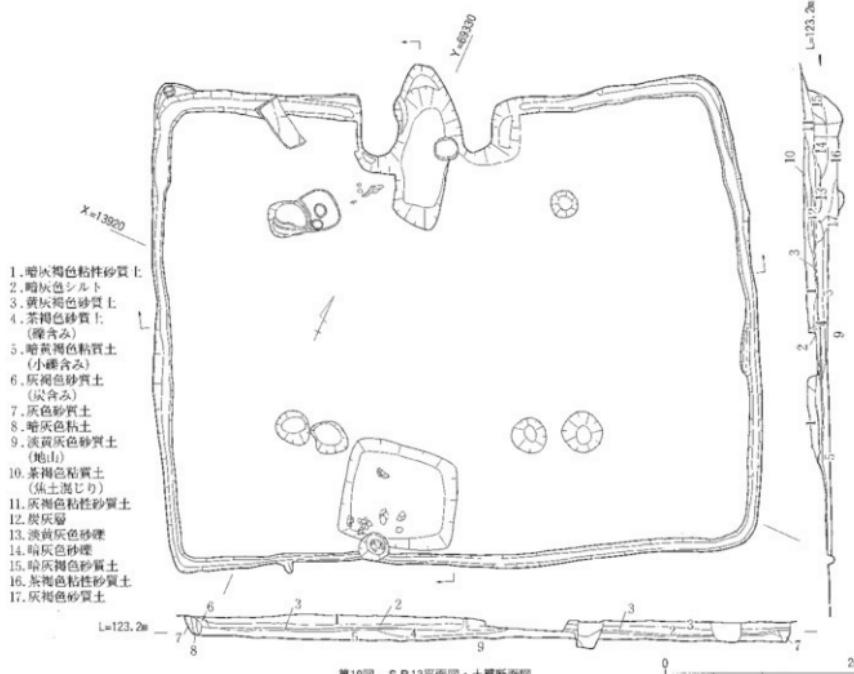
S B18 E区東部北壁沿いで検出した方形状の竪穴住居である。竪穴住居の西部は、南北に流れる近現代の素掘りの農水路によって分断されているものの、南辺と西辺の一部を検出した。壁溝は、一部が農水路によって削平されているが、幅12cm～20cm、深さ5cm程度で全周する。竪穴住居の規模は東西5.5m、南北1.3m以上で北側の大半は調査区外となる。壁体は床面まで5cm程度残存させている。床面は厚さ10cm前後の暗黄褐色粘性砂質土を基盤層黄灰色粘性砂質土(疊含み)の上に貼りつけている。

S B14 E区中央部で検出した方形の竪穴住居である。竪穴住居の南部は中近世における水田の造成によって削平されている。北辺に竪を設け、北辺と西・東辺の一部で壁体および壁溝を残存させている。S B14の規模は、東西4.6m、東西2.7m以上、壁体は残存状況の良好な北西部で20cm前後を残す。竪は、南北1.9m、東西(焚き口)で幅0.9m、深さ15cmの平面形が剣菱形で、断面形が舟底状の掘形を検出した。煙だし部は北辺から50cm張り出す。竪の壁体は、竪穴壁体から60cm内側、竪掘形沿いに内湾させながら灰白色粘土を積んで竪袖を構築している。竪は厚さ6cm前後の灰層を突き固め、竪掘形中央焚き口により支柱を立てて用いられたと考えられる。竪掘形内からは須恵器・土師器片が出土している。床面は貼りつけ床は検出されなかった。出土遺物は、床面の北西隅部で二次焼成を受けた状態で土師器壺40、他に竪周辺から須恵器壺38・39、土師器壺42が出土している。

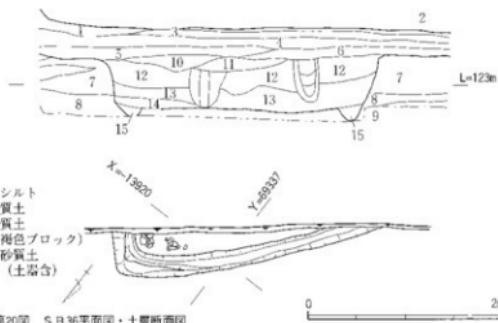
S B13 E区西部で検出した方形の竪穴住居である。北辺中央部に竪を設け、各辺に周壁溝がめぐる。S B13の規模は、東西6.2m、南北4.8mのやや長方形で、壁体は残存状況が良好な北西隅部で24cm(床面まで15cm前後)を計測する。竪は、長さ1.6m、幅0.6m、深さ28cm前後の長楕円形で、断面形舟底状の掘形を掘り、煙出し部は北辺から30cm舌状に張り出す。竪の壁体は、竪穴の壁体から造り付けられ、竪の壁体の袖は幅50cm～70cm(下端幅)、高さ20cm前後で竪掘形の中ほどまでハの字形に灰白色粘土によって造り付けられている。竪の内側には、炭化材及び灰層が床面を覆い、またその上面からは、長さ60cm、幅20cm、厚さ2cm～3cm前後の偏平な凝灰岩質砂岩の石材が北辺壁体に接して置かれていた。この凝灰岩質砂岩の石材は竪掘形の埋土内からも出土しており、竪使用時の竪壁体の一部であった可能性がある。床面のはば中央、竪焚き口から約90cm内側には、東西1.0m、南北0.3m

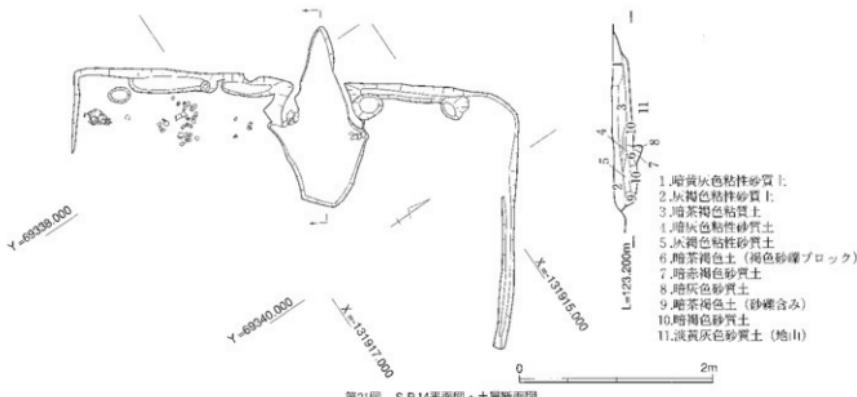


の範囲で赤く焼けた被熱面が検出され、屋内炉があった可能性がある。支柱は7ヶ所検出された。支柱は概ね南・北壁体より1.0m、東・西壁体より1.5m～1.8mの間隔をおいて据えられ、北東の隅の支柱を除いて建築当初の支柱位置から西へ各支柱を移動させて据え替えている。当初の支柱の間隔は、南北2.3m、東西2.5m等間、支柱据え替後の支柱の間



隔は、南北2.3m、東西で北側3.0m、南側2.5m等間を計測する。支柱の深さは40cm前後を計測する。床面には竈の向かい正面、南壁溝に沿って、一辺1.1mのほぼ正方形の貯蔵穴を検出した。貯蔵穴は、深さ10cm前後の皿状の断面形で、黒灰色シルトを埋土とし、埋



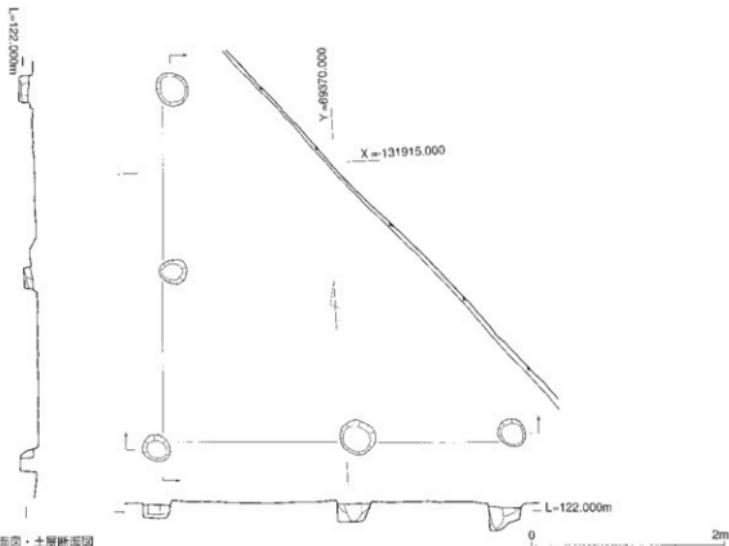


第21図 SB 14平面図・土層断面図

土内からは須恵器壺A35などの須恵器片・土師器片が出土した。堅穴の床面は、堅穴をほぼ周壁溝の深さまで掘り下げ、厚さ5cm~20cmの暗黄褐色粘性土（小礫混じり）を積んだ後、さらに厚さ3cm前後の黄灰色砂質土を貼り付け、床面を整えている。出土遺物は、貯蔵穴内で土器の集中があった他は、竪穴面・埋土内から土器細片が出土した以外はない。

SB 36

E区中央南壁沿いで検出した方形の堅穴住居である。南側の大半は調査区外となり、淡河八幡宮境内に含まれる。堅穴住居の北東隅部を検出したと考えられる。堅穴住居の規模は北辺2.6m以上、南北0.5m以上、深さ55cmを計測する。北・東辺には幅25cm前後、深



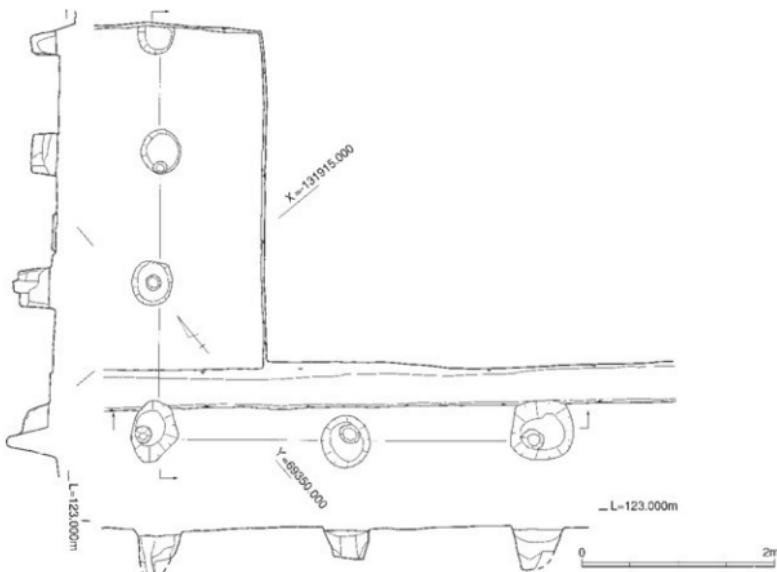
第22図 SB 01平面図・土層断面図

さ12cm~18cm前後の周壁溝がめぐり、北東隅部は肩が崩落している。北東隅部の床面上では土師器壙A43が出土した。

堀立柱建物

S B01

C区中央に位置する東西2間(3.6m)以上、南北2間(3.6m)以上の堀立柱建物である。建物の北東側半ば以上は調査区外となる。建物の方向は北2度東を探りほぼ真北方向である。柱間は東西で東から1.6m、2.0m、南北で1.8m等間を計測する。柱掘形は、直径25cm~35cm前後の円形の掘形に、直径15cm~20cm前後の柱痕跡を残すものもある。東柱は用いていない。



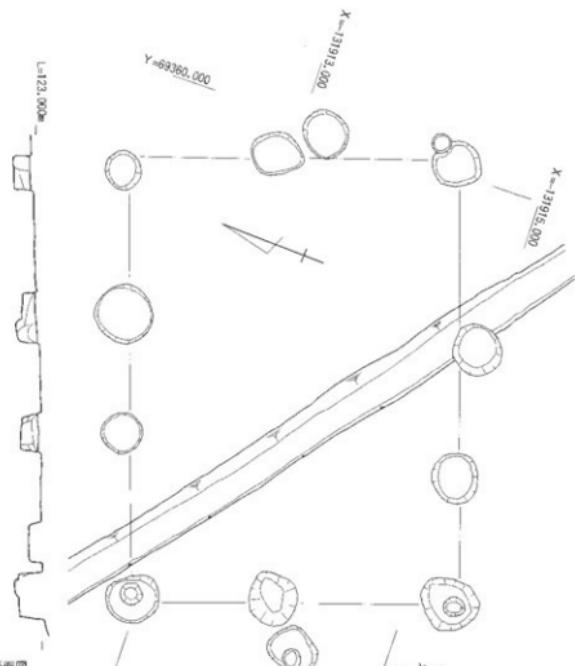
第23図 S B04平面図・土層断面図

S B04

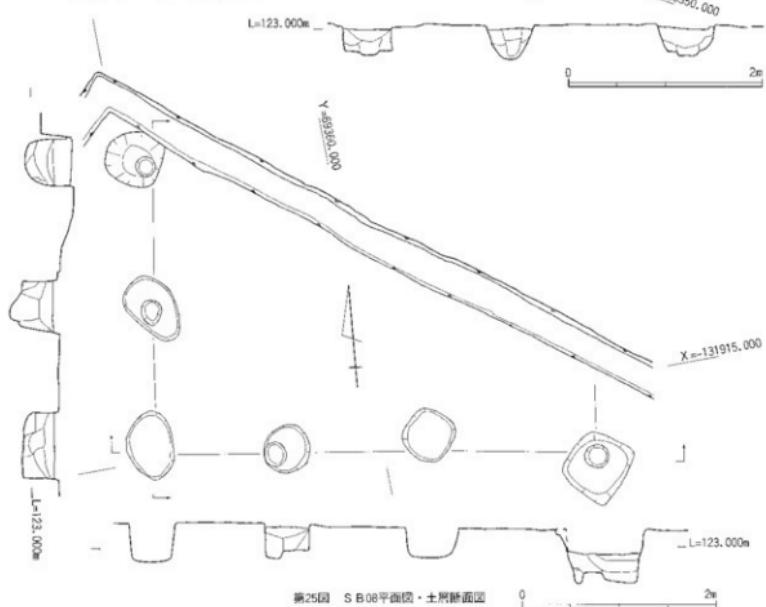
D区東部北壁沿いと、D区拡張部東壁沿いで検出した東西3間(4.0m)以上、南北2間(4.0m)の堀立柱建物である。建物の北東側は調査区外となる。建物の棟方向は北40度東を探る。柱間は桁行で1.5m等間、梁間で2.0m等間を計測する。柱掘形は、隅柱と梁間柱は直径50cm~70cm、深さ30cm~60cm前後の大型円形柱掘形に径20cm前後の柱痕跡が明瞭である。桁柱は直径40cm、深さ30cm~40cmの円形掘形に柱を据えている。桁柱のうち柱掘形4は径14cmの柱痕跡を残し、柱抜き取り痕跡が明瞭である。柱掘形内からは、土師器・須恵器片が出土しているが、時期を明確にできる遺物はない。

S B03

D区中央で検出した東西2間(3.4m)、南北3間(4.5m)の南北棟の堀立柱建物である。建物の方向は北18度西を探る。柱間は桁行(南北方向)で北から1.2m、1.2m、2.1m、梁間(東西方向)は1.7m等間を計測する。柱掘形は径40cm~60cmの円形または不整形な平面形で、20cm~30cm前後の深さを残している。柱掘形のうち北側桁柱の一部で40



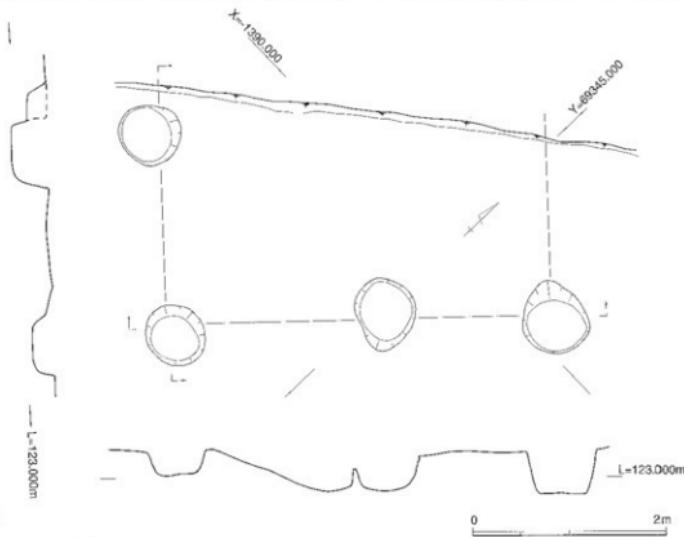
第24図 S B03平面図・土層断面図



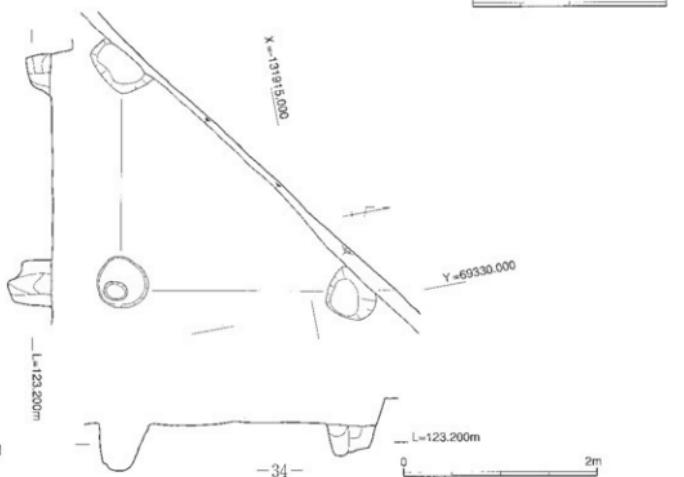
第25図 S B08平面図・土層断面図

cm×30cm大の表面平坦な河原石を据え礎盤としている。S B 03は堅穴住居 S B 10の廃絶後、ほぼ同じ位置に建て替えられている。柱掘形内からは、須恵器壺32、土師器壺37が出土している。

S B 07 D区西部で検出した東西3間(4.7m)、南北2間(3.0m)以上の掘立柱建物である。建物の棟方向は北10度東を採る。柱間は、桁行(東西方向)で西から1.4m、1.4m、1.8m、梁間で1.5m等間を計測する。柱掘形は梁間で径60cm~70cm、深さ50cm前後の円形ないしは不整形の比較的大型の柱掘形を掘り、径20cm~30cm前後の柱痕跡を残す。いずれの柱掘形も柱を抜き取った後に、暗黄褐色粘質土を抜き取り跡に充填している。桁行は、



第26図 S B 08平面図・断面図



第27図 S B 23平面図・断面図

一辺50cm前後の方形乃至は径40cm前後、深さ30cm前後の円形の柱掘形である。南東部の隅柱は、S T02の柱掘形を切り、一辺60cm、深さ60cmの方形の柱掘形を設けて、柱を堀えている。柱掘形内からは、土師器細片を一部で検出したが、時期を明確にできる出土遺物はない。

S B08 E区東部北壁沿いで検出した東西2間(4.0m)、南北1間(2.1m)以上の掘立柱建物である。北側の大部分が調査区外となる。建物の棟方向は北50度西を探る。柱間は、梁間で西から2.1m、1.8m、桁行で2.1mを計測する。柱掘形は径70cm前後、深さ20cm~50cmの円形乃至は不整形掘形である。柱痕跡は明瞭でない。また、梁間は近現代の溝によって削平され不明確である。

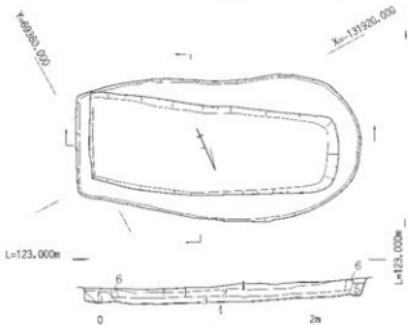
S B23 E区西端の拡張部で検出した東西1間(2.4m)以上、南北1間(2.4m)以上の掘立柱建物である。建物の南西隅を検出したと推定され、北東半の大部分は調査区外である。建物の棟方向は、南北方向で北10度東を探る。柱間は東西・南北方向とも2.4mである。柱掘形は、直径50cm前後、深さ30cm~50cmの円形で、径20cm前後の柱痕跡を残す。柱掘形内から飛鳥時代須恵器杯Bが出土している。

土坑 S K04 D区の中央で検出した不定形の土坑である。S B11によって南側は切られている。東西1.4m、南北1.2m以上、深さ10cm前後の規模を計測する。断面形は皿状をしている。底部から須恵器高坏34が1個体分出土している。

S K12 D区拡張部S B10の下層で検出した東西5.3m、南北5.5m、深さ30cm前後の方形の落込みである。断面形は概ね皿状を呈し、底部分で一段不整形に掘り下がる。埋土内からは須恵器・土師器の細片が出土しているが、時期の判明する遺物はない。

S K08 E区の内端、トレーナーが北へ屈曲する部分の隅で検出した不整円形の土坑である。西側約半分が調査区外に続くが、直径0.7m、深さ約20cmで、断面は逆台形である。埋土は暗灰褐色粘質土である。遺物は須恵器坏身・短脚高坏の他に須恵器片・土師器片が若干量出土している。

その他の遺構 S T01 D区の東部で検出した木棺墓である。長径2.5m、短径1.2m、深さ20cmの墓壙に長さ2.1m、幅0.75mの木棺を納める。木棺の残存高は約10cm、側板・小口板の痕跡を良好に残し箱型の木棺を用いたと考えられる。木棺は、東側の小口で幅広く、東枕で埋葬されたと



1. 深灰色粘性砂質土
2. 深灰色粘性砂質土
3. 黄灰色粘性砂質土
4. 浅黄色粘性砂質土
5. 黄灰色粘性砂質土
6. 黄灰色粘性砂質土

第28図 S T01平面図・土壙断面図



第29図 S T02平面図・土壙断面図

考えられる。出土遺物は、木棺内から土師器細片が出土しているが、時期を明確にできる遺物はない。

S T02 D区西部で検出した墓壙と推定される掘形である。東西1.5m、南北1.0m、深さ15cmの方形をしている。断面形は逆台形で、底部に厚さ2cm~4cm前後で炭化物が敷かれていた。箱等を納めていた痕跡はない。掘形中央部にはS B07の隅柱掘形が、掘りこまれていた。
出土遺物はない。

S X01 C区東端で検出した不整形な断面形皿状の落ち込みである。東西1.9m、南北1.1m、深さ20cm~30cmを計測する。落ち込み中央の埋土は暗黄褐色粘土、外縁に堆積する暗褐色土が底に潜るように堆積しており、風倒木の痕跡と考えられる。埋土内から中世須恵器細片が出土した。

水溜め状遺構 A区の中央西壁沿いで検出した水溜め状の落ち込みである。長径2.0m、短径1.2mの椭円形の平面形で、南東側に平坦な蹴り場を設ける。落ち込みの深さは、検出面から60cm、蹴り場まで30cmを測る。水溜め状の落ち込みの底部からは、河原石と陶器壺・瓦片・木片などが折り重なるように出土した。

(2) 出土遺物

蓋29は、S B20埋土内から出土した。法量は口径13.2cm、器高4.2cmで丸い頂部にはほぼ垂直に立ち上る口縁部をつくる。頂部はカキ目調整して、全体にナデ調整を施す。

蓋30は、C区のS B02周辺の遺構面上で検出した。法量は口径13.2cm、器高4.5cmで蓋29と同様な形態である。調整は焼成がやや甘く、器面が摩滅していく不明である。

坏A31は、S B11床面出土土器である。法量は口径9.4cm、器高2.8cmで底部は平坦、直線的に外方にのびる体部に、ほぼ垂直に口縁部を立ち上げる。口縁端はナデを行いやや外反させる。

蓋32は掘立柱建物S B03の柱掘形内から出土した。法量は口径11.2cm、器高3.2cmで平坦な頂部にやや外反する口縁部をつくる。頂部は粗いヘラ削り、体・口縁部は内外面とも回転ナデを行なう。

坏A33は、S B11の貯蔵穴状の落ち込み内から出土した。法量は口径10.3cm、器高3.2cmで、底部はヘラケズリを行って台状につくり、やや内弯する体部にはほぼ垂直に口縁部を立ち上げる。体・口縁部は内外面とも回転ナデ仕上げを行なう。

高坏34は、S B11に切られる土坑S K04埋土内から出土した短脚の無蓋高坏である。口縁部下端に稜をもち、体部との境とする。脚は短く屈曲して、端部は折り曲げて面をつくる。焼成はあまく、瓦質土器様である。

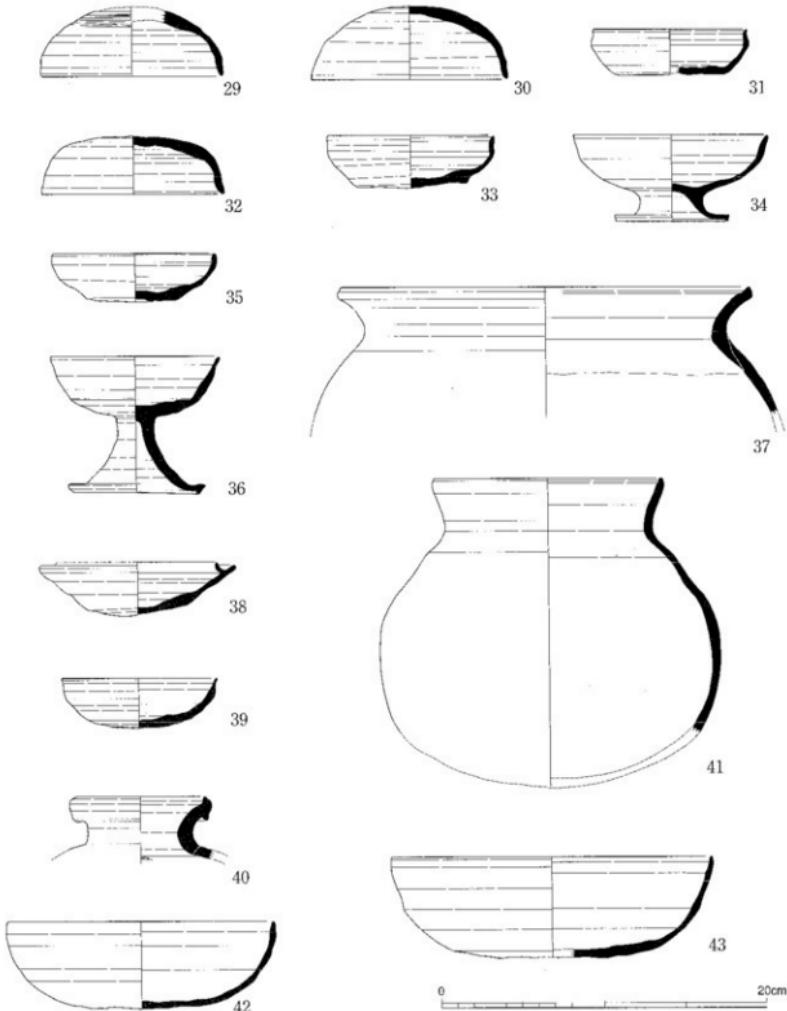
土師器37は、掘立柱建物S B03の柱掘形内から出土した。如意状に外反する口縁部で、口縁端は上方に少し摘み上げる。内外面とも回転ナデ調整を行なう。

S K08 坏A35・高坏36は、F区とE区の調査区コーナー部で検出した不定形土坑S K08埋土内から出土した。

須恵器坏A35は、法量10.0cm、器高3.0cmの小型品である。ヘラ削りして未調整の平底の底部から、やや内弯し体部にはほぼ直立する口縁部を立ち上げる。調整は底部外面を除いて回転ナデを行なう。

高環36は、環部は全体に深く、丸い体部に外上方に直線的に立ち上る口縁部をつくる。口縁部と体部は凹線状の段で区する。脚部は裾部でやや屈曲させ、端部は折り曲げて広い鐘面をつくる。環部の体・底部の外面は、回転ヘラケズリで、他は回転ナデによって仕上げる。

S B14 环H38は、法量口径9.8cm、器高3.2cmで、外上方にのびる受け部に、短く外反する立ち上がりをつくる。底部外面は、回転ヘラケズリを施し、その他は内外面とも回転ナデによ



第30図 第1調査区-1 出土遺物実測図

って仕上げている。

壺A39は法量口径9.6cm、器高3.0cmで、丸い体・底部にやや外反する口縁部をつくる。底部外面はヘラキリの後、回転ナデによって仕上げる。体部と口縁部の外面は、回転ナデ仕上げ、内面は口縁部から体部にかけては回転ナデ、底部は不定方向のナデによって付上げる。

壺40は、短く外上方に立ち上る口縁部である。端部は内側下方に折り曲げて縫面をつくる。口縁端は内側上方に摘み上げて、全体にナデ調整する。内面では頸部と肩部の境に青海波紋が観察できる。

土師器壺41は、やや下方に重心を置く丸い体部・底部にやや内弯気味に立ち上る口縁部をつくる壺である。口縁端部はやや強くナデでを行い、凹線状の内傾する面をもつ。調整は摩滅が激しく不明。

土師器壺C42は、法量16.4cm、器高5.4cmの大型品で、丸い体部にやや内弯気味に立ち上る口縁部をつくる。調整は、口縁部は内外面ともナデで仕上げるほかは、器壁の残存状況が悪く不明である。

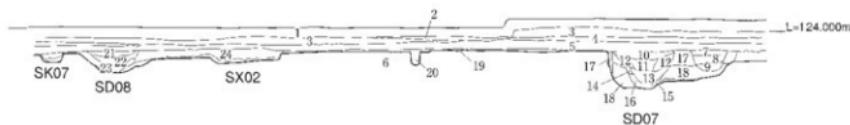
S B 36 S B 36床面出土の土師器壺43は、法量19.6cm、器高6.2cmで42より大型品であるが、器形は42と同様の形態である。

B. 第1調査区-2

概観

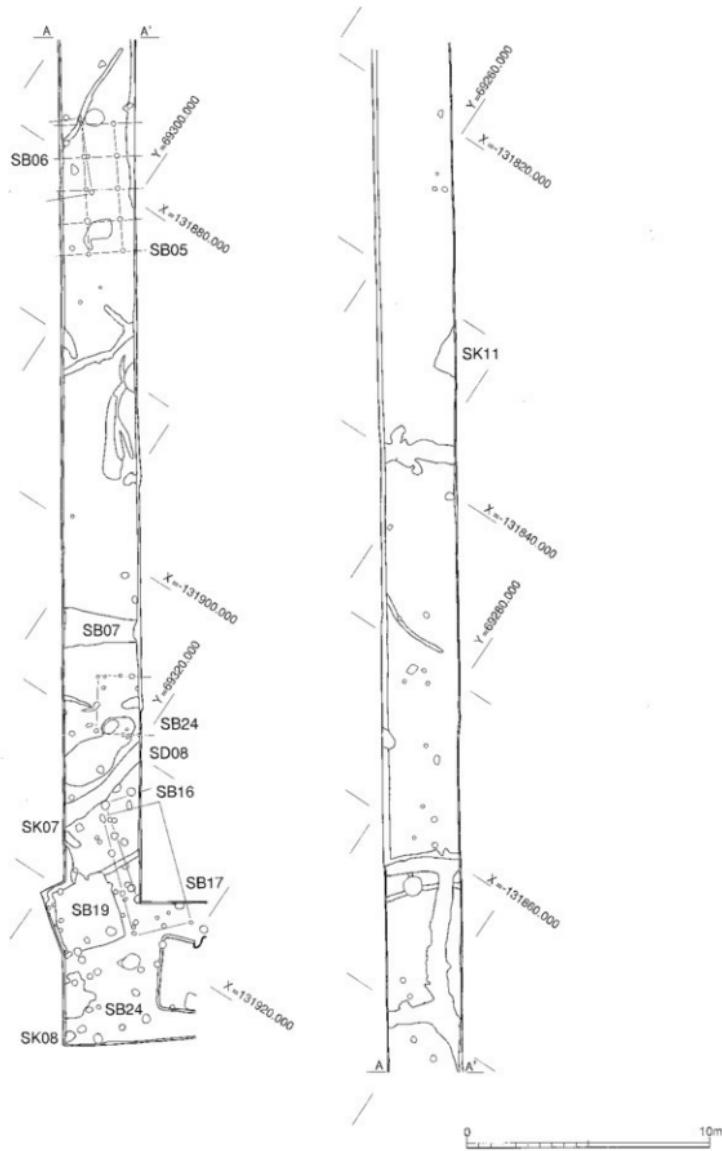
淡河八幡宮の東側から北側を廻る第1調査区-1と、天満神社の東側から北側を廻る第1調査区-3の中間に位置し、油場整備予定地内の排水路が直線に延びる部分の調査区である。実際には調査区は所謂国土座標の北から見て約35度西に振っているが、調査にあたっては調査区の方向を南北方向と見なして呼称した。立地的には淡河川右岸の中位段丘面直下から沖積地にかけての部分であるが、微視的に見れば西側至近地を流れる小河川の堆積作用による扇状地が段丘面を覆うように形成されており、その扇央部分に相当する。

調査の際には岡場整備前の現状の水田面に応じ、第1調査区-1に統いて南からF～L区と呼称したが、G区の北端で調査区の東壁に一部現れている別の小さな水田面は無視してG区に含めた。



1.耕作土	8.褐灰色シルト	15.灰褐色シルト	22.褐灰色地山泥じり粘質土
2.床土	9.周期灰褐色シルト	16.褐色シルト	23.黄褐色粘質土
3.1) 油場整備土	10.胎殻褐色砂混じりシルト	17.褐灰色鉄鉱じりシルト	24.淡褐色地山泥じり土
4.2) 耕作土	11.暗褐色砂混じりシルト	18.暗褐色砂混じりシルト	25.淡褐色砂混じりシルト
5.3) 油場整備土	12.暗褐色砂混じりシルト	19.褐灰色シルト	
6.地山	13.暗褐色粘土	20.暗褐色鐵鉱混じり土	
7.灰褐色シルト	14.暗褐色砂混じり粘質土	21.褐灰色砂混じり粘質土	

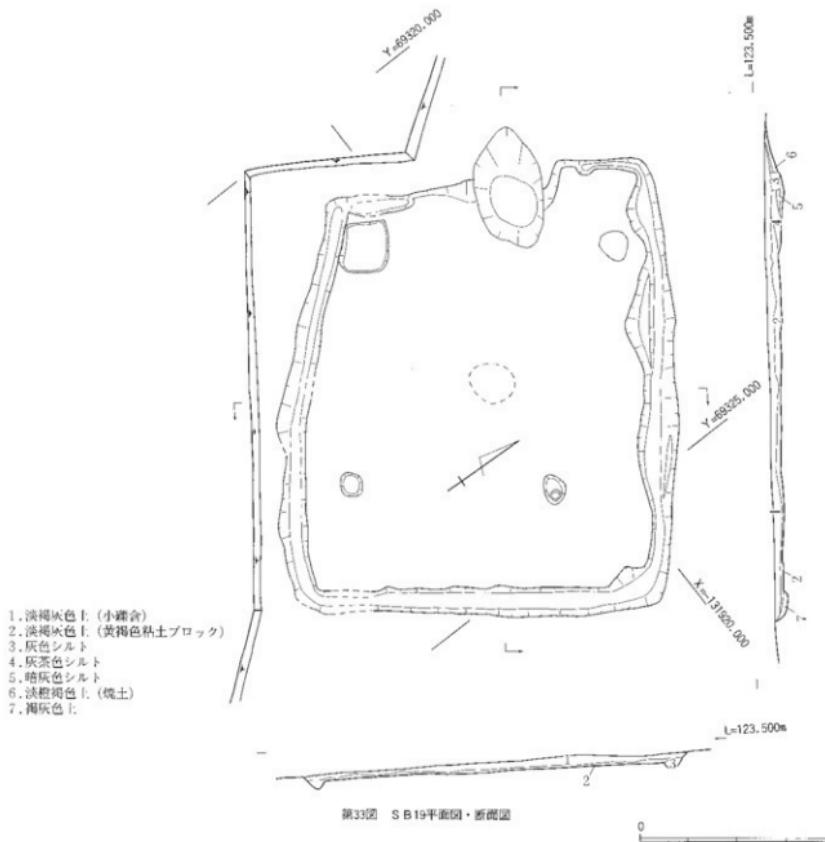
第31図 第1調査区-2 F～G区東西土層図 (S=1/100)



第32図 第1調査区-2 透構配置図

基本層序は上から順に圃場整備直前まで耕作されていた現耕作土・床上、旧耕作土、遺物包含層、地山と続く。旧耕作土は現水田段差の上では多い部分では3層分あったが、現水田段差の下では耕作による削平で全く遺存していない部分もあった。遺物包含層も遺存状況が悪く、現水田段差の数ヶ所確認できたのみである。地山は基本的に堅密な粘土あるいはシルトであるが、礫が混じる部分もあった。遺構面は全区共通して地山の上面であるが、一部近世の遺構は旧耕作土の上から掘り込まれていた可能性が残る。

F・G区とH区で多くの遺構を検出したが、水田段差の直下に相当するG区の北端とH区の北半は現耕作土の直下が地山となり、耕作で削平されて消滅した遺構も少なからず存在すると考えられる。I～L区では一転して検出できた遺構の数が減少したが、地山の傾斜がF～H区や、北に続く第1調査区～3のM～Q区と比較して急であることから居住域として利用されなかったものと思われる。L区とM区の境界である水田の段差は1.4mと



他の水田段差と比較してかなり大きいが、これは扇状地で半ば埋没する段丘崖の名残である。このことからも丘区以南と再び造構が多く検出されたM区以北では、壁の様な段丘崖を境界として土地利用の状況が異なっていたことが判明する。

(1) 検出遺構

検出した遺構は堅穴住居1棟、掘立柱建物6棟、溝11条、土坑9基、落込4基、ビット76基であるが、遺構番号は第1調査区全体を通して符号していくため、本節では必ずしも連続番号となっていない。遺構の時期は弥生時代から近世までに及ぶが、主なものは飛鳥時代・奈良時代と中世である。遺構の分布状況は、削平された遺構の存在を想定してもG区南端の大溝S D07以南とH区中央の掘立柱建物S B05周辺の2ヶ所に集中する。とりわけS D07は溝の規模や最低2回は掘り直されていることから、F区以南に存在した集落の北端を区画する溝の可能性が高い。掘立柱建物の柱穴からの出土遺物は細片で量も少ないために時期を確定することは困難であるが、第1調査区-1・3で検出した他の掘立柱建物との比較や柱抜形の規模・建物の方位等からS B16・17・24は飛鳥時代、S B05・06・12は中世のものと思われる。

堅穴住居

F区南半で検出した堅穴住居である。平面は東西4.5m、南北4.0mの不整形で、深さは約10cmである。柱穴は4基で不整な四角形を形成し、周囲には幅20~40cm、深さ5~10cmの周壁溝が廻る。北辺中央に作り付けのがが、床面中央には焚き火跡と思われる熱による赤変部分がある。炉底には焼土である淡橙褐色土があり、その上には炭混じりの暗灰色シルト・灰茶色シルトがあるが、焼土塊や炭片は床面上にはあまり散乱していないかった。他に床面上でビットを約10基検出したが、それらの性格は不明である。埋土は上から淡褐色土、地山小土塊混じり淡褐色土で、周壁溝内は褐色土の部分もあった。遺物は飛鳥時代の須恵器片・土師器片が出土したが細片が多かった。しかし作り付け炉の東側の周壁溝内から、ほぼ完形に近い須恵器の壺身と土師器の壺が1点ずつ出土した他、埋土中から須恵器片・土師器片が若干量出土した。切合関係から溝S D09や落込S X03より新しく、掘立柱建物S B24より古いことが判る。時期は飛鳥時代と考えられる。

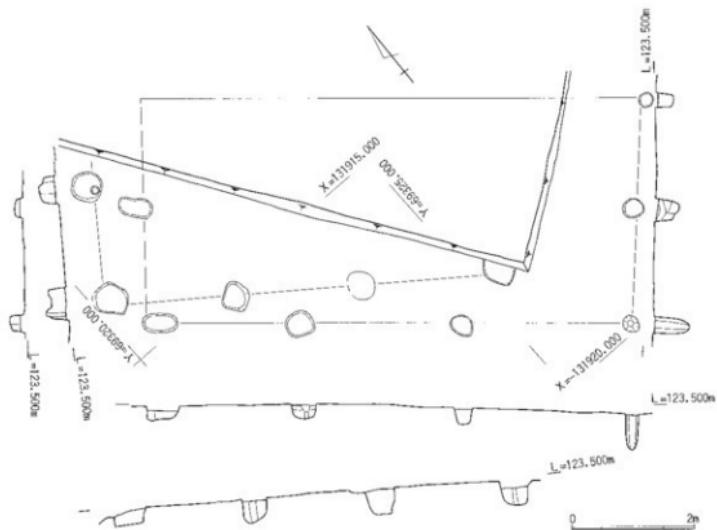
掘立柱建物

S B05

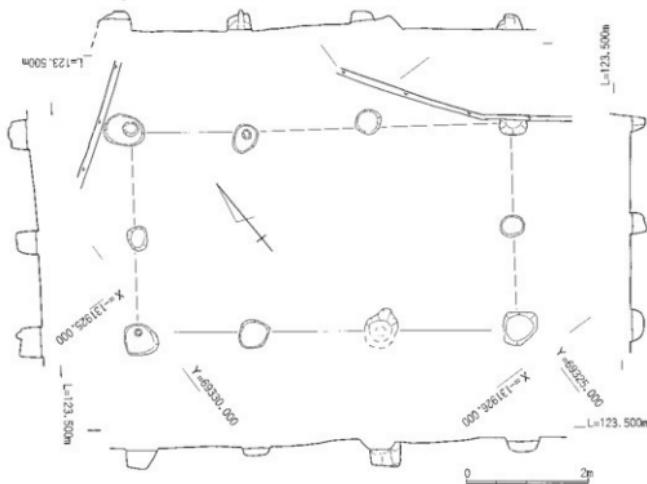
H区の中央で検出した、総柱の掘立柱建物である。柱間の数は南北方向を4間、東西方向を1間確認したが、調査区の幅が狭いため東西方向は東西どちらに統一しているのか不明である。柱間は2.1m等間で、従って建物の規模は南北8.4m、東西2.1m以上となる。柱列の方向は座標北から37度西に振っている。柱穴は直径25~30cm、深さ20~30cmで、西側柱列の北から2番目の柱穴には柱根が残っていた。柱根や柱痕から柱の直径は10~15cmと推定される。切合関係から掘立柱建物S B06や溝S D03より新しいことが判る。遺物は各柱穴から須恵器片・土師器片が少量ずつ出土した。時期は中世と思われる。

S B06

H区の中央で検出した、東西方向になると思われる掘立柱建物である。柱間の数は、南北方向を2間、東西方向を1間確認したが、西側調査区外に統くため東西方向の規模は不明である。柱間は南北方向が北から順に2.5m・2.3m、東西方向は東西1.9mである。従って建物の規模は南北4.8m、東西1.9m以上となる。建物の方向は座標北から43度西に振っている。柱穴は直径約30cm、深さ10~30cmで、柱痕から柱の直径は約10cmと推定される。切合関係から掘立柱建物S B05より古く、溝S D03より新しいことが判る。遺物は各柱穴



第34図 S B 05-06平面図・断面図



第35図 S B 12平面図・断面図

から須恵器片・土師器片が少量ずつ出土した。時期は中世と思われる。

S B12 F区からG区にかけての位置で検出した、東西方向の掘立柱建物である。柱間の数は、南北方向を2間、東西方向を2間確認したが、東側調査区外に統くため東西方向の規模は不明である。柱間は南北方向が1.8m等間で、東西方向は北側柱列が西から順に1.5m・0.8m、南側柱列が西から順に1.7m・1.0mである。従って建物の規模は南北3.6m、東西2.8m以上となる。東西方向の2つ目の柱間は他の柱間と比較して間隔が狭く、柱掘形も小さいため、この部分の柱は間柱あるいは束柱の可能性がある。建物の方向は座標東から31度北に振っている。柱穴は直径約15~30cm、深さ10~30cmで、柱痕から柱の直径は約10cmと推定される。遺物は南西隅柱から須恵器短脚高壺の坏部の破片が出土した他、各柱穴から須恵器片・土師器片が少量ずつ出土した。時期は中世と思われる。

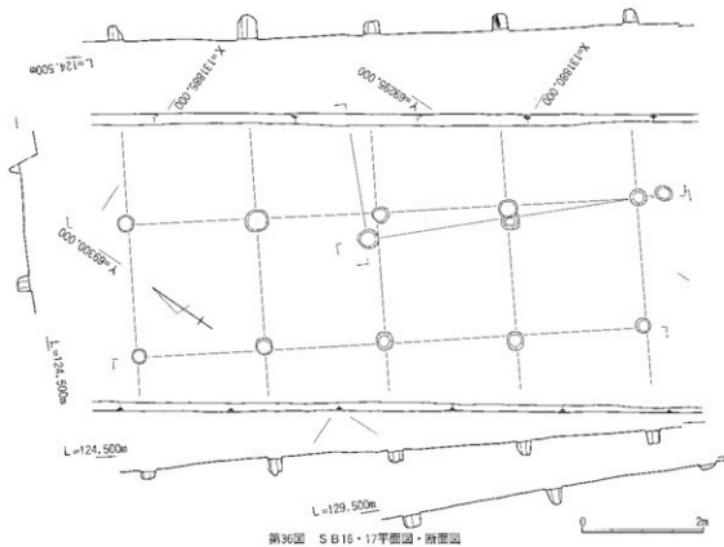
S B16 F区中央で検出した、北西から南東方向になると思われる掘立柱建物である。柱間の数は、南北方向を3間、東西方向を1間確認したが、東側調査区外に統くため東西方向の規模は不明である。柱間は北西から南東方向が2.1m等間で、南西から北東方向は1.8mである。従って建物の規模は南北6.3m、東西2.2m以上となる。建物の方向は座標北から53度西に振っている。柱穴は直径約40~60cm、深さ30~40cmで、柱痕から柱の直径は10~20cmと推定される。切合関係から溝S D08より古いことが判る。遺物は各柱穴から須恵器片・土師器片が少量ずつ出土した。時期は飛鳥時代と考えられる。

S B17 F区中央で検出した北西から南東方向の掘立柱建物である。柱間の数は、北西から南東方向を3間、南西から北東方向を2間確認した。柱間は北西から南東方向が北西から順に2.4m・2.7m・2.7mで、南西から北東方向は南西から順に2.0m・1.9mである。従って建物の規模は北西から南東方向7.8m、南西から北東方向3.9mとなる。建物の方向は座標北から50度西に振っている。柱穴は直径約25~55cm、深さ25~60cmで、柱痕から柱の直径は約15cmと推定される。掘立柱建物S B16と重複する状態で検出したが、柱掘形に切合関係がないために建物の新古は不明である。遺物は各柱穴から須恵器片・土師器片が少量ずつ出土した。時期は飛鳥時代と考えられる。

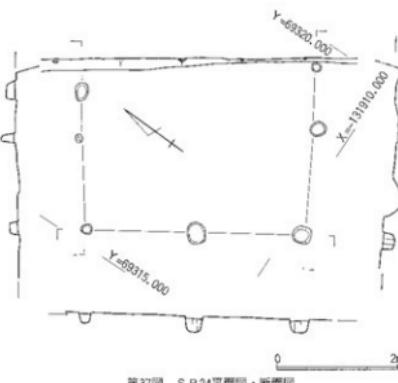
S B24 E区からF区にかけての位置で検出した北西から南東方向の掘立柱建物である。柱間の数は、北西から南東方向を3間、南西から北東方向を2間確認した。柱間は北西から南東方向が北西から順に2.2m・2.1m・1.9mで、南西から北東方向は南西から順に1.8m・1.6mである。従って建物の規模は北西から南東方向6.2m、南西から北東方向3.4mとなる。建物の方向は座標北から54度西に振っている。柱穴は直径約40~60cm、深さ15~40cmで、柱痕から柱の直径は15~20cmと推定される。切合関係から竪穴住居S B19より新しいことが判る。遺物は各柱穴から須恵器片・土師器片が少量ずつ出土した。時期は飛鳥時代と考えられる。

溝 S D03 H区の中央で検出したほぼ直線の溝である。西端は調査区外に統くため全長は不明である。検出長7.7m、幅0.2~0.3m、深さ約10cmで断面は半球形である。埋土は褐灰色土で、切合関係から掘立柱建物S B05・06より古いことが判る。遺物は出土しなかったため時期は不明であるが、中世以前であると思われる。

S D04 H区の南端で検出した溝である。南端はG区とH区の水田段差で削られて消滅しているた



第36図 SB 16・17平面図・断面図



第37図 SB 24平面図・断面図

め全長は不明である。検出長1.9m、幅0.3~0.4m、深さ約10cmで断面は皿状である。埋土は淡褐灰色土である。遺物は土師器片が若干量出土した。時期は古墳時代と思われる。

S D 05 H区の南端で検出した溝である。北端は調査区外に統くため全長は不明である。検出長2.0m、幅0.3~0.4m、深さ約10cmで断面は皿状である。埋土は茶灰色土である。遺物は土師器片が若干量出土した。時期は古墳時代と思われる。

S D 06 H区の北端で検出した溝である。東西両端は調査区外に統くため全長は不明である。検

出長5.1m、幅0.3m、深さ約10cmで断面は半球形である。埋土は暗灰茶粘土で、切合関係から溝S D11・土坑S K03より古いことが判る。遺物は土師器片が少量出土した。時期は中世と思われる。

S D07 G区の南半で検出した規模の大きな溝である。東西両端は調査区外に続くため全長は不明である。検出長4.8m、幅は東側が1.6m、西側が2.7m、深さ約80cmで、断面はU字形である。西側断面の土層を観察すると最低2回は掘り返しており、暗褐色系のシルトが主体の、複雑な堆積状況を示している。掘り返された溝も断面がU字形である。溝以北では造構が濃密に分布する一方、溝以北では造構が極めて散漫で分布状況が一変することや、同じ位置に繰り返し掘り直されていることから判断し、F区以南に存在した集落の北端を区画する溝の可能性が高い。遺物は須恵器片・土師器片が若干量出土したが、造構の規模からすると少量である。他に土師質の釣鐘形の鉢壺片が1点出土した。掘削の際には津の掘り返しが確認できなかったため、掘り返しの前後での遺物の鑑別はできていない。時期は奈良時代の後半と考えられる。

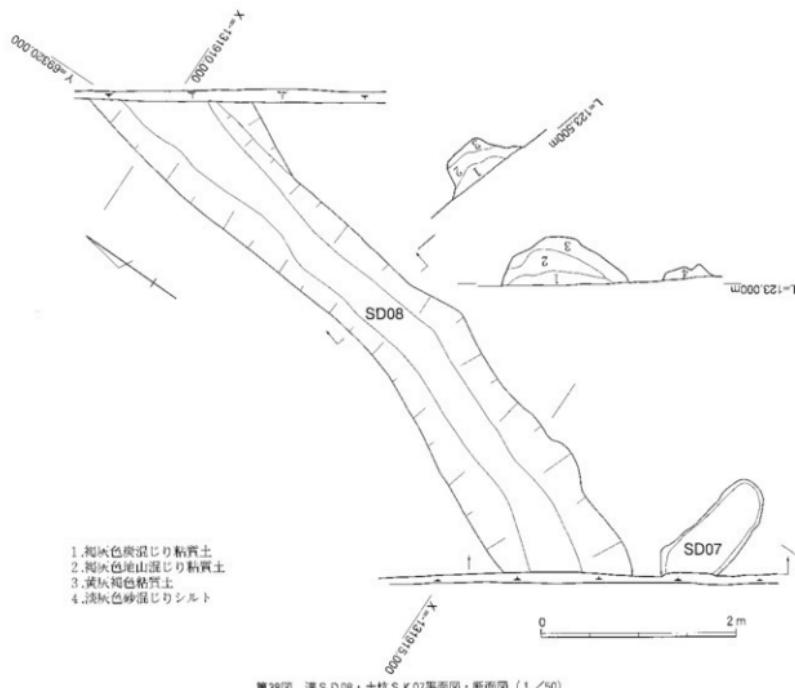
S D08 F区の北半で検出した緩い弧状の溝である。南北両端は調査区外に続くため全長は不明である。検出長7.4m、幅0.8~1.4m、深さ40~50cmで、断面は半球から逆台形である。埋土は上から順に褐色炭化混じり粘質土、褐色地山小土塊混じり粘質土、黄灰褐色粘質土である。切合関係から掘立柱建物S B16より新しいことが判る。遺物は須恵器片・土師器片が大量に出土した他、造塙土器片が若干量出土した。時期は奈良時代の後半と考えられる。

S D09 F区の南半で検出した溝である。東端は調査区外に続き、西端は他の造構で破壊されているため全長は不明である。検出長2.9m、幅0.3~0.4m、深さ約10cmで、断面は皿状である。埋土は淡灰色粘質土で、切合関係から掘立柱建物S B16より新しく、堅穴住居S B19より古いことが判る。遺物は須恵器片・土師器片が少量出土した。時期は飛鳥時代と考えられる。

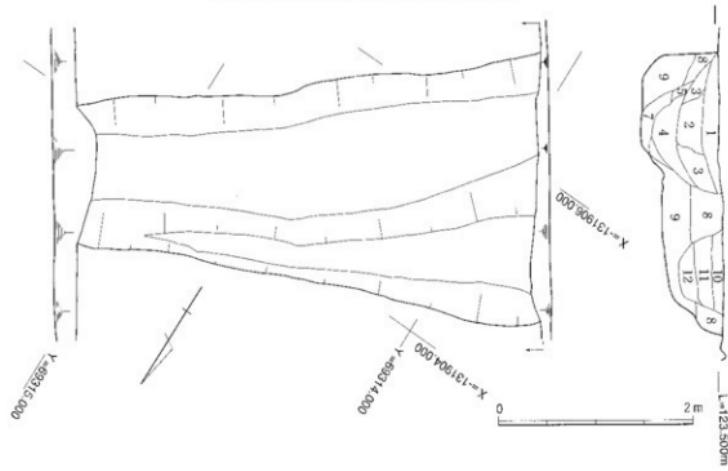
S D10 H区の北半で検出した溝である。西端は調査区外に続き、東端は他の造構で破壊されているため全長は不明である。検出長3.3m、幅0.3~0.4m、深さ約30cmで、断面は半球形である。埋土は淡灰色シルト・淡褐色砂混じり土・地山小土塊の混和したもので、拳大の礫が多く含まれていた。切合関係から溝S D11より古いことが判る。水田耕作の用水あるいは排水路であったと考えられる。遺物は陶磁器片・瓦片・須恵器片・土師器片が少量出土した。時期は近世と考えられる。

S D11 H区の北端からトレチの東壁に沿って検出した、溝S D12から派生する溝である。南端は調査区外に続くため全長は不明である。検出長24.6m、幅1.0~1.2m、深さ約30cmで、断面は半球形である。埋土は淡青灰色シルトで、一部に石組が遺存していた。切合関係から溝S D10より新しいことが判る。溝S D10同様に水田耕作の用水路あるいは排水路であったと考えられる。遺物は陶磁器片・瓦片・須恵器片・土師器片が少量出土した。時期は近世以降と考えられる。

S D12 H区の北端、H区とI区の水田段差直下で検出した、溝S D10が分岐する溝である。東西両端は調査区外に続くため全長は不明である。検出長5.0m、幅0.6~1.0m、深さ約20



第38図 溝SD 08・土坑SK 07平面図・断面図 (1/50)



第39図 溝SD 07平面図・断面図 (1/50)

cmで、断面は半球形である。埋土は上から順に淡青緑色粘質土、灰色粘土、灰色砂混じり粘土、暗灰色砂混じり粘土で、北側斜面には水田段の護岸の石積が遺存していた。溝 S D 10・11同様に水田耕作の用水路あるいは排水路であったと考えられる。遺物は磁器片・瓦片・須恵器片・土師器片が少量出土した。時期は近世以降と考えられる。

S D13 J区の南半で検出した、緩い弧状の溝である。西端は調査区外に続くため全長は不明である。検出長5.4m、幅0.2~0.3m、深さ約10cmで、断面は半球形である。埋土は褐灰色砂混じりシルト粘土である。遺物は土師器片が少量出土した。時期は中世以前と思われる。

土坑 S K01 H区の中央で検出した楕円形の土坑である。長径1.3m、短径1.1m、深さ約20cmで、断面は浅いU字形である。埋土は灰色土と地山小土塊の混和したもので、水田耕作の水溜と考えられる。遺物は土師器片が少量出土した。時期は近世以降と考えられる。

S K02 H区の南半で検出した不整形方の土坑である。東西1.4m、南北1.2m、深さ約10cmで、断面は皿状で、南西隅に浅い溝状の突出部がある。埋土は淡茶褐色粘質土で、遺物は弥生土器片が若干量出土した。時期は弥生時代後期であると考えられる。

S K03 H区の北端で検出した円形の土坑である。直径1.1m、深さ約20cmで、断面は半球形である。埋土は青灰色粘土と地山小土塊の混和したもので、土坑 S K01同様水田耕作の水溜と考えられる。遺物は土師器片が少量出土した。時期は近世以降と考えられる。

S K05 F区の北端、落込 S X02の底で検出した楕円形の土坑である。長径1.1m、短径0.7m、深さ約20cmで、断面は半球形である。埋土は淡灰色粘質土と地山小土塊の混和したものである。遺物は須恵器片・土師器片が少量出土した。時期は奈良時代以前と考えられる。

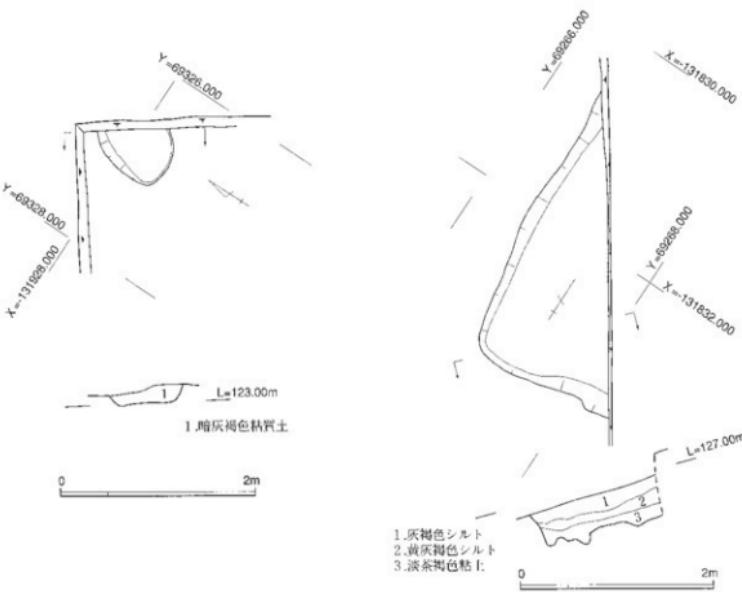
S K06 F区の南端で検出した楕円形の土坑である。長径1.1m、短径0.7m、深さ約20cmで、断面は半球形である。埋土は淡灰色砂混じりシルトで、土坑 S K01・03同様水田耕作の水溜と考えられる。遺物は須恵器片・土師器片が少量出土した。時期は近世以降と考えられる。

S K07 F区の中央で検出した長円形の土坑である。西端の一部が調査区外に続くが、長径1.4m、短径0.5m、深さ約20cmで、断面は底の中央が盛り上がってW字状である。埋土は淡灰色砂混じりシルトである。遺物は須恵器片・土師器片の他、製塩土器片が若干量出土した。時期は奈良時代の後半と考えられる。

S K11 K区の北端で検出した方形の土坑である。東側が調査区外に続くため全体の規模は不明であるが、検出長は東西1.6m、南北3.0m、深さ約80cmで、断面は逆台形である。埋土は上から順に灰褐色シルト、黄灰褐色シルト、淡茶褐色粘土である。遺物は土師器甕1点の他に弥生土器片が少量出土したが、時期は古墳時代と考えられる。

落込み F区の北半で検出した瓢形の落込である。南端の一部が調査区外に続くが、長軸6.4m、短軸は北側が2.1m、南側が2.7m、くびれ部が1.5m、深さ約20cmで、断面は皿状である。埋土は淡灰褐色疊混じり土で、底の一部に淡黄褐色シルトがある。遺物は須恵器片・土師器片が若干量出土した。時期は奈良時代と考えられる。

S X03 F区の中央で検出した不整形の落込である。大部分が調査区外に続くため規模は不明である。検出長は東西2.1m、南北4.1m、深さ約10cmで、断面は皿状である。埋土は褐灰色粘質土で、切合関係から竪穴住居 S B19より古いことが判る。遺物は土師器片が若干量出土した。時期は飛鳥時代以前と考えられる。



第40図 土坑S K08・11平面図・断面図

S X04 F区からE区にかけて検出した不整形の落込である。西半が調査区外に続くため規模は不明である。検出長は東西1.6m、南北3.0m、深さ10~30cmで、断面は皿状である。埋土は灰茶色粘質土である。遺物は須恵器片・土師器片が若干量出土した。時期は飛鳥時代と考えられる。

S X06 K区の南半で検出した、溝状の不整形の落込である。東西両端が調査区外に続くため規模は不明である。検出長は東西4.6m、南北3.0m、深さ10~30cmで、断面は皿状である。埋土は淡茶色砂・地山小土塊混じりシルトである。遺物は須恵器片・土師器片が小量出土した。時期は中世と考えられる。

ピット ピットはF区から38基、G区から7基、H区から13基、I区から8基、J区から2基、K区から4基、L区から4基の計76基検出した。いずれも平面円形、梢円形あるいは不整形で、直径あるいは長径10~50cm、深さ10~30cmのものである。中には掘立柱建物としてまとまらないが、明らかに柱抜を持つものもあった。またF区のピット11と18からは土師器の壺が1点ずつ出土した。

(2) 出土遺物

造構を集中して検出したF・G区からの遺物量が当然ながら多いが、特に溝S D08からの出土量が卓越している。竪穴住居S B19からも相当量出土したが、他の掘立柱建物・溝・土坑などからの出土遺物の量は若干量あるいは少量であった。遺物の時期は弥生時代から

近世までに及ぶが、主なものは飛鳥時代と奈良時代である。逆に古墳時代の遺物は全体的に少量であった。

S D 08 44~58は溝S D 08から出土した土器で、44~47は須恵器壺B、48~51は須恵器壺A、52は須恵器壺C、53は須恵器壺A、54は土師器壺A、55~58は口縁が外傾する深い鉢形の製塩土器である。

44は口径18.9cm、器高6.7cm、高台径12.8cm。内外面とも回転ナデの後、内底面には仕上げナデを施す。高台は貼付痕跡が明瞭で、高台内側にはわずかに粘土紐の接合痕が残る。45は口径14.0cm、器高3.7cm、高台径8.7cm。内外面とも回転ナデであるが、外面口端直下のナデは強い。46は口径13.6cm、器高4.4cm、高台径10.0cm。内外面とも回転ナデであるが、内面白口端直下のナデは強い。高台接合部外面は沈線状に窪む。47は口径12.6cm、器高4.4cm、高台径9.9cm。内外面とも回転ナデで、高台内側の外底面が回転ヘラケズリである。底部は丸くなっているため安定が悪い。

48は口径15.6cm、器高3.2cm、底径11.8cm。内外面とも回転ナデであるが、器面の遺存状況が悪いため外底面の調整は不明である。49は口径14.8cm、器高3.6cm、底径11.3cm。内外面とも回転ナデの後、内底面には仕上げナデを施す。器面の遺存状況が悪いため外底面の調整は不明である。50は口径14.0cm、器高4.0cm、底径9.5cm。内外面とも回転ナデであるが、内面白口端直下のナデは強い。外底面にはわずかに粘土紐の接合痕が残る。51は口径10.4cm、器高3.7cm、底径7.3cm。内外面とも回転ナデであるが、内面白口端直下のナデは強い。外底面にはわずかに粘土紐の接合痕が残る。

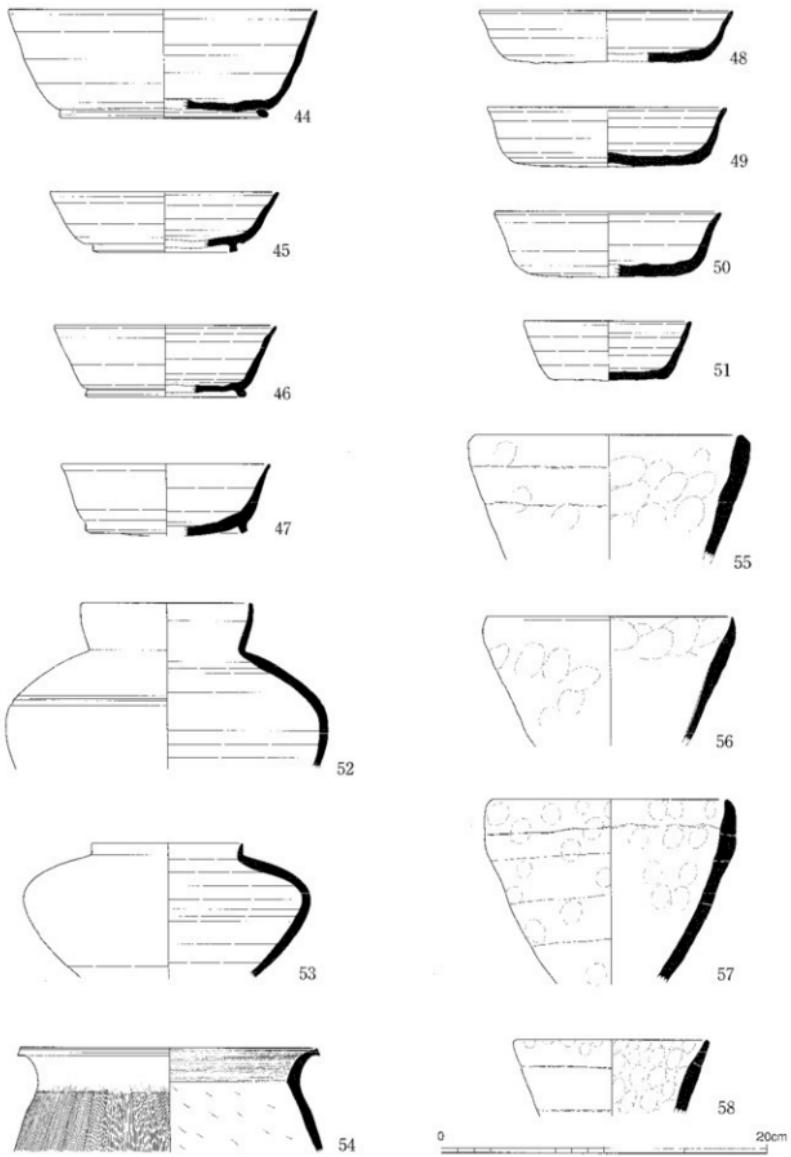
52は口径10.3cm、くびれ部径9.6cm、胴径19.8cm。内外面とも回転ナデであるが、頸部内面直下と胴部下半のナデは強い。胴上部外面には浅い凹線を2条施す。

53は口径とくびれ部径9.2cm、胴径17.6cm。内外面とも回転ナデであるが、胴部下半のナデは強い。肩部外面には斜め方向の仕上げナデを施す。

54は口径18.2cm、くびれ部径16.2cm。口縁内面は横方向のハケの後ナデ、胴部内面は斜め方向のケズリである。頸部内面はケズリとナデの境界が枝線状になる。胴部外面に縱方向のハケを施した後、口端から外面口頸部にナデを施す。口端はわずかに上下に突出し、そうしてできたやや広目の口端外面に弱い凹線を1条施す。

55は口径16.6cm、56は口径15.2cm、57は口径14.4cm、58は口径12.0cm。製塩工程での加熱により器体と器面の遺存状況が悪いが、内外面ともにユビオサエが明瞭で、塩水が滲み出ないように特に内面には念入りにユビオサエを施す。逆に外面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。器壁は厚く、55は11mm、56は9mm、57は11mm、58は8mmもある。加熱による破損を防止するためか、胎土には大きい砂粒が数多く含まれる。少点数で推量するのは危険であるが、直径15cm前後の大振りの55~57と直径12cm前後的小振りの58の2種類に分類できる可能性がある。また器形でも口縁がほぼ直線に立ち上る55・56・58とわずかに内傾する57の2種類に分類できる可能性もある。

59は土師器壺Aである。口径12.1cm、くびれ部径10.6cm、胴径12.6cm、器高11.7cm。口縁から胴部上半の内面はナデで、粘土紐の接合痕が残る。胴部下半の内面は不鮮明であるが、ユビオサエと思われる。口縁外面はナデ、器面の遺存状況が悪いため胴部外面の調整



第41図 满SD08出土遺物実測図

は不明である。器形は全体的に不整形である。

60は須恵器杯Hである。口径9.7cm、受部径11.8cm、器高4.1cm。内外面とも回転ナデの後、内底面には仕上げナデを施すが、外底面はヘラオコシ未調整である。受部の幅は少し歪んでおり一定していない。

S B12 61は須恵器短脚高杯の杯部である。口径10.4cm、杯部高3.7cm。外面下半を回転ヘラケズリの後、内面と外面上半に回転ナデを施す。外底面には脚部接合時のナデがある。

S K07 62・63は製塙土器である。62は口径15.8cm、63は口径12.3cm。55～58同様に器体と器面の遺存状況が悪いが、内外面ともにユビオサエが明瞭で、内面は念入りにユビオサエを施す。外面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。器壁はともに10mmと厚い。加熱時の破損防止用と思われる大きい砂粒が数多く含まれる。62は直径15cm前後の大振りで口縁がほぼ直線に立ち上るもの、63は直径12cm前後の小振りで口縁がわずかに内傾するものである。

64は土師器壺Aである。口径14.7cm、くびれ部径13.2cm、胴径16.2cm。内面はユビオサエが明瞭であるが粘土紐接合痕も残る。外面はナデである。口端は上方へ尖る。

65・66は須恵器皿Aである。65は口径24.4cm、底径21.6cm。外面下半を回転ヘラケズリの後、内面と外面上半に回転ナデを施す。口縁は斜めに立ち上った後外側へ屈曲する。底部は丸くなつておらず安定が悪い。66は口径18.6cm、底径16.8cm、器高3.0cm。内外面ともに回転ナデの後、外底面には仕上げナデを施す。底部は丸くなつておらず安定が悪い。

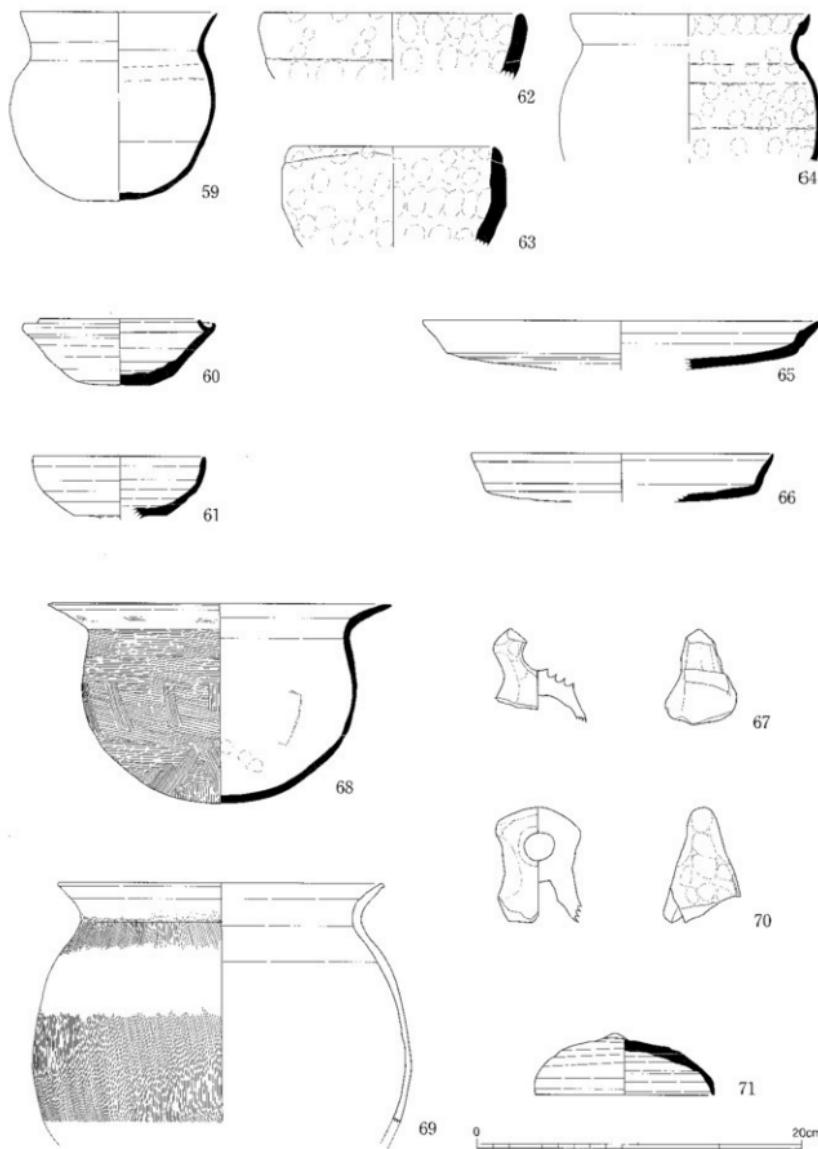
67は土師質の釣鐘形の蛸壺である。遺存状況が悪く全長は不明であるが、釣手部孔の直径は2.1cmである。内面はユビナデ、外面はユビオサエがともに顕著である。孔はユビオサエ後に穿たれたと考えられる。釣手部はやや大きいがイイダコ用の蛸壺と思われる。

F区ピット11 68は土師器壺Aである。口径21.0cm、くびれ部径16.1cm、胴径16.9cm、器高12.3cm。口縁から胴部上半の内面はナデであるが、胴部上半には板ナデ状の工具痕がわずかに見られる。胴部下半の内面はユビオサエ後ナデである。外面は全面ヨコハケの後、胴部には散在的にタテハケ、底部には一定方向のハケ、口縁部には強いヨコナデを施す。

F区ピット18 69は土師器壺Aである。口径19.9cm、くびれ部径17.3cm、胴径23.3cm。口縁から頸部内面はナデ、頸部内面は器面の遺存状況が悪いため調整は不明である。外面は一部不鮮明な部分があるが、全面ヨコハケの後口縁部には強いヨコナデを施す。口端は少し下方につまれるため小さな面になる。

その他の
出土遺物 70はG区の旧耕作土から出土した土師質の釣鐘形の蛸壺である。遺存状況が悪く全長は不明であるが、釣手部幅5.2cm、孔の直径は1.9cmである。67同様に内面のユビナデ、外面のユビオサエが顕著で、ユビオサエ後の穿孔と考えられる。これも釣手部はやや大きいがイイダコ用の蛸壺と思われる。

71はI区の遺物包含層から出土した須恵器杯H蓋である。口径11.1cm、器高3.5cm。外面上半を回転ヘラケズリの後、内面と外面上半に回転ナデを施すが、外面口端直下のナデは強い。外面天井部には焼成時に融着した他の須恵器小片がある



第42図 その他の出土遺物実測図

C. 第1調査区-3

第1調査区-2の北に継続する淡河天満神社の周囲を北・東にめぐる排水路予定地部分にあたる。第1調査区-2の北端L区と第1調査区-3の南端M区とは約1.2mの段丘崖となっている。第1調査区-3も他の調査区と同様に、現状の水田区画に沿ってM~Qまでの小地区割設定を行って調査実施した。

調査区は概ねO区~M区では南に傾斜し、Q区~O区は東に傾斜している。遺物包含層は、N区の南半からM区で残存していたが、他の地区では旧耕作土直下に淡黄灰色粘性砂質土の遺構面がある。Q区は、河岸段丘の高位にあたり、東側のP区に比べて約1.5m前後高く、現耕作土直下が淡黄灰色粘性土の基盤層となる。この基盤層上面からは、性格不明のピット4ヶ所と近・現代の水路跡が検出された他は、明確な遺構は検出されなかった。比較的早い時期に削平を被り壊滅した可能性がある。M区~P区において検出した遺構は、堅穴住居7棟、掘立柱建物4棟、溝4条、土坑1ヶ所である。

(1) 検出遺構

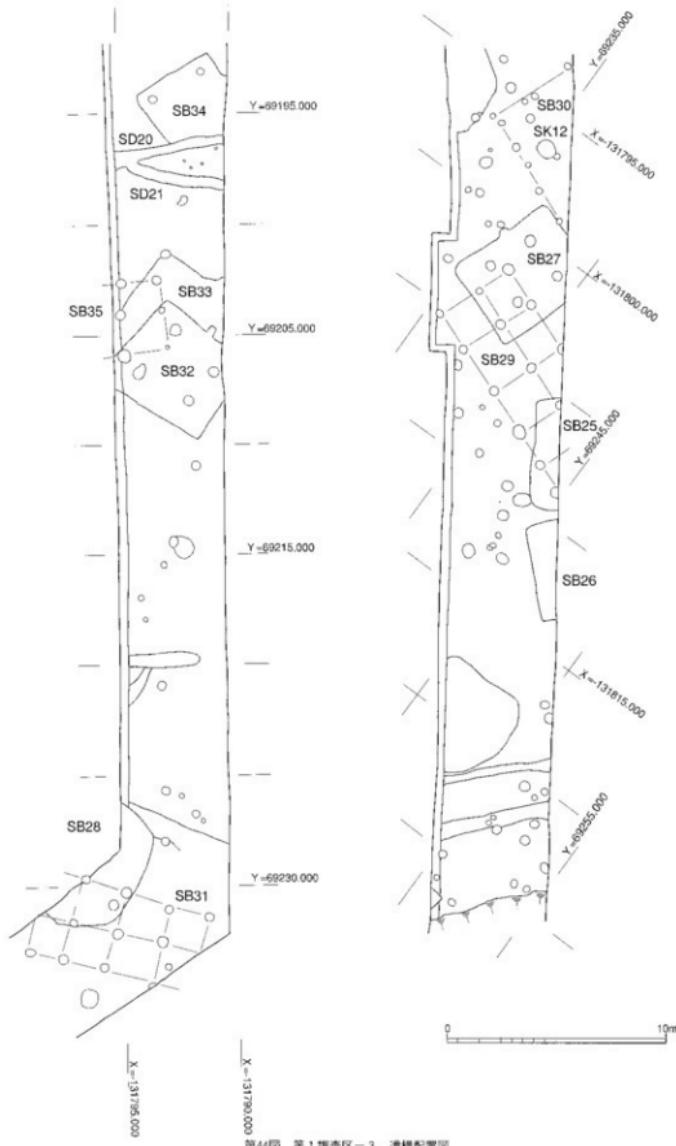
S B28

M区とO区の境、調査区が西へ屈曲する部分の西壁沿いで検出した隅丸方形の堅穴住居である。西側は調査区外となり、堅穴住居の30%前後を検出した。規模は一辺4.5mで、胴張り気味に各辺がつくられている。壁体は高さ30cm~40cm前後残し、各辺に幅15cm~20cm、深さ20cm~25cm前後の周壁溝があげられる。周壁溝には、厚さ5cm~10cm前後の板材の痕跡が明瞭である。堅穴の床面には、北辺で0.9m、東・西辺で1.2mの幅で、高さ30cmの壁内高床部が設けられれている。高床部は、堅穴の外郭部を掘り下げた後の基盤上に淡灰



1.灰茶褐色粘性砂質土
2.暗灰茶褐色粘性砂質土（炭含）
3.炭化物層
4.暗灰黃色粘性砂質土
5.暗茶褐色粘性砂質土
6.暗黃褐色粘性砂質土
7.暗灰黃色砂質土
8.黃褐色粘性土
9.暗黃褐色粘性砂質土
10.暗黃褐色熟質土
11.淡黃褐色粘性砂質土（炭含み）

第43図 S B28平面図・断面図

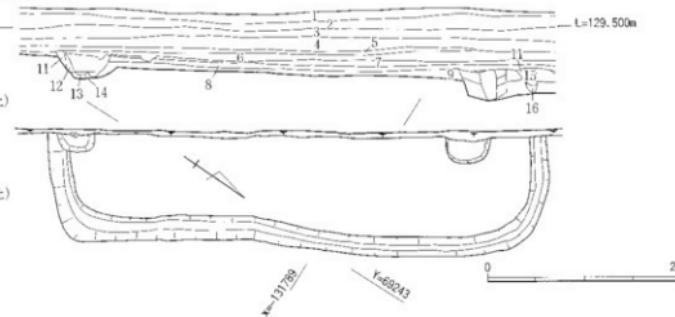


第44图 第1调查区-3 造林配置图

灰色粘質土(灰色砂混じり)を厚さ20cm前後積み込んだ後に、厚さ5cm~10cm前後の灰褐色粘質土上面を水平に仕上げながら貼り付けて造成されている。高床部と堅穴住居内区との境には、幅20cm、深さ5cm前後の溝がめぐる。この高床部に画される内区の規模は、北辺で2.7mを計測する。堅穴住居内区内は、灰色粘質土(淡灰褐色土混じり)を厚さ8cm前後敷き詰め、さらに厚さ5cm前後の褐色粘質土を貼って床をつくっている。支柱は内区の北東隅部に、土質・上色の変化した部分を検出したが浅く、明確に支柱に該当する痕形等は検出されなかった。内区床面の西部では、弥生土器片が散漫な状態で検出された。

高床部上面では、調査区西壁沿いでピット1ヶ所が検出された他は、堅穴住居の構造に伴う柱穴等は検出されなかった。高床部上面の北東隅部では、甌形土器が横倒しの状態で検出された。

- 1.耕作土(原土)
- 2.暗灰色粘性砂質土
(中近世耕土)
- 3.暗灰褐色粘性砂質土
(中近世床土)
- 4.暗灰褐色シルト(中耕土)
- 5.暗黄褐色粘性砂質土
- 6.淡灰褐色粘性砂質土
- 7.淡黄色粘質土
- 8.暗褐灰褐色粘性砂質土
(往古埋土)
- 9.暗褐黄色粘性土(往古床土)
- 10.黄褐色粘質土(縁合み)
- 11.暗黄褐色粘性砂質土
- 12.暗褐黄色粘性砂質土
- 13.暗褐黄色砂質土
- 14.暗灰褐色粘質土
- 15.暗茶褐色砂質土
- 16.灰色粘性砂質土

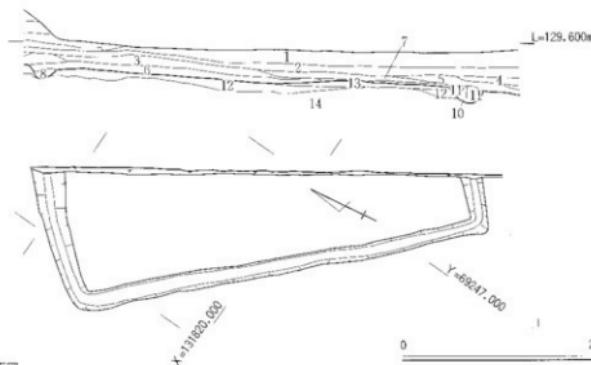


第45図 S B25平面図・土層断面図

S B25

N区中央部東壁沿いで検出した隅丸方形の堅穴住居である。西辺と南・北辺の一部を検出した。堅穴住居の規模は、南北5.0m、東西1.3m以上、深さ15cm~20cmを計測する。各辺に幅24cm前後、深さ10cm~20cm前後の壁溝がめぐる。床面は、基盤面が傾斜しているため、堅穴を掘り下げた後に暗褐黄色粘性砂質土を北側で6cm前後、南側で12cm前後の厚さで貼りつけて床面を水平に造成している。出土遺物は、理上内から弥生土器もしくは土師質の土器片が出土しているが明確なものはない。

- 1.暗黄色粘質土
- 2.暗褐灰褐色粘質土
- 3.暗灰色砂質土
- 4.灰褐色粘性砂質土
- 5.明灰褐色粘質土
- 6.暗灰褐色粘性砂質土
- 7.明灰褐色粘質土(縁合み)
- 8.暗黄灰色粘質土
- 9.暗茶褐色粘質土
- 10.淡黄灰色砂質土
- 11.暗褐色粘質土
- 12.暗灰褐色粘性砂質土(床土)
- 13.暗褐色土(黄褐色土塊)
- 14.黄灰色粘質土(縁合み)

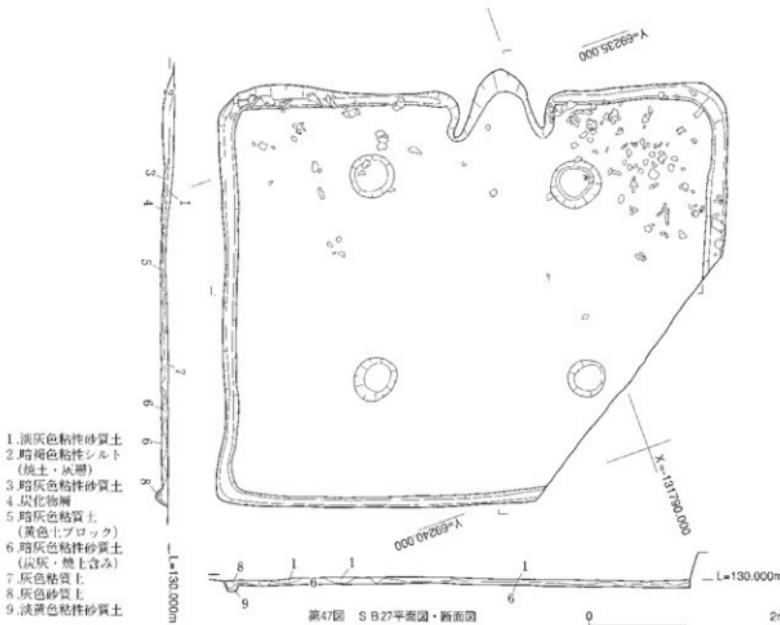


第46図 S B26平面図・土層断面図

S B 26 M区北部の東壁沿いで検出したほぼ直角に隅部をつくる方形の竪穴住居である。西辺と北・南辺の一部を検出した。竪穴住居の規模は、南北4.3m、東西1.5m以上、深さ10cm前後を計測する。各辺に幅10cm～15cmの窓溝がめぐる。床面は、北側に暗灰色粘性砂質土（黄色土：ブロック）を厚さ8cm～12cm前後で敷き、さらに南側では、茶褐色粘質土を貼りつけてほぼ水平な床面をつくっている。北側の隅部床面上では、弥生土器小型甌の底部83、甌底部84が出土している。

S B 27 N区中央部の北よりで検出した方形の竪穴住居である。竪穴住居の南東部は調査区外となる。北辺中央やや東よりに竈を設け、各辺に幅20cm、深さ5cm前後の周窓溝がめぐる。S B 27の規模は、東西5.2m、南北4.2mのやや長方形で、壁体の残存状況が良好な北東部で壁体を17cm残存させる。竈の煙道部は、北辺から舌状に20cm前後張り出している。竈の壁体は、竪穴の壁体から造り付けられ、竈壁体の袖はやや西側にひろがる「八」字状で、幅15cm～40cm（下端）、高さ30cmを計測する。竈内は、焦土層と灰層が交互に堆積し、竈底面は、被熱面が残存していた。煙道の角度は約20度で立ち上る。

支柱は5ヶ所検出された。北側の支柱は北壁より0.9m、東・西壁より1.5m距離を描く。南側の支柱は南壁より1.4m、東・西壁より1.5mの距離を描いている。東西の柱間間隔は2.2m等間、南北の柱間間隔は2.2m等間を計測する。なお北東部の支柱は、東側0.7mにもうひとつの支柱穴が検出されていることから、南東側支柱も0.7m東（調査区外）に支

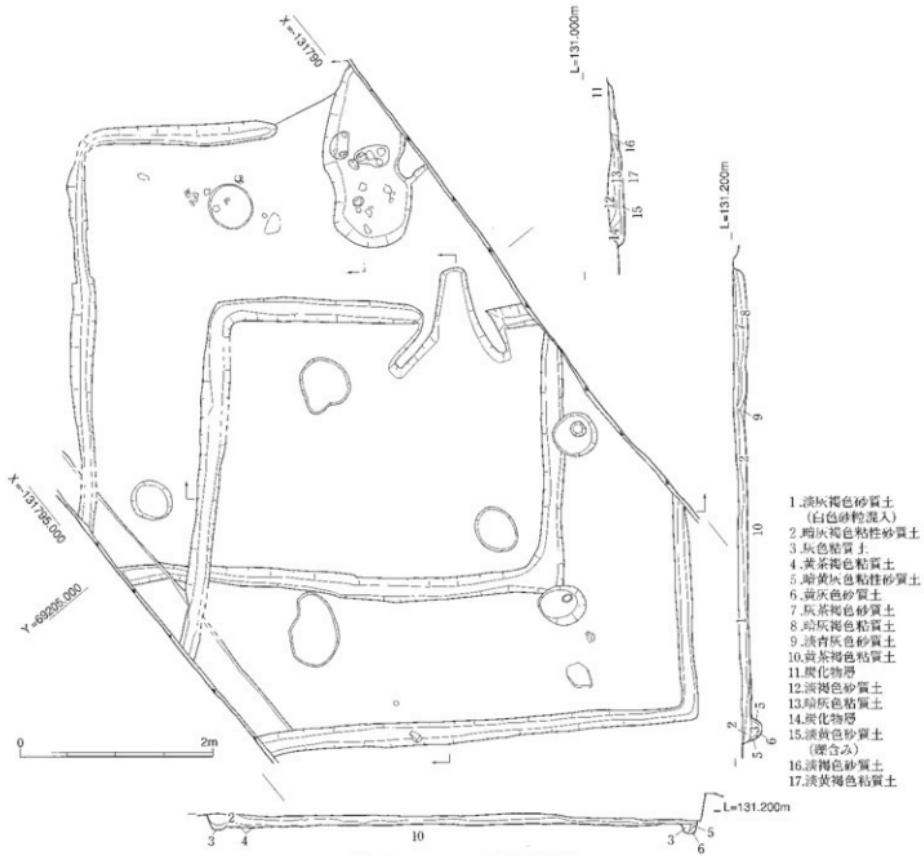


柱穴が存在する可能性もあり、東側の支柱は建て替えていたとも考えられる。床面には、南西部から北東部にかけて、焦土と炭化材が灰層と併に堆積し、S B 27が何らかの理由で火災をうけ、廃絶した可能性がある。北壁沿いの炭化材の上層には破碎されて投棄されたと考えられる須恵器壺片が多量に出土した。なおこの多量の須恵器片は被熱せず鎮火後まもなく投棄されたものと考えられる。壺の破片は3個体分壺76、77、78、短頸壺75である。

S B 32

O区西部で検出した方形の堅穴住居である。北辺中央やや東よりに竈を設ける。竈部分を除いて各辺に幅20cm前後、深さ15cm前後の周壁溝がめぐる。北西隅部及び南東隅部は調査区外となっている。S B 32の規模は、東西5.2m、南北4.7mのはば方形の平面形で、壁体は10cm～12cm前後を残す。

竈の煙道は北辺から50cm前後張り出し、竈の壁体は堅穴の壁体から造り付けられる。竈



第48図 S B 32・S B 33平面図・断面図

壁体の袖は、やや西にひろがる「八」字状ので、幅30cm前後、高さ20cm前後の灰白色粘土と灰色砂質土を積み上げて構築している。竈の埋土は、焦土層と灰層が交互に堆積し、竈底面は明瞭な被熱面は検出されなかった。

東側の支柱は、南・北辺から1.3m、東辺から1.3mに位置し、西側の支柱も北辺から1.3m、西辺から1.3mに位置している。柱間距離は南北1.8mなど間、東西2.4mなど間を計測する。

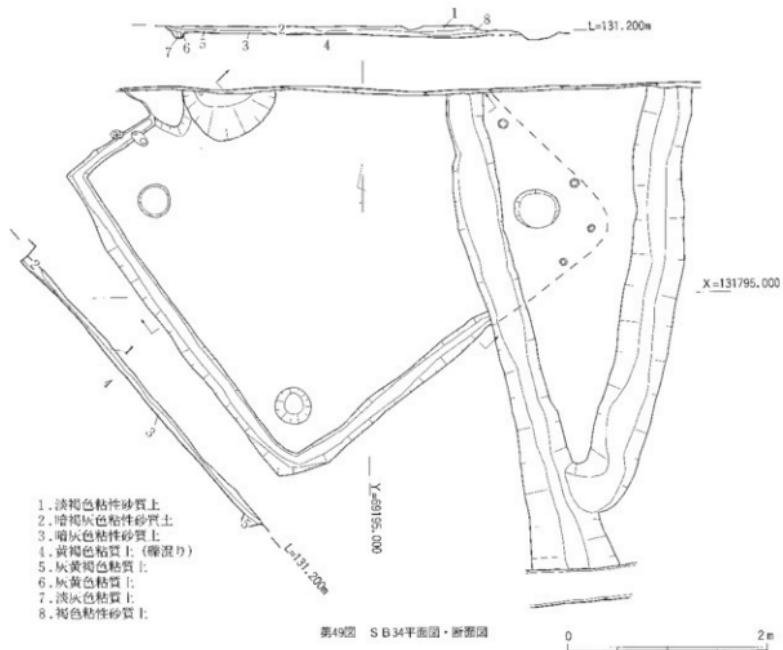
出土遺物は、竪穴住居の南東隅部付近で置き石と考えられる石材を検出した他、床面上で蓋82と、床土内もしくは、S B 33壁溝内に長頸壺腹部片81を検出した。

S B 33

O区のS B 32北西側下層で検出した方形の竪穴住居である。北辺中央やや東よりに竈を設ける。竈と竈から西側1mを除いて、各辺に周壁溝がめぐる。竪穴の北東部・南西隅部は調査区外となる。また、S B 33の南東部はS B 32の下層で検出した。S B 33の規模は東西5.0m、南北4.8mのほぼ方形の平面形である。壁体は、残存状況が良好な北西隅部で18cm(床面まで12cm前後)を計測する。

竈は長さ1.9m、幅0.8m、深さ6cm、断面舟底状の長楕円形の掘形を設ける。掘形の東側に袖を設けているが、西側の袖は欠損している。竈内の埋土は、焦土・白色粘土・灰層が交互に充填され、土器片が出土した。

支柱は、北西・南西・南東の各隅部に接して検出した。柱掘形は径50cm前後の円形で、



いずれも10cm～20cm前後の深さしか残存させていなかった。柱間距離は、南北・東西とも3.5mを計測する。出土遺物は、竈内埋土から土師器片、竪穴床面北西部で土師器片が集中して出土した。

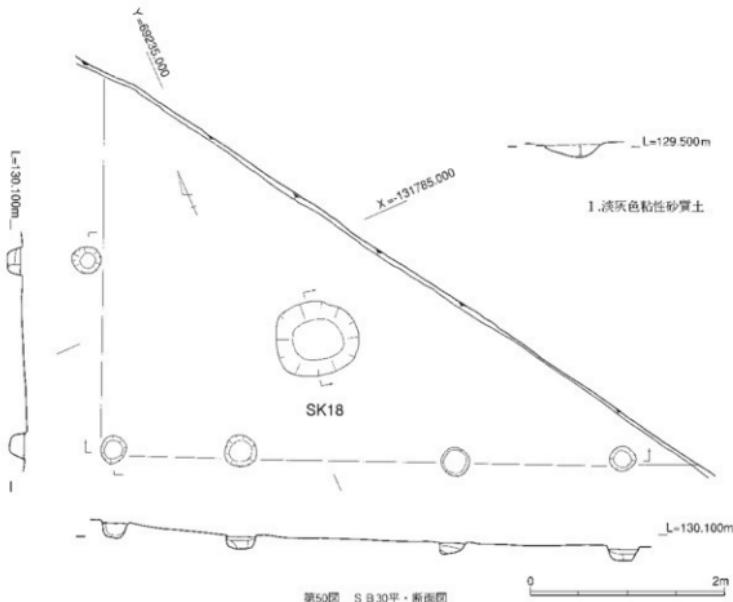
S B34 P区の西端で検出した方形の竪穴住居である。北辺中央部に竈を設け、各辺に周壁溝がめぐると考えられる。しかし、南東部は近現代の水田造成及び中世の溝S D20によって削平されているため窓溝は検出されなかつたが、径10cm、深さ3cm前後のピット列を検出し、周壁溝内にあるピット列として竪穴の復元を試みた。また、竈東半分及び竪穴北東部は調査区外となる。以上から確認されるS B34の規模は、東西4.1m、南北3.8mのほぼ方形の平面形で、壁体は7cm前後（床面まで2cm前後）しか残らず、後世の削平をこうむっていると考えられる。

竈はトレーナー北壁際で検出した。下端幅で40cmの袖を残し、幅80cm前後の灰溜りを設けている。灰溜り内の埋土は、灰、焦土、炭層が充填されていた。灰溜り底面では明瞭な被熱面は確認されなかつた。

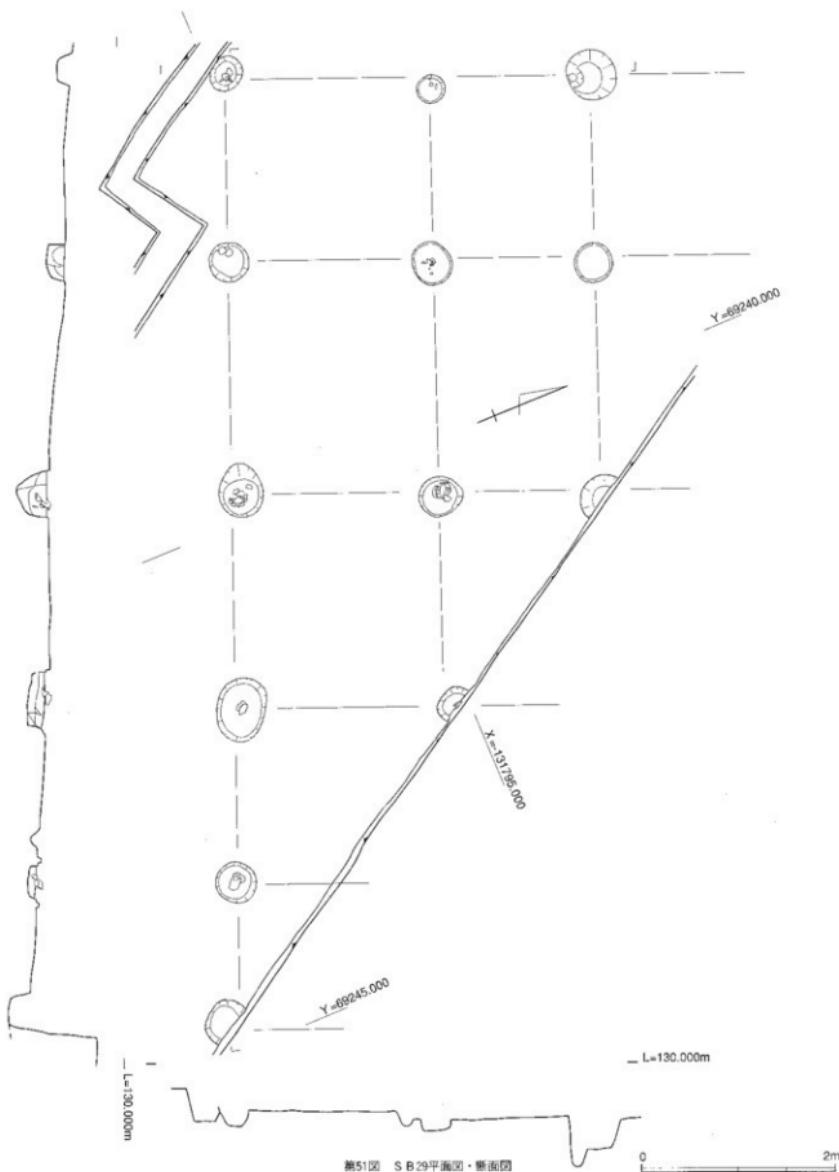
支柱は竪穴隅部に近接して3ヶ所検出した。柱掘形は径35cm～50cm、深さ25cm前後の円形の柱掘形であるが、南東側の柱掘形は深さ30cmで深い。柱間距離は南北で2.6m、東西で3.2mを計測する。

出土遺物は竈西側の周壁溝周辺から須恵器片・土師器片が出土している。

堰立柱建物 S B29 N区の中央で検出した東西5間（9.9m）以上、南北2間（3.9m）の東西棟、総柱の堰立柱建物である。建物の東北部は調査区外となる。建物の方向は北68度西を探る。柱間は



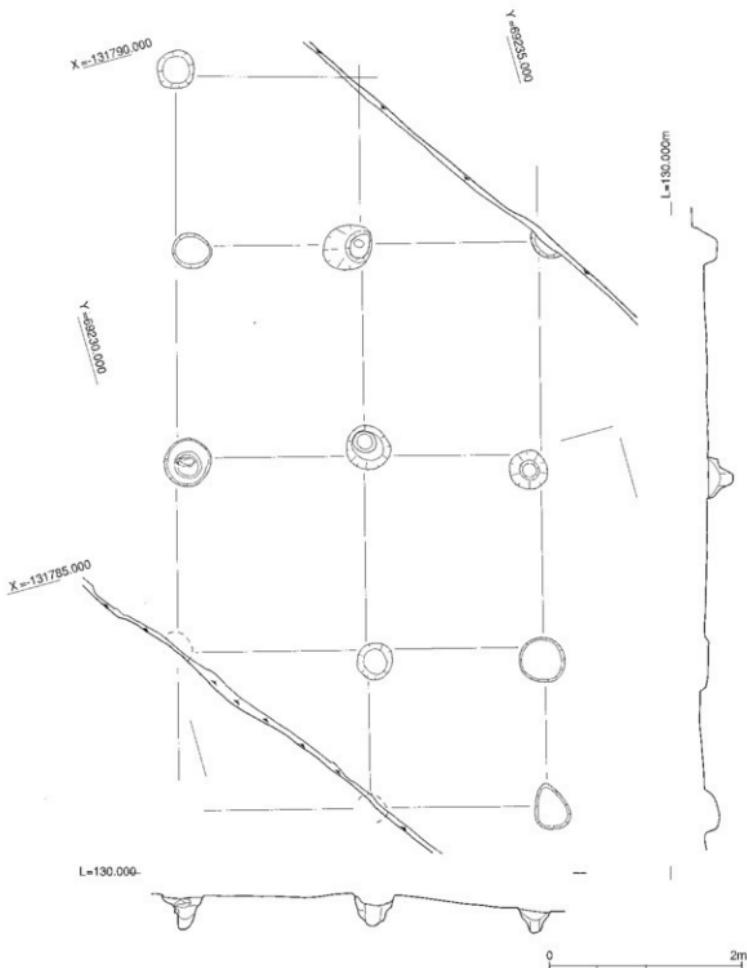
第50図 S B30平・断面図



東西桁行で西から2.1m、2.2m、2.1m、2.0m、1.5m、梁間は北から1.5m、2.0mを計測する。柱掘形は、直径30cm~50cm、深さ10cm~30cm前後の円形掘形である。柱掘形の中には、柱を抜き取った後1個体分の羽釜74を破碎した後、破片を分けて数ヶ所の柱掘形の抜き取り跡に充填して柱の建て替えを行っているものもある。

S B 30

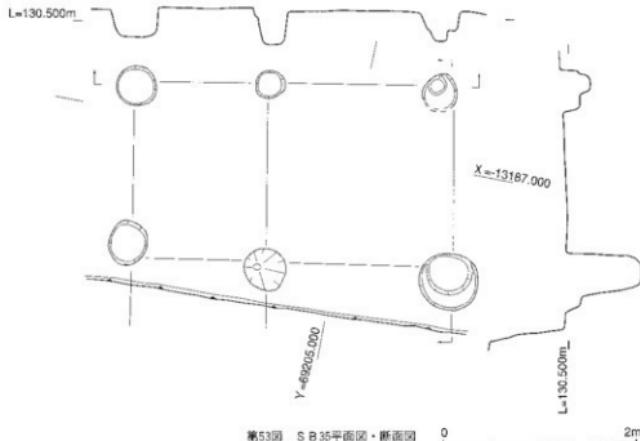
N区の北部東壁沿いで検出した東西棟の掘立柱建物である。東西3間(5.3m)以上、南北2間(4.0m)以上を計測する。建物の方向は北65度西を採る。建物の北東半は調査区外となっている。柱間は桁行で西から1.4m、2.1m、1.7m、梁間は2.0m等間を計測



第52図 S B 30平面図・断面図

する。柱掘形は直径30cm前後、深さ15cm前後の円形である。柱掘形内からは須恵器・土師器の細片が少量出土した。

S B31 N区の北端で検出した東西2間(3.8m)、南北4間(7.8m)以上ある総柱の南北棟獨立柱建物である。建物の東北部及び南西部は、調査区外となる。建物の方向は北18度東を採る。柱間は、桁行で北から1.8m、2.2m、1.8m、1.5m、梁間で1.8m等間を計測する。柱掘形は直径40cm~50cm前後の円形で、深さは6cm~35cmまで残存させる。柱掘形



の内一部で、柱抜き取り痕跡が明瞭なものも2~3あり、抜き取った後石材を置いて礎盤とする柱もあり、建て替えを行った痕跡と考えられる。柱掘形内からは皿79・80が出土している。

S B35 O区西端の南壁沿いで検出した東西棟の掘立柱建物である。東西2間(3.2m)、南北1間(2.0m)以上の総柱建物で、建物の南半は調査区外となっている。建物の方向は北10度西を採る。柱間は桁行で1.8m、梁間で西から1.5m、1.8mを計測する。柱掘形は直径40cm~50cm前後の円形で、深さは大部分が30cm前後であるが、東側桁柱の柱掘形は深さ75cmを計測する。この東側桁柱の掘形内からS B32床面出土の長頸壺脚部の一部が出土している。

溝 S D14 調査中、S D16・S D19として、造物の採り上げを試みたが、調査の結果何れも遺構上面における凹部と判断されたため、遺構として検出しなかったので欠番とした。

M区南端で検出した北東から南西に走る断面U字形の素掘り溝である。幅0.6m~0.8m、深さ20cm前後を計測し、約6m分検出した。北東・南西側は調査区外にのびる。溝の埋土は2層に分かれ、下層の茶褐色砂礫土層内から弥生土器細片及び須恵器・土師器片が出土した。

S D15 M区南端S D14と平行して走る断面U字形の素掘り溝である。幅0.3m~0.4m、深さ6cm前後を計測し、約6m分検出した。北東・南西側は調査区外にのびる。溝の埋土は、灰

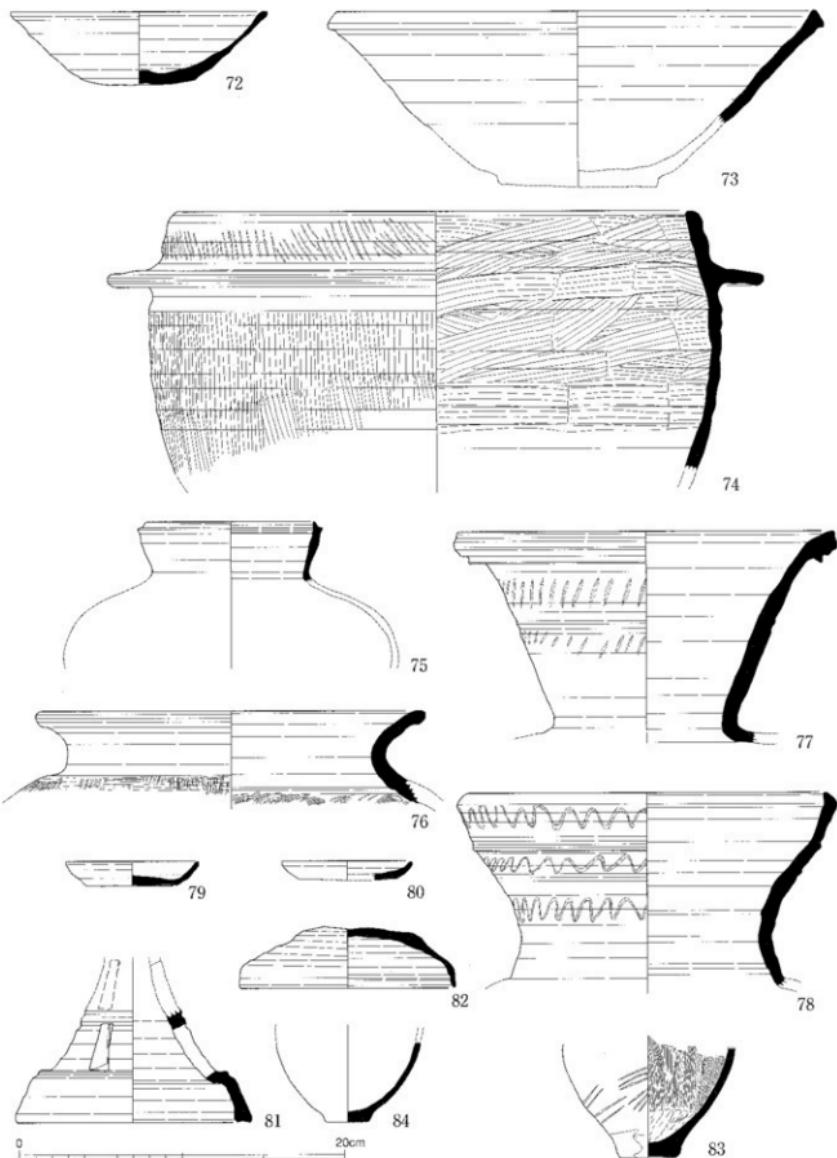
- 色粘質土（黄褐色砂礫土含み）一層で、土師器・須恵器片が出土している。
- S D17 O区東端で検出した北から南に走る断面皿状の素掘り溝である。幅1.0m～1.3m、深さ10cm前後を計測し、南壁際でS B28の掘形を切っている。北・南側は調査区外にのびる。溝の埋土は灰色砂で、埋土内から土師器細片が出土した。
- S D18 O区中央で検出した北から南に走る断面皿状の素掘り溝である。幅1.0m～1.3m、深さ10cm前後を計り、S D17と同様の性格をもつ溝と考えられる。溝の埋土は灰色砂で、埋土内からの出土遺物はない。
- S D20 P区西端、S B34の東側、水田区画段沿いに検出した北から南に走る断面U字状の素掘り溝である。幅0.5m、深さ13cm前後を計測する。淡灰色粘性砂質土を埋土として、S B34を切り、S D21にきられる。
- S D21 P区西端水田区画段下を南西～北東にはしる断面形V字形の素掘り溝である。南端で西に屈曲する。幅0.3m、深さ25cm前後を計測する。北東側は調査区外に伸びる。溝の埋土は三層に分かれ、中層埋土から上師器壺片が出土している。
- 土坑 S K12 N区北部S B30の中央西より検出した楕円形の土坑である。長径0.8m、短径0.7m、深さ15cmを計測する。断面形はU字形である。灰色砂質土を埋土とし、土師器羽釜片が出土した。S B30に付属する施設の可能性がある。



写真5 S K12検出状況

(2)出土遺物

- S B27 塚72は法量口径15.6cm、器高4.6cmでやや開いて直線的な体部で、口縁端部は肥厚させて丸くおさめる。見込み部のくぼみがない。
- 捏ね鉢73は法量が口径29.4cm、器高11.0cmで、直線的にのびる体部に、上方に摘み上げた口縁部がつく。



第54図 第1調査区-3 出土遺物実測図

羽釜74は内弯する体部にはほ水平な鍔をつけ、体部と一体につくられた口縁部をもつ、口縁部は粗いタタキによって器形を整えた後、強くナデを行い調整されている。鍔は貼り付け後に強い回転ナデを行なう。この回転なでは、体部の基本調整である幅4cm前後の粗いタテハケを消している。内面は幅4cm前後のヨコハケ調整を行なう。

S B31 須恵器皿79は法量口径8.1cm、器高1.4cmの完形品の小皿である。やや内弯気味に立ち上る体部に、上方にナデを行い、三角形状の端部をつくる口縁をもつ。内面の見込み部は、強いナデを行い四部をつくり、底内面中央部はやや突出する。底部外面はヘラキリの後、ていねいにナデを行なう。器壁内面に炭化物が付着する。

土師器皿80は法量口径7.9cm、器高1.1cmでやや内弯する口縁部を2回に分けてナデを行なう。

S B27 火災作居S B27の甕側周辺の埋土内で検出した。広口壺2個体、壺1個体と短頸壺である。火災後投棄された可能性がある。破片量は多いが口頸部と体部の接合はできなかった。

直口壺75は全体に自然釉が付着して、調整は不明である。体部は欠くものの藤原宮第20次 S D1901A出土土器に類例があり、やや肩のはった丸い体部がつくと考えられる。

広口壺77は頸部から斜め上方に直線的にラッパ状に口頸部をつくり、口縁部は下方に粘土を2段に重ねて、ナデを行なう加飾する。頸部中央に2条の凹線をめぐらし、上下にヘラによる列点をめぐらせる。

広口壺78は頸部が内側にくびれた後、外反してして、口縁下端で内弯気味に立ち上る。口縁部は、内側に折り曲げられ、強くナデを行って仕上げられる。口縁下端下に突帶、口頸部中央で凹線をめぐらせて区画し、口縁下端から1条のヘラ描き波状紋を3条施す。

壺76は、短く外反する口縁部の端部は外方に折り曲げて肥厚させ丸く仕上げる。頸部下端の接合は内面を強いナデを行って凹線状にくぼませ、この凹線状の部分から下は青海波の同心円紋の内型をあてる。肩部内面は、平行タタキ目が施され、その上から横方向のハケを施す。

その他造構内 長頸壺81は、S B32床面及びS B35柱掘形内から出土した長頸壺の脚部である。外反する脚部に、内弯して踏ん張る脚端部をとりつける。脚部中央と端部との境に凹線をめぐらせて区画し、長方形の透かしを上下2段・3方に設ける。

壺82はS B32床土内から出土した法量は口径13.2cm、器高3.8cmで、口縁下端から強くナデを行い、口縁部が垂直に立ち上ることから坯身として用いられた可能性もある。頂部外面はヘラケズリによって調整されるが粗く、頂部中央にヘラキリの際の凹部を残す。内面の調整は底部中央を不定方向の手ナデ仕上げの他、体部外面及び内面は回転ナデ仕上げを行なう。

弥生土器壺84は、S B26床面検出の小型細頸壺の底体部片である。無花果状の体部に円盤状の底部をつける。器壁の残存状況が悪く、調整等は不明である。

弥生土器壺83は、S B26埋土内出土の小型壺底部片である。底部内面ははたて方向のヘラケズリ、体部はタテハケ調整を行なう。外面は左下がりのタタキを行なう。底部側面に黒斑がみられる。

第2節 小 結

第3次調査では、弥生時代の集落と飛鳥時代から奈良時代にかけて営まれた集落、鎌倉時代・室町時代の集落等を検出した。

弥生時代の集落遺構は、第1調査区-3の段丘上の堅穴住居2棟、第1調査区-2の段丘斜面の土坑3ヶ所などである。淡河町における弥生時代の集落遺構は、昭和51年度淡河土地改良事業に伴う発掘調査で淡河城址南東の高位の段丘上で検出された堅穴住居が初例である。この堅穴住居は方形の堅穴に屋内高床部を設けるもので、出土遺物などから弥生時代終末期～古墳時代初頭の堅穴住居と考えられている。また、この堅穴住居周辺では土地改良事業工事中に堅穴がいくつか観察されていることから、比較的まとまった集落であった可能性がある。一方、勝雄遺跡の場合明確に検出できたS B28は隅丸方形ないしは五角形の平面形に屋内高床部を造り付ける構造で淡河城址南東の堅穴住居より古い形態的特長を有する。さらに方形堅穴住居S B26では床面上で弥生時代後期後半の甕・壺形土器片が出土していることから、勝雄地区では弥生時代後期には居住密度は散漫ながら、小規模な散村的な集落が営まれていたと考えられる。

飛鳥時代には、淡河八幡神社周辺、淡河天神社北の段丘上に竈を造り付ける堅穴住居によって構成される集落が出現する。堅穴住居はいずれも矩形を呈し、短辺ないしは長辺の中央に竈を造り付ける。竈の方向はおおむね北西方向を指向し、整然とした集落景観を形成していたと考えられる。竈を造り付ける堅穴住居の時期は、第1調査区-3の焼失住居S B27の埋没土出土土器が飛鳥Ⅳ期、第1調査区-1のS B14床面、第1調査区-2のS B19床上出土土師器が飛鳥Ⅱ期に比定でき、堅穴住居の存続期間はおおむね7世紀の第2四半期から第4四半期の中とできる。一方、淡河八幡神社周辺では方形の柱掘形で構成される掘立柱建物が集中して検出された。掘立柱建物の時期は掘形内からの出土遺物は非常に少なく不明確であるが、第1調査区-2で検出されたF区Pit11に埋められた状態で出土した土師器甕66から飛鳥Ⅳ期の前半に比定できる。そして、掘り返しなどにより長期間使用された第1調査区-2 S D07の最終埋没時期が奈良時代後半と推定されることから、掘立柱建物は7世紀の第3四半期から8世紀前半まで存続し、一的には堅穴住居と併存していたと思われる。また、一部の掘立柱建物は、堅穴住居の廃絶後に同一場所に建てられたと伺える例もあり、堅穴住居から掘立柱建物への村落内における移行を裏付ける可能性もある。さらにまた、掘立柱建物は2間×3間または2間×4間の束柱のない構造で、規模（床面積）もほぼ均一で、堅穴住居と同様に画一的な村落形成が行われたと考えられる。

奈良時代以降、集落は一時期断絶するが、平安時代末葉になると河岸段丘の高位に大型の掘立柱建物がたてられる。この大型建物S B29・31は同一方位を探り、L形に並び計画的に配置された一連の建物と考えられる。大型建物S B29・31の時期は、S B29の柱礎盤に用いられた片口鉢片・柱周りに埋められた土師器羽釜片、S B31掘形内出土の須恵器皿・土師器皿の形態から十二世紀前半と考えられる。一方、小型の柱掘形を探るS B01・S B31は明確な出土遺物はないが、周辺の遺物包含層からの出土遺物から室町時代に降る建物と考えられる。

第VI章 第4次調査

第1節 調査の概要

A. 第2調査区

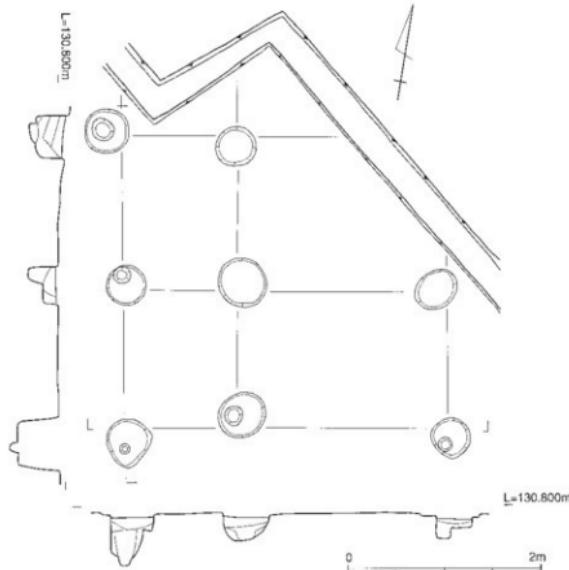
第2調査区は、第2次調査で調査を実施した第33号支線排水路部分の北側と南側において調査を実施した。南側部分は河岸段丘の突端にあたり、土地区画が3ヶ所に分かれるため3ヶ所のトレンチを設定して調査を実施した。いずれのトレンチも現在の耕作上・旧耕土・水田造成土直下に黄色粘質土（疊合み）の基盤層となり遺構は確認されなかった。

第2調査区の北側部分では、北端の東西トレンチで遺物包含層がみられ、包含層内から鎌倉時代～室町時代の須恵器、土師器が出土している。包含層直下の淡黄灰色砂質土上面で溝・ピット12ヶ所・落ち込み2ヶ所が検出された。遺構からの遺物はいずれも細片で時期を明確できなかった。南北トレンチ河岸段丘下で掘立柱建物（SB01）と落ち込みを検出した。この掘立柱建物は不定形な落ち込み（SX01）が埋め立てられた後に建てられている。調査区南端ではピット4ヶ所を検出しただけで遺構の分布密度は希薄になる。

(1) 検出遺構

SB01

第II調査区の東西トレンチ中央西よりで検出した東西2間（3.3m）、南北2間（3.0m）以上の南北棟の掘立柱建物である。建物の棟方向は北10度西を採る。柱間は、桁行（南北方向）で1.5m等間、梁間（東西方向）で西から1.2m、2.2mを測り、西に庇を設ける建



第55図 SB01平面図・断面図

物とも考えられる。柱掘形は直径40~50cmの凸形もしくは不整形で、径20cm前後の柱痕跡を残すものもある。柱掘形の残存深度は、延べ南西隅の隅柱が60cmの深さで残る他は、20~40cm前後を残す。

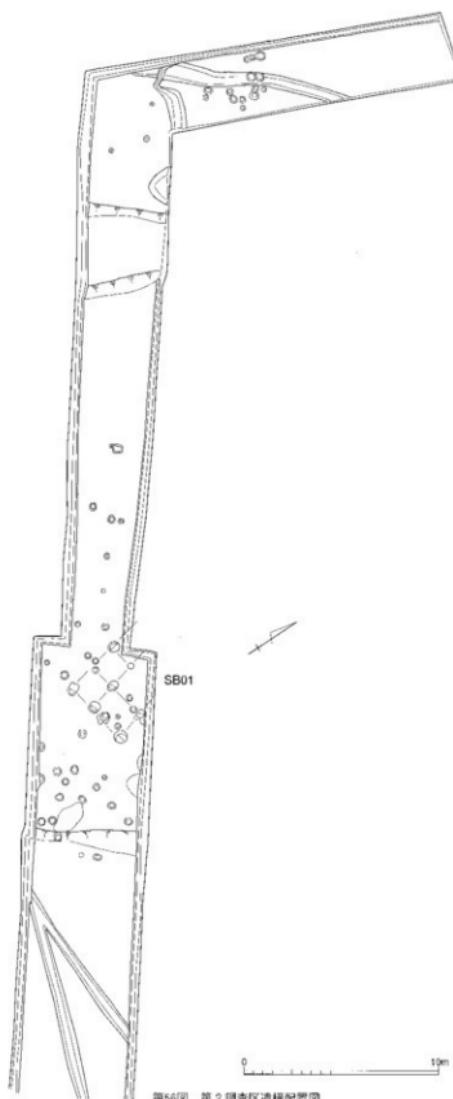
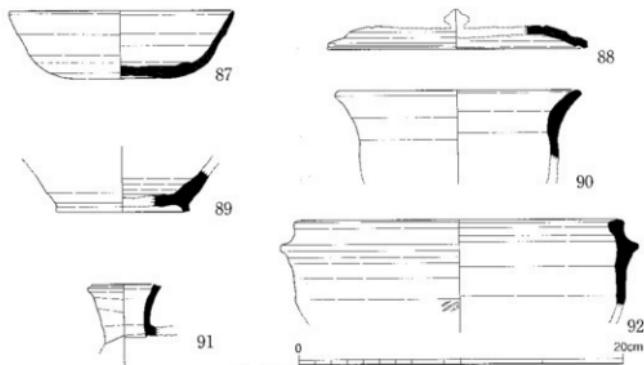


図56 第2調査区遺構配置図



第57図 第2調査区出土遺物実測図

S X01 東西8m前後の不定形な落ち込みである。最も深い部分で55cmを測る。底面も起伏が激しく、断面の形状も一定でない。埋土内からは奈良時代の須恵器片が出土している。

(2) 出土遺物

須恵器壺A87・蓋88・平瓶口頸部91・弥生土器壺90はS X01内からの出土。須恵器壺89・土師器壺92は旧耕作土から出土した。

壺A87は法量（口径14.0cm、器高4.2cm）の中型品である。胎土は灰白色で、焼成はあまり、調整等は不明である。

蓋88は、頂部上面をへら削りし、口縁部を段状に屈曲させる。口縁部端面に沈線を施す。口縁部内面ナデによる窪みがめぐる。全体に自然釉をかぶっている。

平瓶口頸部91は肩部からほぼ垂直に立ちあがり内傾する口縁部をつくる。口縁部端面は丁寧な回転ナデを行なう。外面は一部で自然釉がかぶる。内面は毛刷毛状のなでを施す。

壺89は径8.2cmの狭い底部から直線的に立ち上る体部をつくる。体底部の壇直下に短い高台をつける。

壺86はほぼ垂直に立ち上る口縁部下端に鈎を貼り付ける。口縁部は全体にナデ調整を行なうが、底部付近はタキを施す。

壺90は、如意状に外反する口縁部をもつ弥生時代第V様式の小型彫形土器で端部に面を持つ。

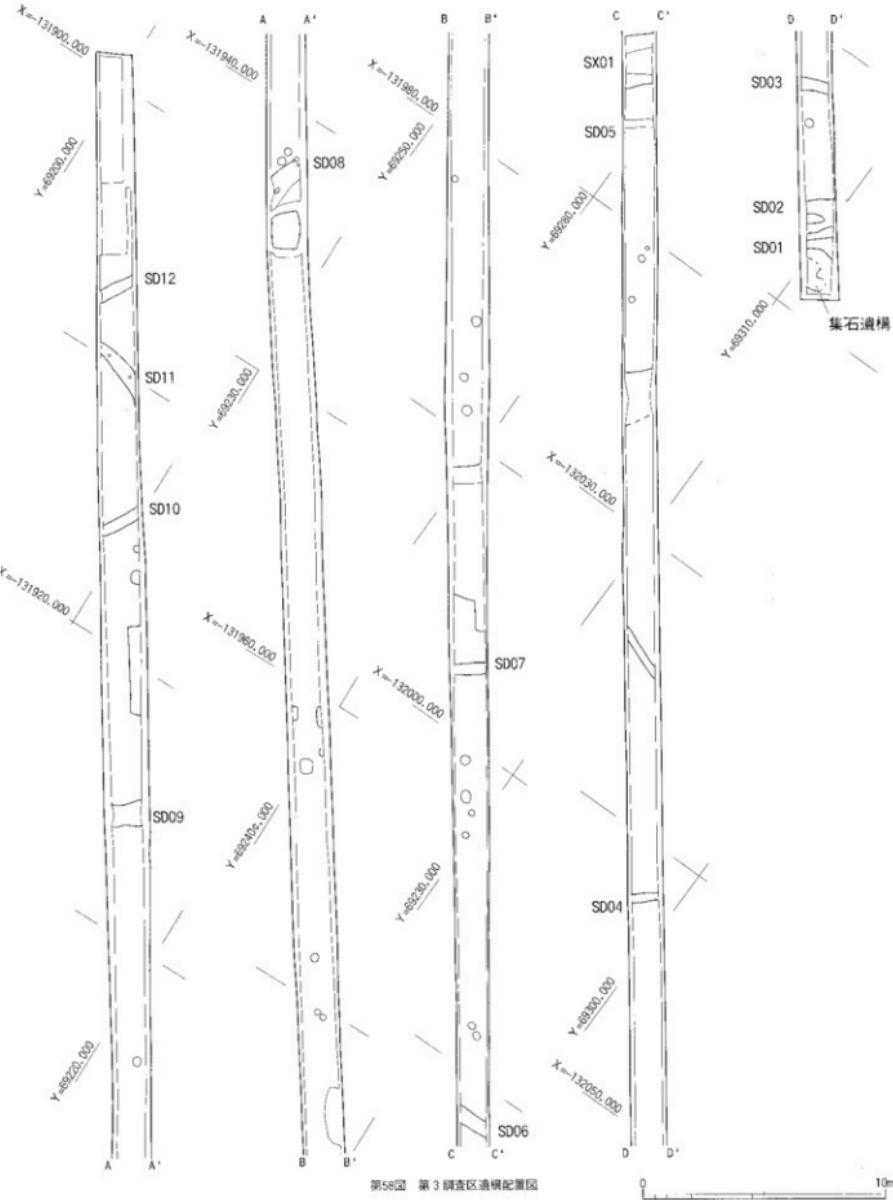
B. 第3調査区

第3調査区は、第9号支線排水路部分の工事掘削範囲（全長200m、幅1.5m）を、調査区北部より設計水田毎にA～Gの地区割りを設定して調査を実施した。

調査区は、河岸段丘から淡河川に向かって延びる谷状部分に位置する。調査区の中央部付近は湿地状の地形が広がっていたものと考えられる。調査区の基本層序は、現地表面から0.9mまでは現代耕作土・床土・旧耕作土で、中世～現代の陶器・土器等が出土している。一部遺物包含層が残存する部分があるが、ほとんどの地山面が遺構面であった。

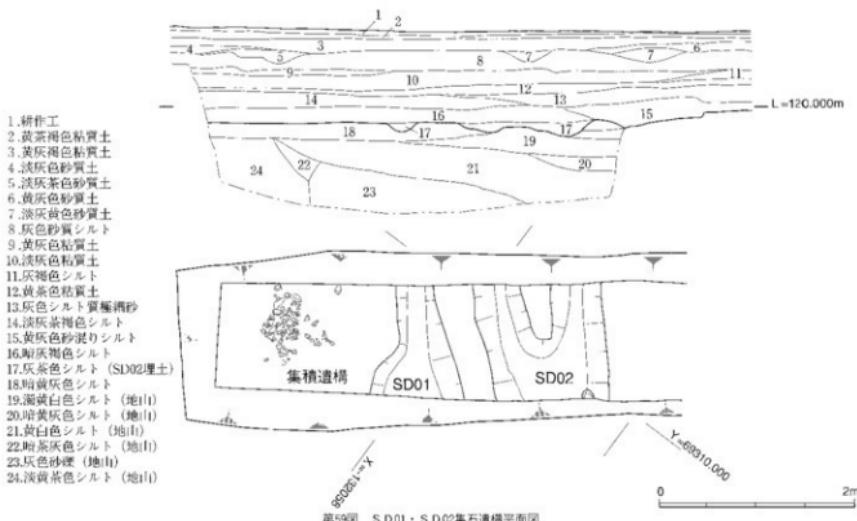
(1) 検出遺構

- A区 旧耕作土の下に中世の遺物包含層が検出され、遺物包含層の下は淡灰褐色粘質土の遺構面となり、溝4条を検出した。
- S D12 北部で検出された北東から南西に走る断面U字形の素掘り溝である。幅0.4m前後、深さ0.2mを測り、1.6m分を検出した。埋土は2層に分かれる。遺物の出土はなかった。
- S D11 S D12に南接して検出された北から南に走る断面U字形の素掘り溝である。幅0.5m前後、深さ0.2mを測り、3m分を検出した。埋土からは遺物の出土はなかった。
- S D10 S D11のやや南側で検出された北東から南西に走る断面U字形の素掘り溝である。幅0.4m、深さ0.1mを測り、1.5m分を検出した。埋土からは遺物の出土はなかった。
- S D09 南端の湿地状部分で検出された北東から南西に走る断面皿形の素掘り溝である。幅1m前後、深さ0.3mを測り、1m分を検出した。埋土は2層に分かれるが、遺物の出土はなかった。
- B・C区 口耕作土直下の淡黄灰色粘質土の上面から溝が1条、直径0.3m、深さ0.1~0.2mのピットを4基検出している。ピットは建物としてはまとまらない。
- S D08 B区の北端で検出された北から南に走る断面U字形の素掘り溝である。幅0.9m、深さ0.5mを測り、1.5m分を検出した。埋土は2層に分かれ、下層は0.4mの厚みをもち、砂礫が充填されている。遺物の出土はなかった。
- D~F区 盛土直下の茶灰色粘質土の上面から、溝3条、落ち込み1カ所、直径0.3m、深さ0.2m前後のピットが18基検出され、建物としてはまとまらない。
- S D07 E区の中央部で検出された北東から南西に走る断面U字形の素掘り溝である。幅0.3m前後、深さ0.1mを測り、1.4m分を検出した。埋土からは遺物の出土はなかった。
- S D06 F区の北部で検出された西から東に走る断面U字形の素掘り溝である。幅0.6m前後、深さ0.2mを測り、1.4m分を検出した。埋土からは遺物の出土はなかった。
- S D05 F区の北部で検出された北東から南西に走る断面U字形の素掘り溝である。幅0.3m前後、深さ0.2mを測り、1.4m分を検出した。埋土からは遺物の出土はなかった。
- S X01 F区の北部でS D06・07に挟まれた位置で検出された浅い皿状の落ち込みである。幅2.1m、深さ0.2mを測る。埋土からは遺物の出土はなかった。
- G区 北半では旧耕作土直下の茶灰色砂質シルト、南半では暗灰褐色シルトの上面から溝が4条掘り込まれている。南端の2本の溝は層位的にA~G区北半までの遺構面よりも下層に位置するため、周辺の遺構の時期よりも古い段階のものと考えられる。直径0.4m、深さ0.3mの柱穴を1基検出している。
- S D04 中央部で検出された北東から南西に走る断面U字形の素掘り溝である。幅0.4m前後、深さ0.3mを測り、1.4m分を検出した。埋土からは遺物の出土はなかった。
- S D03 南半で検出された東から西に走る断面U字形の素掘り溝である。幅0.5m、深さ0.3mを測り、1.4m分を検出した。埋土からは遺物の出土はなかった。
- S D02 南端で検出された北東から南西に走る断面皿形の素掘り溝である。幅1.2m、深さ0.2mを測り、1.2m分を検出した。西壁面付近では溝の中央に島に盛り上がる部分が存在した。埋土からは遺物の出土はなかった。



第58図 第3調査区遺構配置図

SD01 SD02の南に並行して検出された北東から南西に走る断面彫形の素掘り溝である。幅0.4~1m、深さ0.2mを測り、1.2m分を検出した。埋土からは土師器・須恵器細片が出土している。



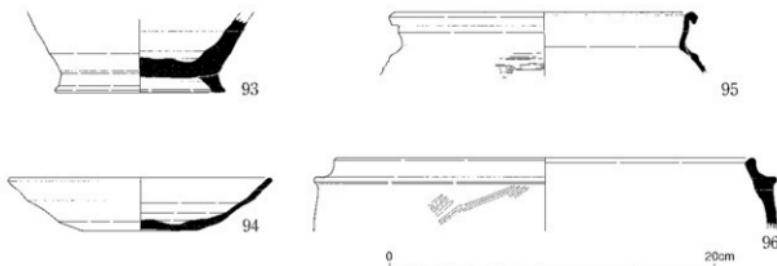
第59図 SD01・SD02集石道溝平面図

集石遺構 SD01の南に直径80cmの不正形な円筒形の中に、直径5~6cmの礫が集中して検出された。断面観察でも掘り込みは確認できなかったが、周辺には礫層が露出しているような状況は見られないため、人為的に置かれたものと考えられる。

(2) 出土遺物

壺93はA区の遺構面上から出土した高台部である。脚部は外方にふんばり、外面に接地面をもつ。底部を除き全体に回転ナデを行なう。底径は10.2cmである。

壺94はA区の遺構面上から出土している。法量は口径16cm、器高3.3cmで、平らな底部



第60図 第3調査区出土遺物

から外方に開きぎみにかつ直線的に立ち上る体部をもつ。底部は糸切りで、体部は回転ナデを行なう。見込みの段はつくらない。

壺95はB区の遺構面直上層から出土した口縁部である。口径は18.3cmで口縁端部を折り曲げて縁状を呈する。頸部はやや外方に開くように立ち上る。調整は口頭部外面から内面にかけては回転ナデ、体部外面はタタキを行なう。タタキの単位は不明である。

羽釜96はG区の遺構面直上層から出土した口縁部である。幅の狭い鶴をもち、体部はゆるやかなカーブを描く。体部外面は細かい片のタタキを施し、内面はユビオサエを行ったあとナデを行なう。

C. 第4調査区

全長122m、幅2.5mの排水路布設部分の調査である。東側より設計水田毎にA～Dの小区割りを設定した。

調査区は、河岸段丘の裾部にあたり、段丘に並行して位置する。調査区の基本層序は現地表下1.0m～14cmまでは、現耕作土および旧耕作土・床土で奈良時代以降の須恵器・土師器・陶器を含み、2～3度の水田造成が繰り返されたと推定される。

(1) 検出遺構

A区

遺物包含層は後世の水田造成により削平されたものと推定され、現耕作土及び旧耕作土直下は地山層である黄褐色シルト層であった。溝2条、落ち込み1ヵ所を検出したが、遺物は出土しておらず時期については不明である。

検出した遺構は、SD08が南東・北西方向の溝で、規模は幅1.0m前後、深さ10cmである。SD09は、北東・南西方向の溝で、幅1.7m前後、深さ30cmである。SK03は南端付近で検出した落ち込み状の土坑で南北1.74m、深さ33cmで調査区外へ広がる。

B区

基本層序はについてはA区と同じである。B区では溝2条を検出したが、共に遺物の出土はなく、時期については不明である。

SD06、07は共に南西・北東方向の溝で、SD06は北側がSD07によって切られている。規模は、SD06は幅80cm前後、深さ5cmで、SD07が幅44～74cm、深さ5cmである。

C区

C区でも、基本的に層序はA、B区と変化はない。旧耕土直下の灰色砂質シルトから遺構が掘り込まれている。掘立柱建物1棟、溝1条を検出した他、ピット数基を検出した。

SB01

南西方向に9.35m以上の規模をもつ掘立柱建物で、4間分を検出した。南西側および、これに直交する方向の規模については調査区外となるため不明である。柱間寸法は北から2.1m、2.3m、2.4m、2.5mを計測する。柱掘形は直径40～65cmで、残存する深さは検出面から35～50cmである。直径10～20cm大の石を充填し、柱材の固定、補強を行い、軟弱な地盤での柱材の沈下等を防いだものと推定される。柱穴掘形内からの遺物の出土はなかった。

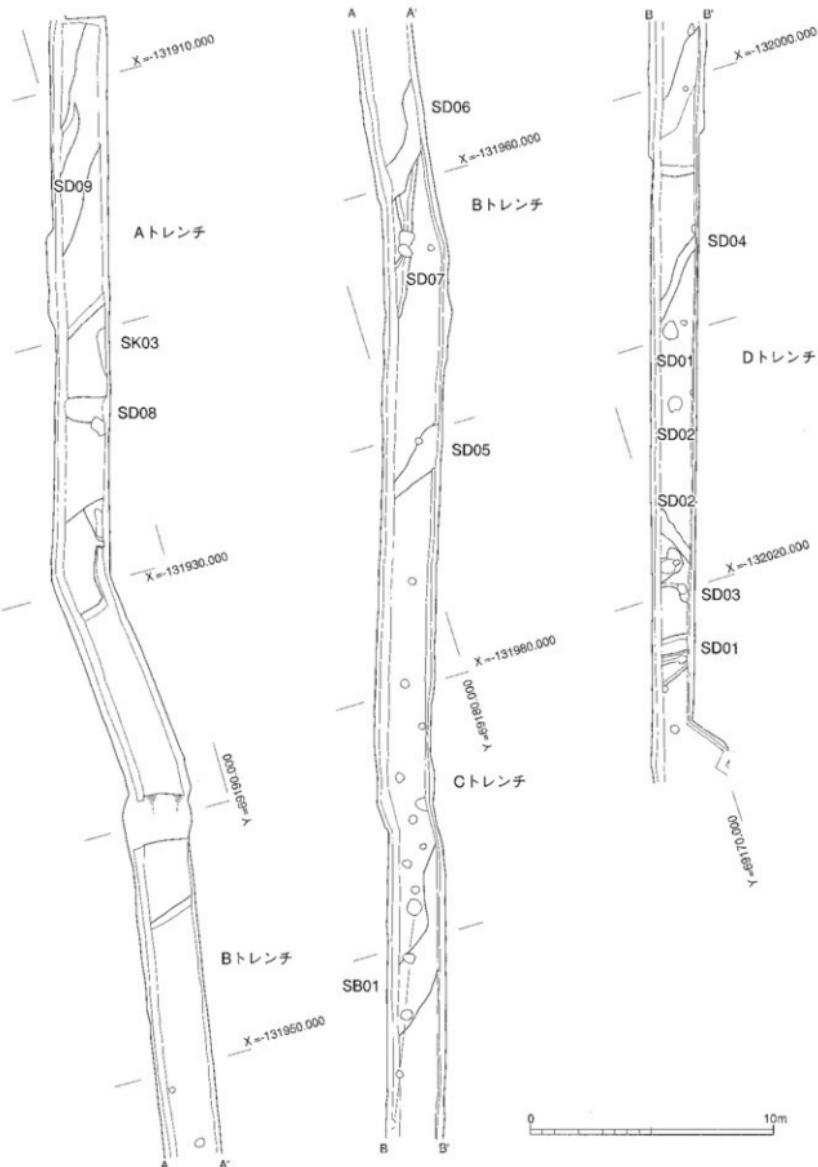
SD05

東西方向の溝で、幅56cm～1.1m、深さは検出面から10cmである。埋土中から八世紀前半の須恵器片97が出土している。

D区

D区では旧耕土下に遺物包含層（暗灰色混礫シルト）が溝区北側で一部が残存していた。溝4条、落ち込み状遺構2ヵ所の他、ピット数基を検出した。

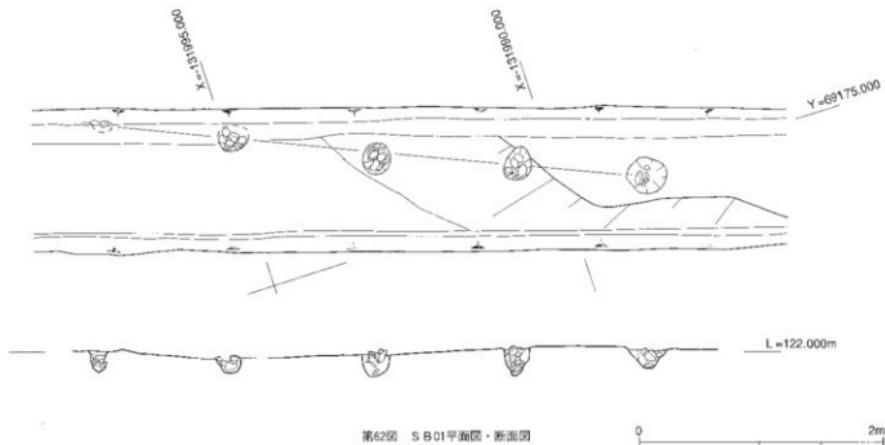
SD01とSD03、04は東西方向の溝で、SD02は南北方向の溝である。共に幅40cm前後



第61図 第4調査区 造積配直図

- で、深さは6~12cmである。S D01とS D03から土師器、須恵器の小片が出土している。S D02、04からは遺物の出土はなかった。
- S D03 東西方向の溝で、北側の一部をS D02に切られている。幅1.2m前後、深さは検出面から6~12cmである。土師器、須恵器の小片が出土しているが、八世紀後半のものと考えられる須恵器の环身98が出土している。
- S X01 直径3.2m、深さ8cmの落ち込み状の土坑で、北側をS D04によって切られている。灰色粘質砂の下に炭層が堆積している。炭は北側で直径70cmの範囲で濃密に広がるが、付近の土壤に焼成による変質、変色等は認められなかった。遺物の出土が無かったため時期、性格については不明である。

他に直径65cm、深さ11cmの落ち込み状の土坑であるSK02を検出したが、遺物の出土



第62図 S B01平面図・断面図

0 2m

ではなく、時期性格については不明である。

(2) 出土遺物

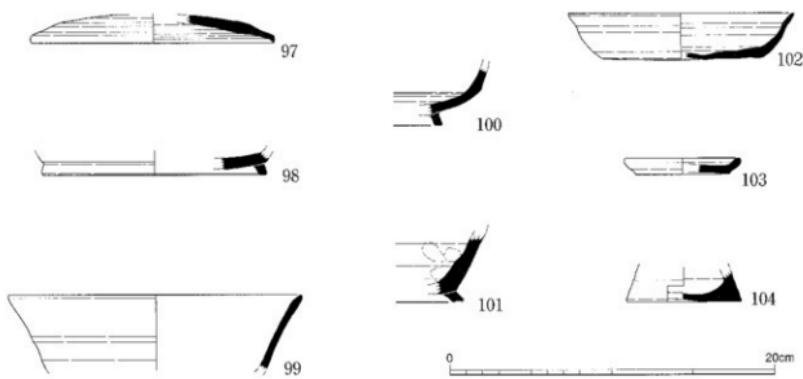
第4調査区から出土した遺物は微細な小片が多く、図示できたものは少数である。

97はS D03から出土した須恵器の环Bの蓋で、頂部を欠損する。外面に回転ヘラケズリを施す。

98はS D05から出土した須恵器の环Bで、底部付近のみが残存している。高台はやや外反し、ややふんばる。

99~101は遺物包含層から出土した須恵器である。

99は环Bで体部上半のみが残存している。復元口径は18.0cmで、体部は外反し、強く立ち上がる。100は体部の中央に稜を持ついわゆる「稜椀」である。体部下半からの残存であるが、兵庫県地福窯出土〔吉田1988〕のものに類似するものと思われる。101は环Bで体部下半のみが残存する。高台は外反しふんばる。体部は強く立ち上がる。99と同様の

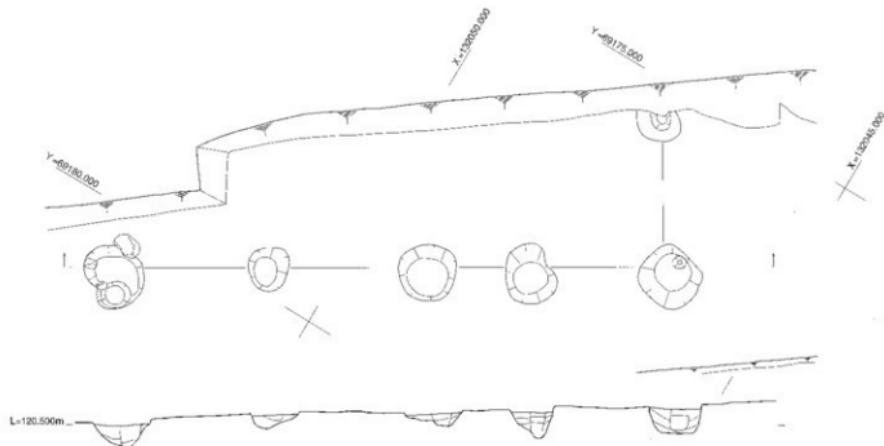


第63図 第4調査区出土遺物実測図

形態であると考えられる。

102~104は旧耕土から出土した土師器である。

102は壺Aで、復元口径は14.0cm、器高2.9cm、復元底径は10.0cmで底部は平たく、体部への屈曲明確である。磨滅が著しく調整痕の観察は困難であるが、内外面とも回転ナデが認められる。底部はハラ切り未調整である。103は小壺で、復元口径は7.0cm、器高1.0cm、復元底径は5.8cm、底部は糸切りで内外面とも回転ナデ調整で口縁部は外方へやつまみ上げている。104は壺の底部と考えられる。内外面共、回転ナデ調整で底部は糸切りであ



第64図 第5調査区S-B01平面図・断面図

る。底部のはば中央に1.0cmの穿孔がなされている。

D. 第5調査区

第5調査区は第20号支線排水路の工事掘削範囲（全長190m、幅2.3m～3.5m）を調査実施した。調査区西部より設計水田毎にA～Gの地区割りを設定して調査を実施した。なお、小地区F～G間は現況の農水路保護のため調査を実施しなかった。

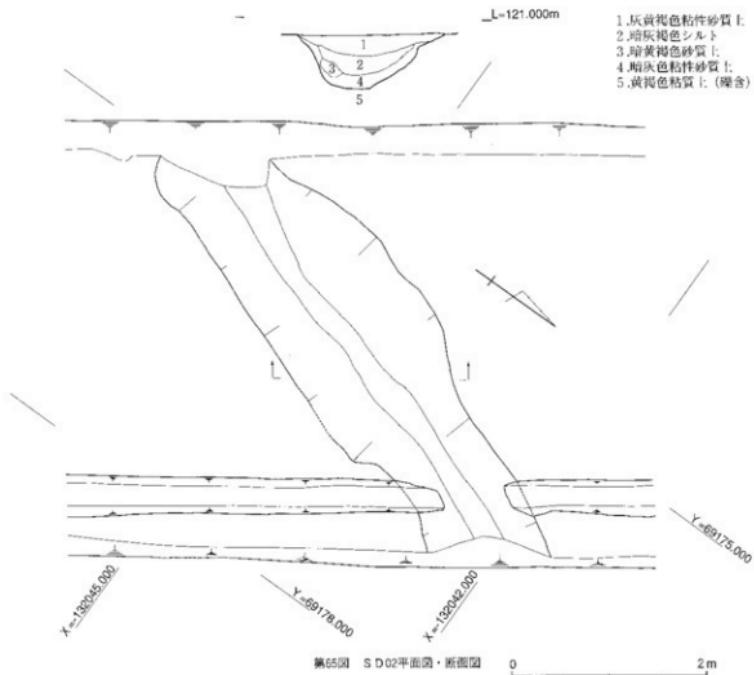
調査区は、河岸段丘の裾部にあるA区から緩やかに傾斜面が続き、旧湯山街道より東のF～Gは後背湿地となっている。調査区の基本層序は、現地表下80cm～60cmまでが現耕作土・床土・旧耕作土で、奈町時代以降の須恵器・土師器・陶器を含み、2～3度の水田造成が繰り返されたと思われる。

(1) 検出遺構

A区

旧耕作土の下に奈良時代遺物包含層暗灰色砂質シルトが調査区の東部と西部で検出された。この遺物包含層直下には淡黄褐色混疊シルトの遺構面となり、掘立柱建物1棟、溝1条、水溜め状遺構と考えられる土坑1ヵ所を検出した。

S B01 A区の南部に位置する東西4間(7.5m)、南北1間(2.1m)以上の東西棟である。建物の南側半ば以上は調査区外となる。建物の棟方向は北40度西を採る。柱間は、桁行で



西から1.9m、1.3m、2.1m、2.1m、梁間で2.1mを計測する。柱掘形は、東・西の隔柱掘形一辺70cm~80cmの方形に掘り下げている。観察できる柱痕跡は直径25cm前後で、掘形の残存する深さは70cmである。柱掘形内からの出土遺物はない。

S D 02 A区の中央で検出した北東から南西に走る断面U字形の素掘り溝である。溝の上端幅1.6m、底幅0.2m~0.3m、深さ0.55mを測り、約5m分検出した。北東・南西側は調査区外にのびる。溝の埋土は概ね3層に分かれ、上層から須恵器蓋112、中層から环身113・114・115が出土した。

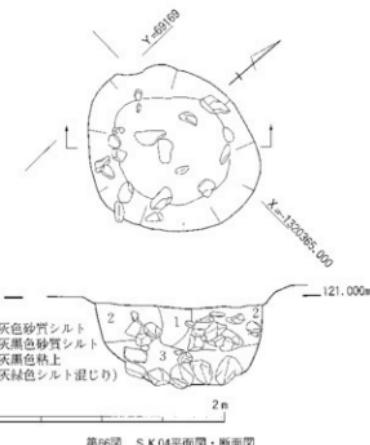
S D 03 A区の中央東よりで検出したやや「く」の字に屈折する浅い溝である。幅0.5m、深さ18cmで断面形はU字形である。溝の埋土内から須恵器・土師器の細片が出土した。

S K 04 A区の東端で検出した土坑である。直径1.4m、深さ70cmのはば円形の掘形で、断面形は舟底状である。埋土は角碟と砂質土を充填して埋められている。埋土内から中世の須恵器塊底部片117が出土している。

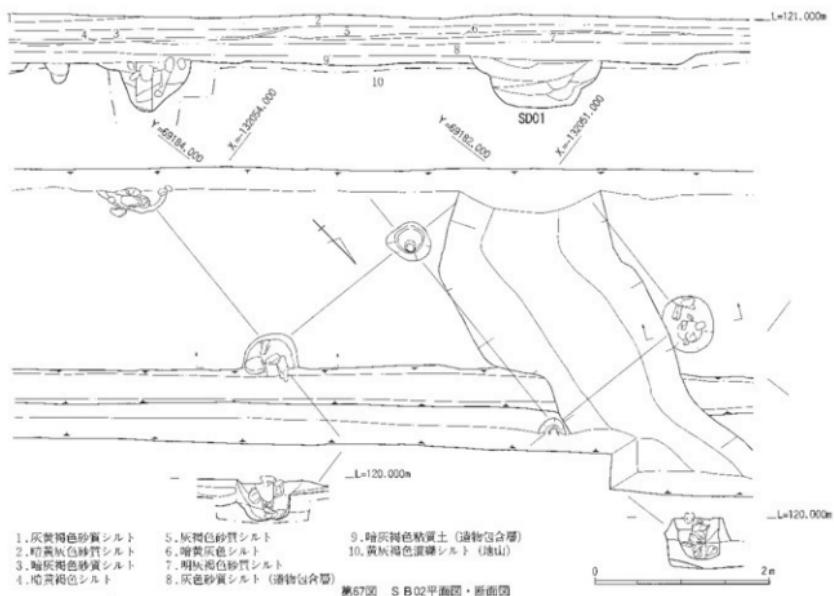
B・C区 B・C区では、旧耕作土直下に遺物包含層である暗灰褐色砂質土が堆積し、この暗灰褐色砂質土上面から掘りこまれた溝1条・土坑1ヶ所等を検出した。また、B区の中央部では暗灰褐色砂質土の下層に暗紫灰色粘質土（遺物包含層）の堆積がみられる。この遺物包含層の直下黄灰褐色泥隕シルト上面から掘りこまれた柱掘形も検出されている。従ってB区では2面乃至は3面の遺構面が存在すると考えられるが、調査では黄灰褐色混疊シルト上面で全ての遺構を検出した。検出した遺構は掘立柱建物2棟、溝1条、土坑3ヶ所とピット多数である。

S B 02 B区西端で検出した東西2間(4.2m)以上、南北2間(5.6m)以上の南北棟の掘立柱建物である。建物の棟方向は北12度東を探る。柱間は桁行(南北方向)2.8m等間、梁間(東西方向)2.1m等間を計測する。柱掘形は径70cm前後、深さ50cm~60cmの円形掘形を掘り、第1回目の建築を行った後、柱を抜き取り、碟を充填して柱基礎とし、再度建築している。S D 01との前後関係は、S B 02が廃絶した後 S D 01が掘られていることが、トレーニング壁土層断面の観察から判明している。

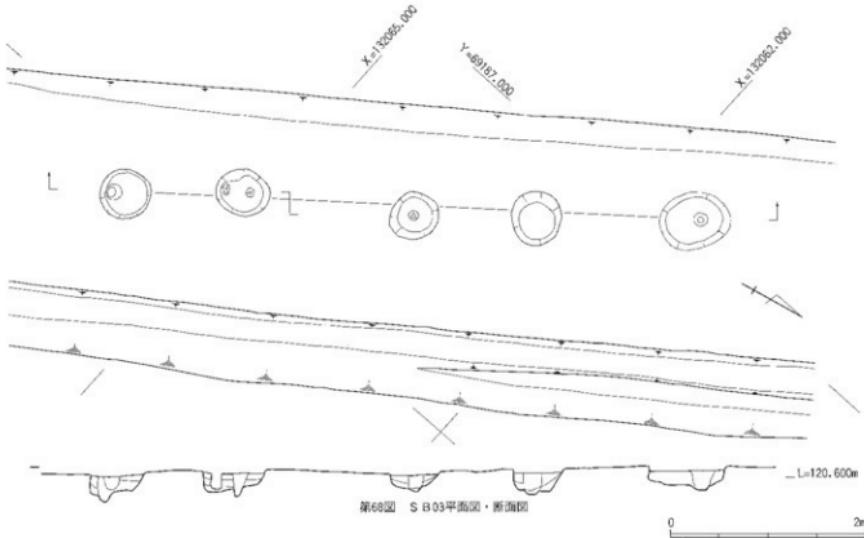
S B 03 B区東端で検出した東西方向に並ぶ柱列4間分である。東西4間(6.1m)で、梁と考えられる南北方向の規模および展開方向は調査区が限定されているため不明である。建物の棟方向は北40度西を探る。柱間は西から1.7m、1.3m、1.7m、1.3mを計測する。柱掘形は径70cm~80cm、深さ20cm~30cmの円形、径20cm前後の柱痕跡を残す。



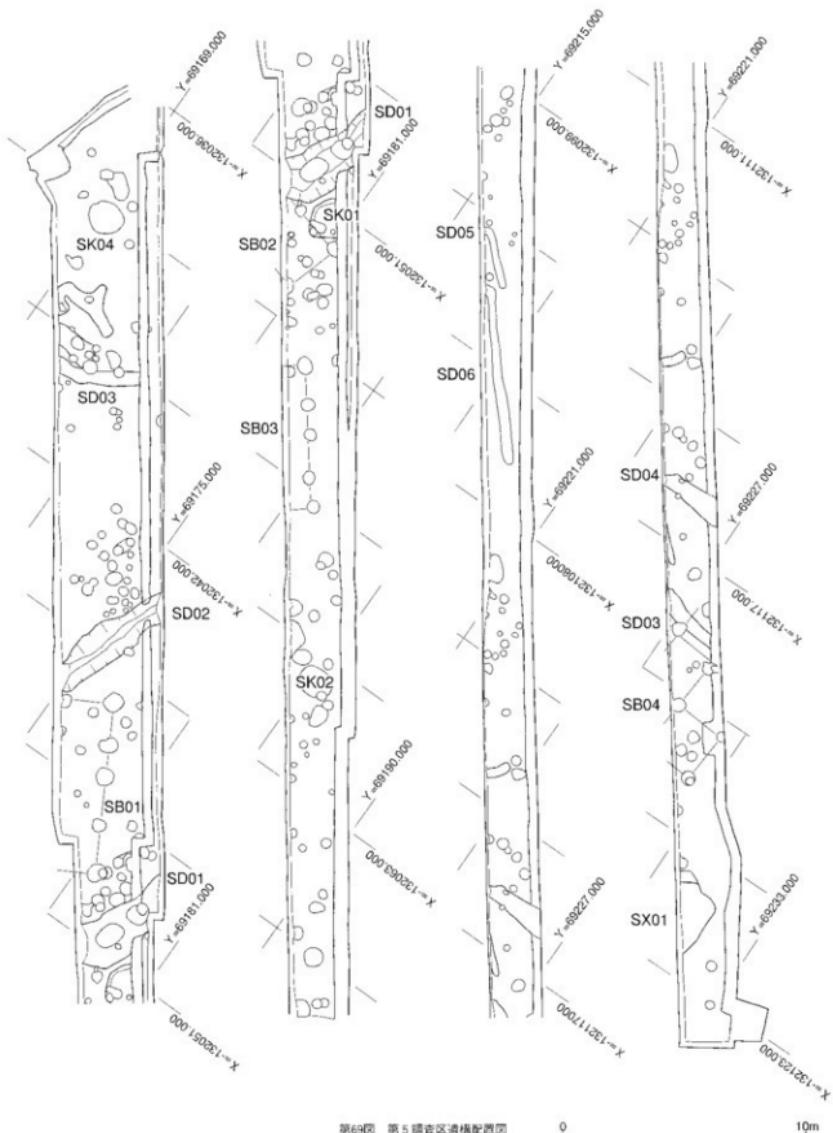
第66図 SK 04平面図・断面図



第67図 S B 02平面図・断面図

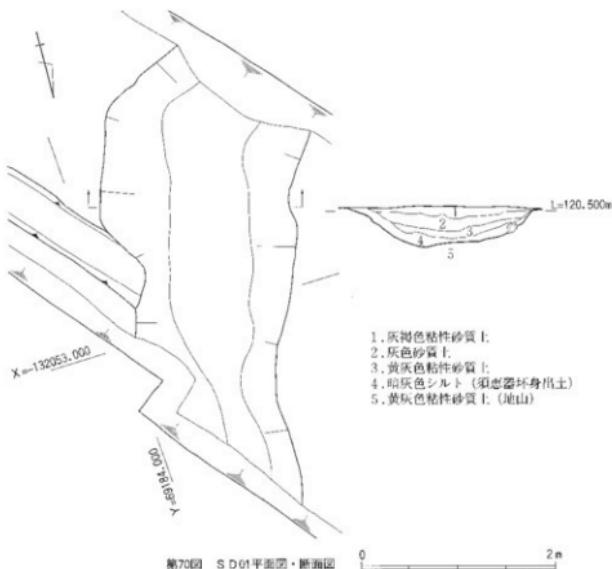


第68図 S B 03平面図・断面図



第69图 第5調查区過横配置図

0 10m



SD01 B区の西端で検出した北から南に走る断面U字形の素掘り溝である。溝の上端幅1.6m～2.0m、底幅0.4m～0.8m、深さ0.5mを測り、約4m分検出した。北・南側は調査区外にのびる。溝の埋土は概ね4層に分かれ、上層からは並4・溝の東肩に接する中層部で須恵器壊105・106・107、鉢109、土師器瓶110・111などが出土した。なお、SD01は掘立柱建物SB02が建てられた基盤層の上層より掘りこまれており、SB02廃絶後の溝である。

SK01 SD01の南側、調査区東壁に接して検出した橢円形の土坑である。長径1.1m以上、短径1.7m、深さ5cm前後を計測する。埋土は茶褐色砂質土で、埋土内から須恵器片・土師器片が出土している。

SK02 B区南部で検出した橢円形の土坑である。南東部で柱掘形Pit42にきられる。長径1.45m、短径1.1m、深さ15cm前後を測る。埋土は茶褐色砂質土で、埋土内から須恵器片・土師器片が出土している。

SK02 B区南部の調査区東壁に接して検出した不定形の土坑である。南北軸1.5m、東西軸0.7m以上、深さ20cm前後を計測する。断面形は皿状である。埋土は、暗灰褐色砂質シルト・暗褐灰色シルトがレンズ状に堆積していた。埋土内からは土師器片が出土している。

D・E区 D区では、旧耕作土の下に褐灰色シルトの遺物包含層が厚く堆積し、その直下の灰色粘質土上面で溝2条、柱掘形数ヶ所を検出した。E区では、北部で旧耕作土の下に灰褐色砂質シルトの遺物包含層が堆積し、南部では灰褐色砂質シルトの下層に遺物を包含する暗灰色粘質土が堆積している。遺構検出面はこれらの遺物包含層下の茶灰色粘質土上面で、掘

立柱建物 1 棟、溝 2 条、性格不明土坑 1 ケ所を検出した。

S B04 E 区中央部東よりで検出した東西 2 間 (4.2m) 以上、南北 3 間 (5.8m) 以上の南北棟の掘立柱建物である。建物の棟方向は北12度東を探る。柱間は南側平行 (南北方向) 2.1 m 等間、北側で 1.5m、梁間 (東西方向) 2.1m 等間を計測する。柱掘形は径 60cm 前後、深さ 30cm~40cm の円形掘形で、一部の柱掘形内からは土師器壺片が出土した。建物北西部で S D03 を切っている。

S D03 S B04 の柱掘形に重複する素掘りの東西溝である。幅 0.5m 前後、深さ 10cm 前後を計測する。断面形は皿状である。埋土内から土師器壺が出土した。

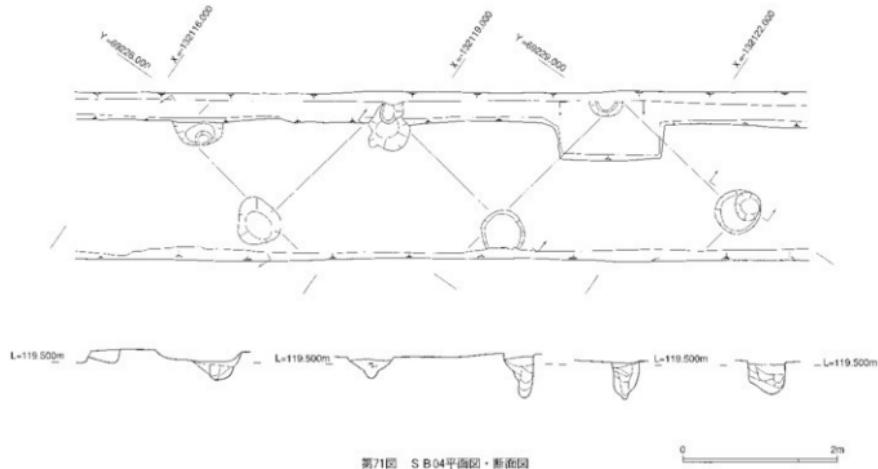
S D04 E 区中央部西よりで検出した東西溝である。幅 0.7m 前後、深さ 30cm 前後を計測する。断面形は U 字形である。埋土内からの出土遺物はない。

S D05 D 区中央で検出した東西溝である。東側で削平のため途切れ、西側はトレンチ西壁際でやや屈折し、南側調査区外にのびる。幅 0.3m~0.5m、深さは 10cm 前後で浅く、断面形は U 字形である。西壁際の屈折部で須恵器壺 A116 が出土した。

S D06 S D05 の西側には平行して走る溝である。幅 0.3m 前後、深さ 5cm 前後、断面形は U 字形である。出土遺物はなかった。

S X01 E 区東部西壁際で検出した不定形の土坑である。南北 2.3m 以上、東西 2.0m 以上、深さ 20cm を計測する。断面形は逆台形をしている。埋土内からは弥生土器と考えられる土器細片を検出した。

F 区 旧「湯山」街道の西に設定したトレーンチである。現地表下 60cm までは旧耕作土が堆積し、北部では旧耕作土の下に暗灰色粘質土、南部では灰褐色シルト (縲合み) の遺物包含層が堆積しているが、いずれも少量の遺物細片を含む程度である。遺物包含層直下の淡茶褐色



第21図 S B04平面図・断面図

粘質土上面の一部では河原石が散乱していた。この淡茶褐色粘質土から掘りこまれて溝1条、土坑1基、ピット8ヶ所を検出した。

S D07 F区南部で検出した浅い東西溝である。幅1.2m、深さ20cm前後を測る。断面形はU字形である。出土遺物はない。

S K05 F区中央部で検出した不定形の落ち込みで、落ち込みの南東部は削平されている。

G区 県道三木・三田線の西側、調査時点では工事用道路として用いられていたため現耕作土から0.8m~1.5mまで埋め上げされていた。また、トレーンチ中央に工事排水用ヒューム管が横断していたため調査できなかった。調査区全域の旧耕作土直下に暗灰色粘質土の遺物包含層が堆積し、その直下の淡灰色シルト層上面が遺構面となっている。この遺構面で溝1条とピット3ヶ所を検出した。

調査区中央北よりで検出東西溝である。幅0.8m、深さ12cmを計測する。断面形はU字形である。溝の埋土は、角砾を含む暗灰色シルトで、埋土内から須恵器片が出土した。

(2)出土遺物

調査区全域に堆積する旧耕作土（灰色シルト層）内から奈良時代～中世の土器が出土したが、残存状態が良好な資料は、A・B・C区の一部で残存する遺物包含層とS D01・S D02埋土内出土の遺物である。

S D01 大部分が埋土の中層（暗灰色シルト）から出土している。

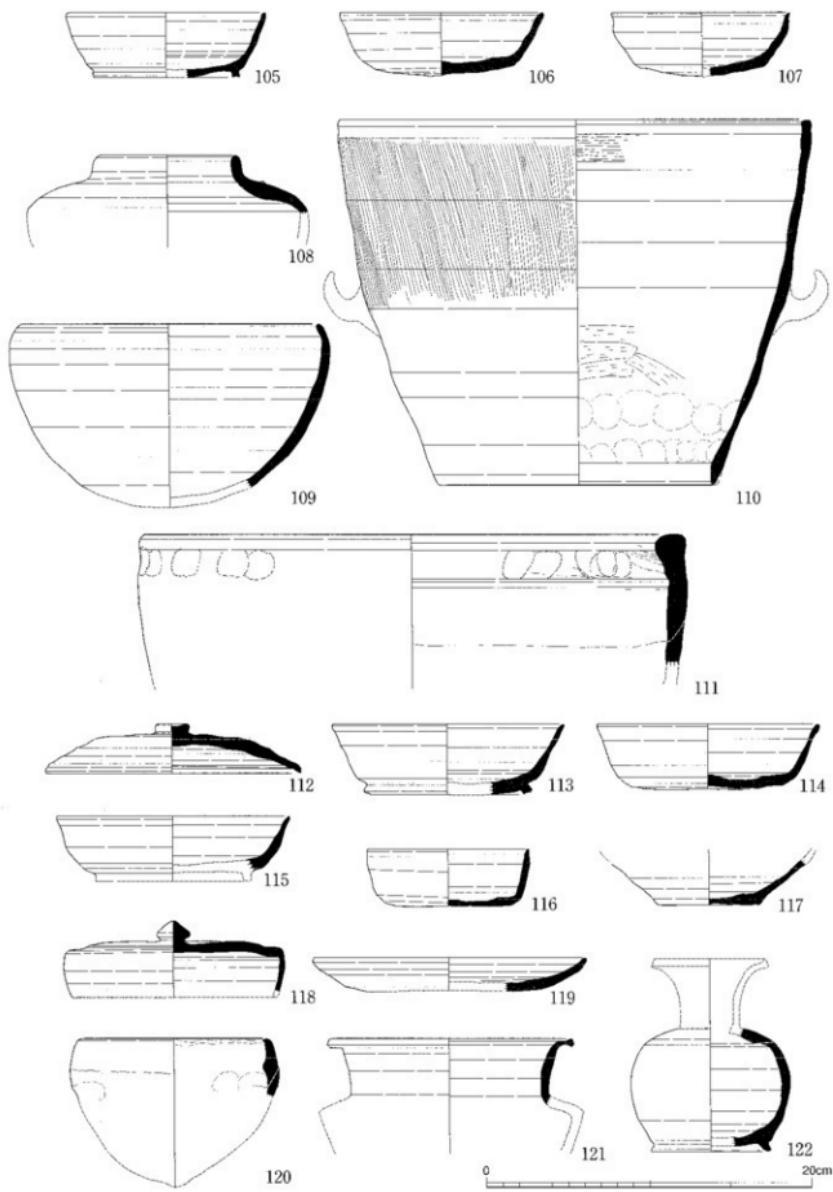
壺B105は、法量口径12.2cm、器高4.0cmで壺B IVにあたる。直線的に伸びる体部に、やや内弯する口縁部をつける。口縁部は内面を強く回転ナデして口縁内面を肥厚させる。高台は体・底部の境のやや内側にはば垂直に貼り付ける。

壺G106・107は法量口径11.0cm~12.4cm、器高3.9cmの小型品である。壺G106は、直線的にのびる体部に内面を引き出し気味に丸くおさめる口縁部をつける。底部はヘラキリして調整せず、体・底部の境を回転ヘラ削りして区別する。壺G107は、やや内弯する体部に強くナデで外にひきだし外反する口縁部をつける。底部は3と異なり、仕上げた後にヘラキリ痕跡を丁寧にナデで仕上げる。

鉢A109はいわゆる鉄鉢形の器形で、体部から口縁部にかけて丁寧にヘラミガキを行い、口縁部は強くナデで内反させる。底部内面は仕上げナデを行う。

壺A108は、埋土上層から出土している。いわゆる壺蓋形の器形で、やや斜め内側に短くのびる口頭部は部厚く、口縁部はやや内側に面をつくる丸くおさめる。肩部はやや丸く、体部との境はやや低い。肩部の頭部よりに蓋をかぶせて焼成したことを見わせる誘導痕がみられ、遺物包含層出土の壺蓋118とセットになると推定される。

瓶110・111は、渋南部の埋土中層で検出した土師器の瓶である。瓶110は薄手のやや内弯する体部を外面タテハケ調整し、口縁部はやや内傾する。口縁部内面は横ハケ調整を行う。体部下半は指頭王押圧と横方向のヘラ削り、体部下端はナデで断面を鋭角三角形状に仕上げる。瓶111は、破片が多数出土しているが、図示できるのは口縁部の一部である。厚手のはば垂直に立ち上る体部に強くナデでやや内傾させ肥厚する口縁端部をつくる。口縁部の内外面は、指頭押圧によって調整する。下部の内外面は粘土積み上げ痕跡が明瞭であるが、調整は不明である。



第72圖 第5調查區出土遺物

S D02 壺B113は法量口径14.2cm、器高4.4cmで中型品壺BⅢに相当する。直線的にのびる体部にやや外半する口縁部をつける。底部はヘラケズリして、高台は外方にふんばり、内側に接地面がある。

壺115は法量口径14.4cm、器高4.0cmで、内湾気味に立ち上がるに外反する口縁部をつくる。高台を欠くが、やや内側に高台を貼り付けると考えられる。形状から壺Lの可能性がある。

壺A114は法量口径13.6cm、器高4.0cmで中型品壺AⅢに相当する。直線的にのびる体部に、やや外反して肥厚する口縁部をつける。底部はヘラキリのまま調整せず、底・体部の境をヘラケズリして仕上げる。

蓋112は頂部上面をヘラケズリして、口縁部は屈曲させず端面をつくって仕上げている。つまみは偏平で中央がやや瘤む。頂部内面は不定方向に手ナデして仕上げている。

S D05 壺A116は法量口径9.8cm、器高3.5cmで壺A Vに相当する。垂直気味に立ち上がる体部にやや内面が内傾する口縁端部をつける。底部はヘラキリの後丁寧な不定方向なナデで仕上げる。

S K04 梗117は直線的に立ち上がる体部に、やや中瘤みの底部をつくる。底部は糸引きである。内面はナデ調整見込みの段はつくらない。

包含層 壺蓋118はヘラケズリした平坦な頂部に、やや内傾する口縁部をつける。口縁部と頂部の屈曲部は外面とも回転ナデによって丁寧に仕上げられる。口縁部と頂部との屈曲部は丁寧な回転ナデ仕上げを行い、頂部との境は明瞭な段で画する。外面全体に自然釉の付着がみられる。口縁端部は欠くが、S D02上層出土壺A108とセットになると考えられる。遺物包含層出土の壺蓋は他に1点ある。

皿119は法量口径8.4cm、器高2.4cmで偏平な体部にやや内弯する口縁部をもつ。外面はヘラミガキによって仕上げ、内面は不定方向のナデで仕上げている。同器形の皿は、遺物包含層から他に1点出土している。

壺H121は口頸部のみを残存させている。直立する頸部に水平に外反する口縁部をつく

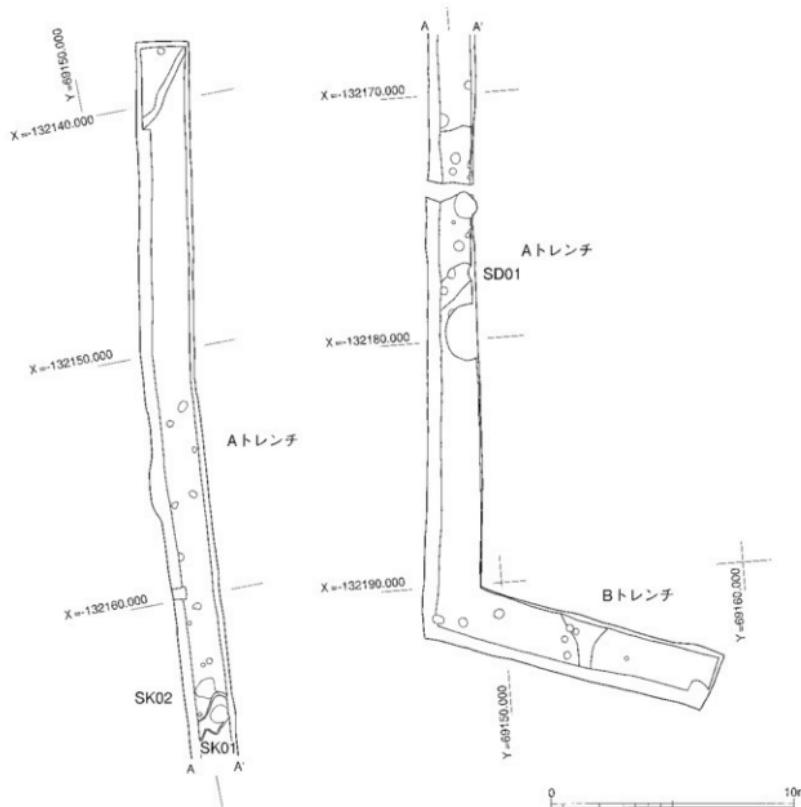


写真6 S K04土質画面（東より）

る。口縁端部は、端部を内側上方につまみ上げて端面をつくる。内外面とも自然釉が付着していて、調整は不明。固化復元から、肩部の狭い痕跡とした。

壺M122は壺の体部のみを残存させている。平底の底部に丸い体部をつくり、外にふんばる低い高台を付ける。外面は全体に自然釉が付着していて、調整は不明。内面は肩部と体部の接合部に段状に凹線がまわる。体部内面は細かい毛刷毛で仕上げる。

製塙土器120は砲弾形の体部にやや内弯する口縁部をつける。口縁端部は内側につまみだして粗くナデで仕上げる。全体に厚手に作り、指頭押圧による調整を行う。粘土接合痕跡が明瞭である。



第73図 第6調査区遺跡配置図

E. 第6調査区

全長65.5m、幅2mの排水路部分の調査である。屈曲部から北側をA区、東側をB区と設定して、遺物の取り上げをおこなった。

調査区は河岸段丘の裾部に位置し、段丘の方向と並行している。全体的には調査区の北側に存在すると推定される河岸段丘に直交する方向に派生する谷に向かってA・B両区の交点を最高として、それぞれの調査区の方向へ緩やかに下っている。

基本層序は、床土面から30cm~70cmまでは、現耕作上および旧耕作上、床土で奈良時代以降の須恵器・土師器・陶器を含み、数度にわたる水田造成がくりかえされたと考えられる。この下層が奈良時代~中世の遺物包含層である灰褐色混疊シルト層である。A区ではさらにその下層に奈良~平安時代の遺物包含層である灰色混疊シルト層、暗灰色シルト層が存在し、この下層が造構面を構成する灰色混疊シルト層、及び黄灰色シルト層である。

(1) 検出遺構

A区

溝1条、落ち込み状造構2ヵ所、ピット40基余を検出した。

S D01は東西方向の溝で、幅80cm前後、深さ10cmである。遺物の出土はなかった。

S K01、02は落ち込み状の土坑で、S K01は直径3.2m、深さ8cm、S K02は直径65cm、深さ11cmで南側はSK01によって切られている。遺物の出土はなかった。ピットについては建物等を構成するものを確認することはできなかったが、P007から8世紀後半のものと考えられる須恵器蓋123が出土している。P032から柱材が出土している。

B区

ピット11基を検出したが、建物等を構成するものを確認することはできなかった。

(2) 出土遺物

第6調査区から出土した遺物は微細な小片が多く、図化できたものはわずかであった。

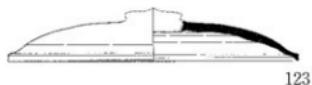
123はP007から出土した須恵器の蓋で、上部を欠損しているが、蓋BIIに相当すると考えられる。復元口径は18.0cm、現存高2.4cmである。口縁部はやや外反し、端部外面の上部はケズリにより面がつくられており、端部外面は窪みをもつ。

124~127はA区の奈良~平安時代の遺物包含層からの出土遺物である。

124は須恵器の坏Bで、復元口径は12.8cm、器高3.7cm、復元底径9.5cmである。体部は強く屈曲してやや外反しながら直線的に立ち上がる。高台はやや外反し、ふんばる。125は須恵器の小皿で、上層からの混入品と考えられる。復元口径8.0cm、器高1.3cm、復元底径4.6cmで、底部は糸切りである。126は須恵器の椀で、復元口径19.0cm、器高6.5cm、復元底径10.0cmである。体部はやや丸みをもって外反する。底部からの立ち上がりは明瞭である。高台は僅かに外反する。127は須恵器の坏Bで底部付近のみの残存である。体部はやや丸みを持って立ち上がるものと思われる。高台はやや外反する。

129~131、133~135はA区の奈良時代~中世の遺物包含層からの出土遺物である。

129は須恵器の椀で、復元口径は15.0cm、体部にやや丸みをもつ。130、131は壺Lの底部で復元底径は130が7.4cm、131が7.7cmである。共に高台は外反してふんばる。131の底部には沈線が133は坏Bの底部で、高台は余り外反しない。134は観と考えられる。貼付けの脚を持ち、上面に海となる部分と考えられる摩擦痕をもつ半坦面がある。小破片のため、全体像の復元は困難である。現存高は2.3cmである。135は土師器の壺で、復元口径は30.1



123



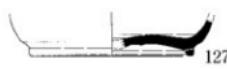
124



125



126



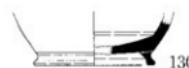
127



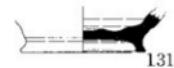
128



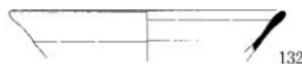
129



130



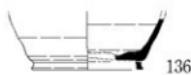
131



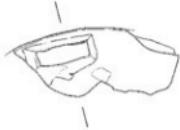
132



133



136



134



137



135



138



140



139



142



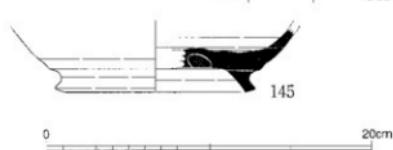
143



141



144



145

0 20cm

第74図 第6調査区出土遺物

cmである。内面は口縁内部にヨコハケ、体部がナナメハケの調整を施す。外縁は口縁部外側にヘラミガキにより調整を行なっている。

132、136～140はA区の旧耕土からの出土遺物である。

132は須恵器の塊で、復元口径は16.8cm、体部はやや直線的に立ち上がり、口縁端部は丸くつまみ上げている。136は須恵器の壺の底部で、復元底径は6.8cm、高台は外反し、ふんばる。137は青磁の碗の底部である。高台はやや外反する。外縁に2条の沈線を持つ。138は碗の底部と思われる。高台やや外反してふんばる。139は皿の底部と思われる。復元底径は13.4cmで、高台は外反して内傾し、140は須恵器の壺の口縁部で、復元口径は28.4cmである。

128、141～145はB区の遺物包含層からの出土遺物である。

128は土師器の壺の底部で底部は糸切りである。141は須恵器の壺Aで、復元口径14.8cm、器高2.9cm、復元底径11.8cm、底部はヘラ切り未調整である。142は須恵器の小皿で復元口径は8.6cm、器高1.3cm、復元底部は5.8cm、底部は糸切りで、底部から体部への屈曲部に強いナデを施している。143は須恵器の盤である。体部中央やや上に波状文を施す。144は須恵器の塊で、復元口径は16.8cm、口縁端部つまんで外方へ引き出している。145は須恵器の壺Lの底部で復元底径は12.4cm、高台は外反し、接地面は少ないのである。

F. 第7調査区

第7調査区は、第26号支線排水路部分の工事掘削範囲（全長100m、幅2.5m）を、調査区はL字形に屈曲するため南北トレンチをA区、東西トレンチをB区と地区割りを設定し、調査を行なった。

調査区は、A区では河岸段丘の裾部に平行し、B区との境界から淡河川に向かい緩斜面を形成している。調査区の基本層序は、現地表面から0.9mまでは現代耕作土・床上・旧耕作土で、中世～現代の陶器・土器等が出土している。旧耕作土の直下に遺構面を検出している。

(1) 検出遺構

A区

旧耕作土直下に淡灰褐色粘質土の地山面を検出し、それが遺構面となる。北半部は湿地状に地形が落ち込んでいるが中央から北半部に溝2条、直径0.2～0.3m、深さ0.1mのビットを8基検出した。ビットは建物としてまとまらない。

S D02

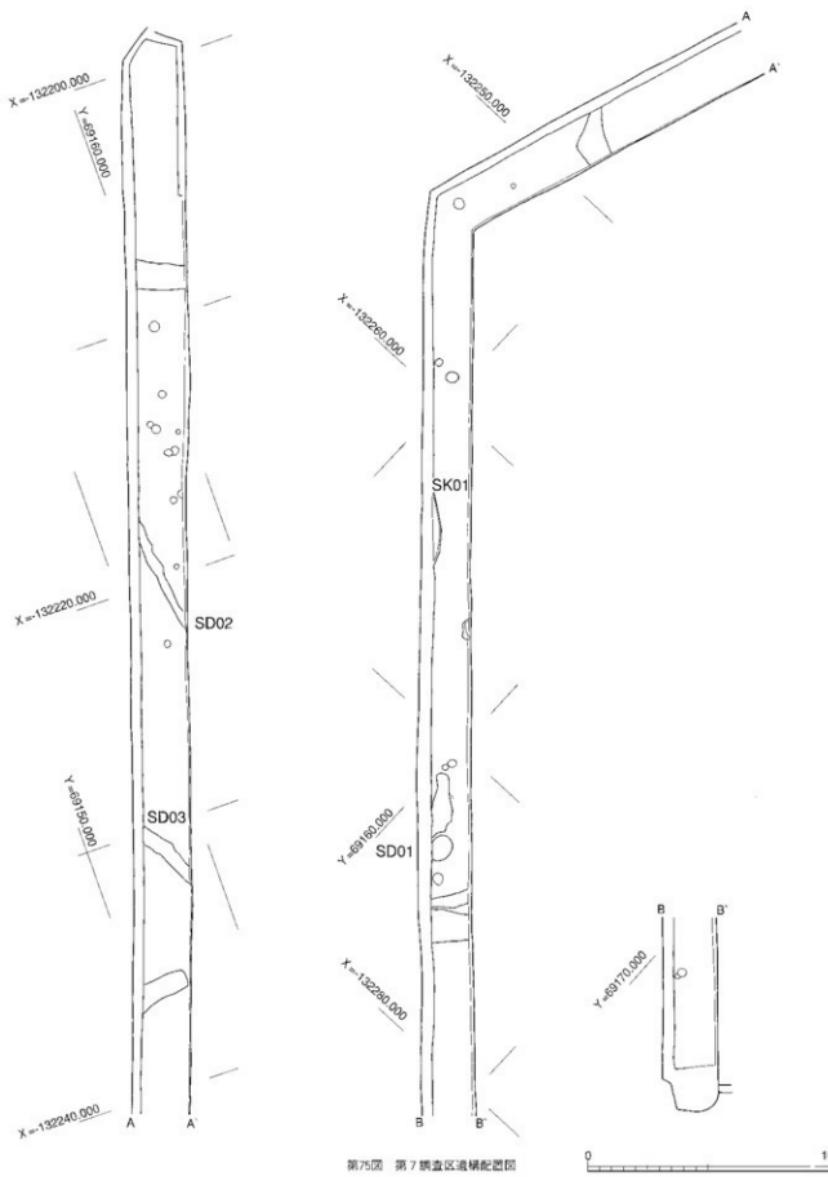
中央部で検出された北から南に走る断面U字形の素掘りの溝である。幅0.3m前後、深さ0.2mを測り、4m分を検出している。埋土からは土師器片が出土している。

S D03

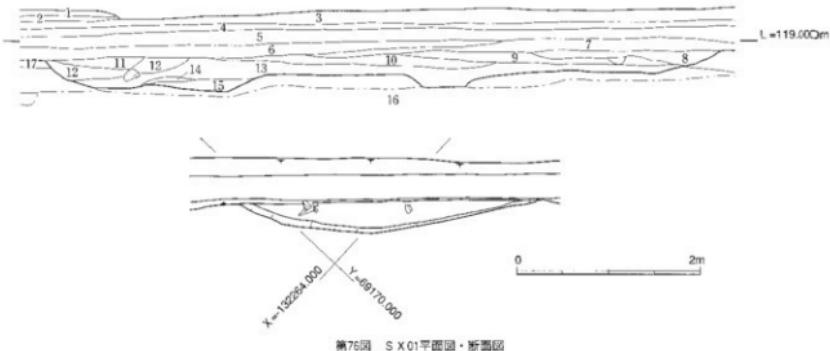
南半部で検出された北西から南東に走る断面U字形の素掘りの溝である。幅0.3～0.45m、深さ0.2mを測り、2.4m分を検出している。埋土は大きく2層に分かれる。遺物は出土しなかった。

B区

旧耕作土直下に北西部では暗茶黄色シルト、南西部では淡灰褐色砂質シルトの地山面を検出し、遺構面を形成している。南西部は土質的に安定しないため、遺構がみられない。溝1条、不明遺構1基、直径0.2～0.3m、深さ0.1mのビットを9基検出した。ビットは建物としてまとまらない。



第75図 第7調査区道路配図



第76図 S X01平面図・断面図

- | | | | |
|--------------|--------------|-------------|---------------|
| 1.淡灰白色砂 | 6.灰色シルト | 11.淡灰色砂質シルト | 16.黄灰褐色シルト |
| 2.淡黄灰色砂 | 7.淡灰色シルト質粘土 | 12.黑色シルト | 17.淡灰色シルト(発育) |
| 3.灰茶色細砂 | 8.暗灰黄色砂質シルト | 13.灰色砂砾 | |
| 4.茶灰色粗砂 | 9.淡灰褐色砂質シルト | 14.黄色シルト | |
| 5.淡灰茶色シルト質粘土 | 10.灰褐色シルト質粘土 | 15.灰茶色砂砾 | |

S D04 中央部で検出された北西から南東に走る断面U字形の素掘りの溝である。幅0.6~0.8m、深さ0.2mを測り、2.5m分を検出している。南東端では南方向に屈曲する。埋土は大きく2層に分かれ。埋土の上層からは木片が出土したのみであった。

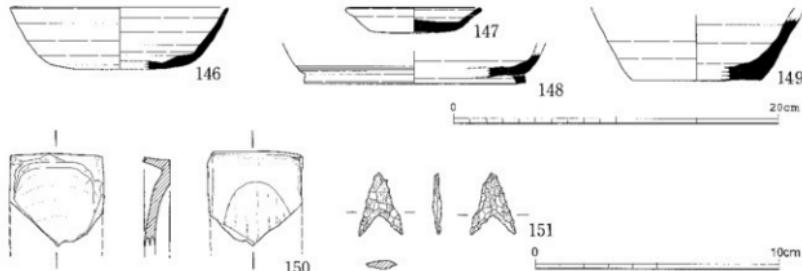
S X01 中央部で検出した性格不明の落ち込みで、最大長7m、深さ0.3~0.4mを測る。埋土は大きく2層に分かれ、上層からは奈良時代の須恵器坏身146が出土している。

(2)出土遺物

坏A II 146はB区のS X01から出土した。法量は口径13.2cm、器高3.85cmで底部を除き、回転ナデを行う。底部内面は立ち上がり部に強いナデを施し、境界を形成している。底部外側は未調整のままである。

小皿147はB区の遺物包含層から出土したJタイプの小皿である。法量は口径8cm、器高2.55cmで、口縁部は外方につまみ上げるように立ち上がる。内外面とも磨滅が激しく調整は明瞭ではない。

坏B 148はB区の道構面上層から出土した高台部である。脚部はあまり外方に開かない。



第77図 第7調査区出土遺物

内面に接地面をもつが、あまり明瞭ではない。高台接合面付近で回転ヘラケズリを施し、内面はナデにより仕上げている。

壺149はA区の遺構面上層から出土した底部である。平らな底部から若干外方に開き気味に立ち上がる。体部と底部の境界はシャープである。内外面ともナデにより調整を行う。

陶硯150はB区の遺構面上層から出土した長方形の硯である。池から墨堂の一部まで残存し、短辺は3.75cm、最大高3.8cm、最大厚1.1cmである。縁内壁面はヘラケズリを施し、外面は磨き上げられる。また縁上面には形状に沿うように、幅1mm程度の線刻が入る。裏は未調整で墨堂を作り出すために大きなユビナデを行っている。

石硯151はB区の遺構面上層から出土した無蓋式のサヌカイト製石硯である。法量は最大長2.5cm、最大幅1.85cm、最大厚3.5cmである。両面ともに左側辺に一定方向に縦部調整を施している。

G. 第8調査区

第8調査区は、現況の道路や水路により4つの地区に分かれている。このうち、北端の調査区は現況の2枚の田圃にまたがっており、この田圃の区画により調査区名を2つに分けている。南端の調査区から順に第8調査区-1、2、3、4、5と呼称する。以下、地区ごとに記述する。

(1) 検出遺構

第8調査区-1 幅約2m、長さ約43mの調査区で、遺構・造物ともに密度が粗い。現耕土・現床土・旧耕土（数枚）の下層で検出した淡灰色疊混じりシルト層上面（現耕土上面からの深さ0.2~0.6m）で小ピットを6基ほど確認した。南半部は遺構は全く検出されなかった。

第8調査区-2 幅約2m、長さ約25mの調査区で、1区同様遺構の密度は粗い。現耕土・灰色粘質砂の下層で検出した黄灰色シルト層上面が遺構面となっており、北端部でピットを2基検出した。

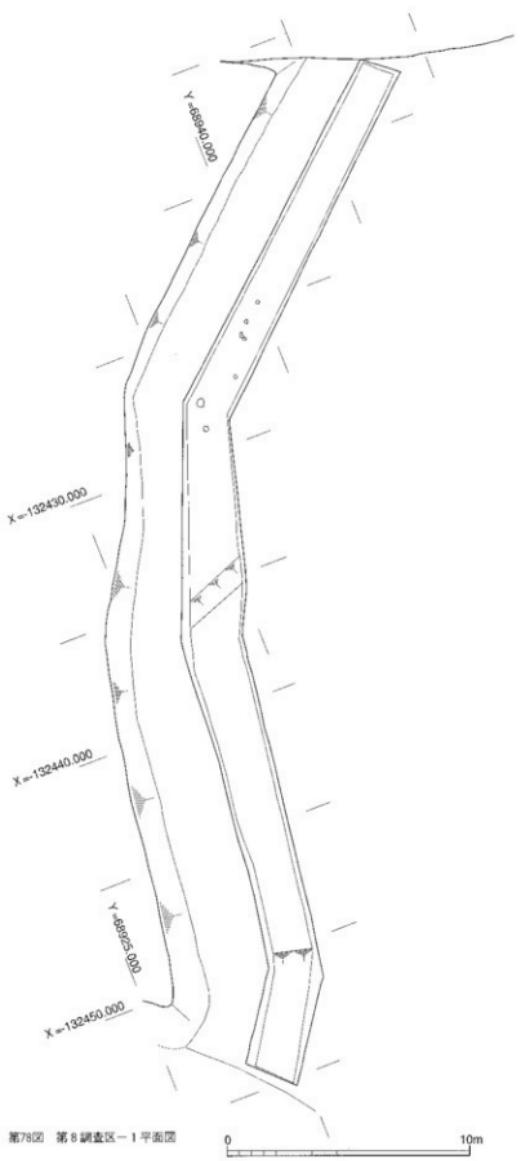
径15×23cm、深さ14cmを測り、柱材の根元付近が遺存していた。

径15×16cm、深さ13cmを測る。

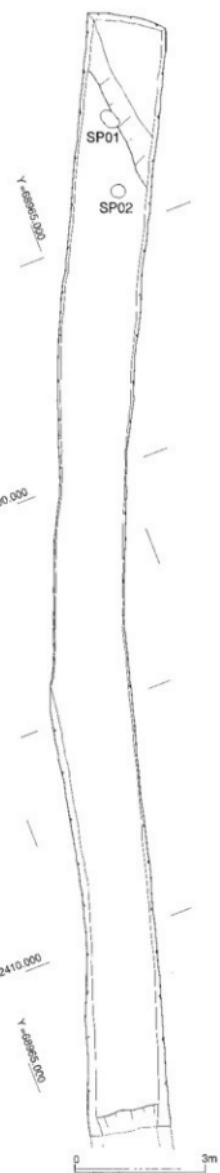
S P01・02とともに上器が出土していないため、明確な時期については不明である。両者は心々間で1.7mの距離にあり、同一の建物を形成する可能性もあるが、2基以外にピットを検出していないため断定できない。

第8調査区-3 幅約2m、長さ約28mの調査区で、南半部において、現耕土・盛土（厚さ25~45cm）の下層で不定形の土坑群を検出した（SK01~10）。これらの土坑群は、切り合い関係が顕著で、底面が平坦ではないものがあること、また掘削後に人為的に埋め戻した状況が想定されることなどから、粘土採掘坑と考えられる。内部から中世の須恵器・土師器や近世末頃の土器・瓦などが出土している。深さは20~70cmを測る。

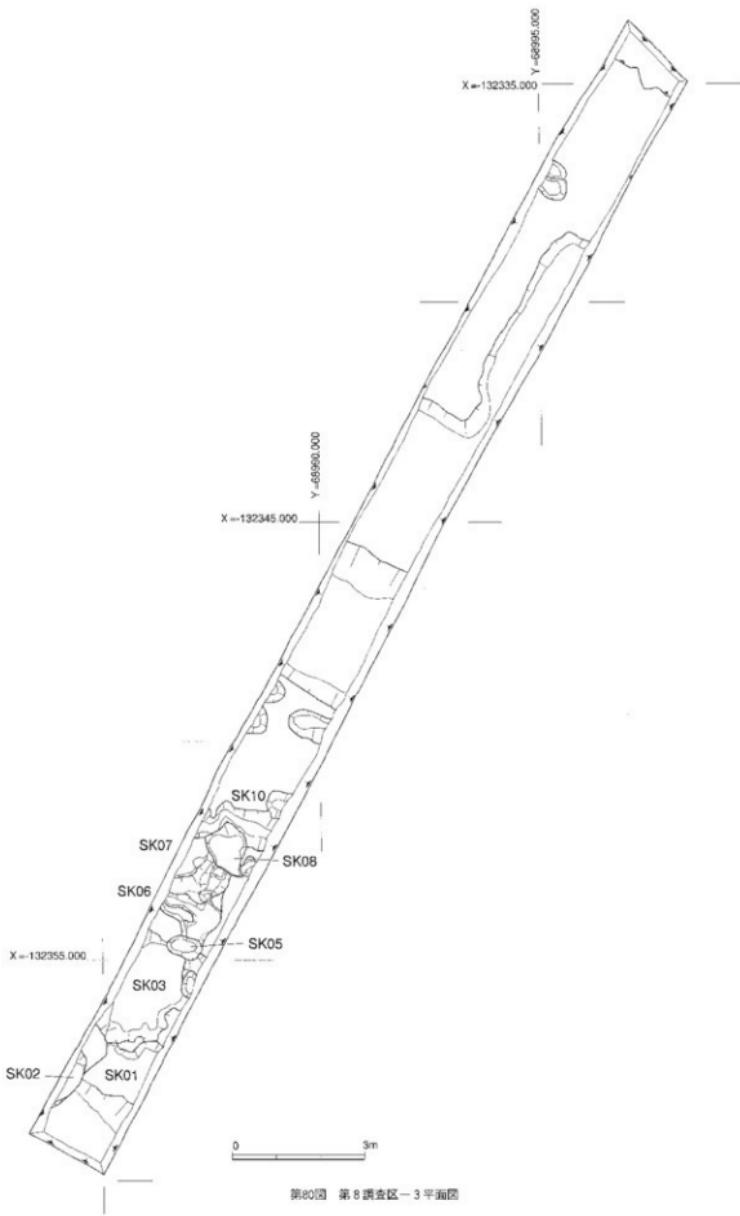
第8調査区
- 4 · 5 幅約2m、長さ約96mの調査区で、現況では2枚の田圃であるが、1本の直線的な調査区のため、ここでは一括して記述する。基本層序は、上層より、現耕土・盛土・黄灰色シルト質細砂（旧床土）・暗灰色シルト混じり細砂（旧耕土）・灰（黄）色シルト混じり細砂（旧耕土）・灰色細砂混じりシルト・灰色シルト（包含層）・暗灰色シルト（包含層）・淡



第78図 第8調査区-1平面図



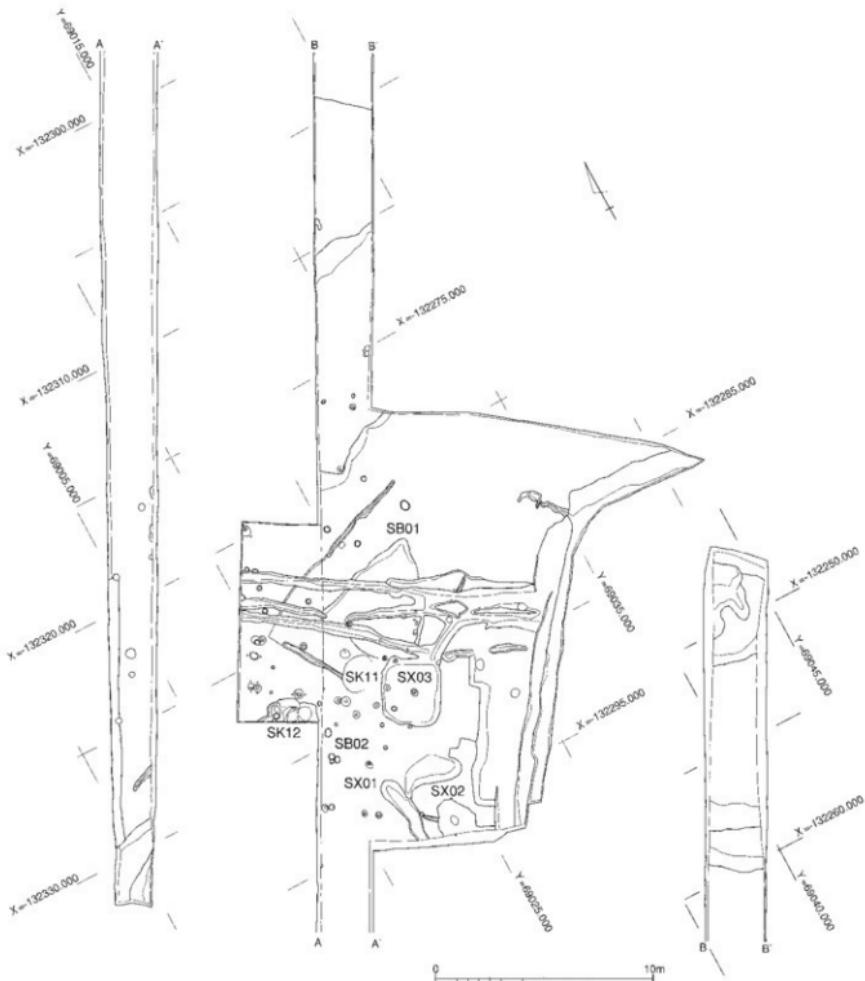
第79図 第8調査区-2平面図



第80図 第8調査区-3平面図

黄灰色シルト（上面が造構面）となる。

4区南半部と5区南半部で遺構を検出した。特に5区南半部では時期不明の竪穴住居址や中世のピットなどを検出し、竪穴住居址の規模を確認するために調査区の東・西両側を拡張して調査を実施した。調査の結果、中世の掘立柱建物1棟、溝3条、水ため状造構2基、土坑2基、ピット多数を検出した。5区南半部の遺構面の標高は4区や5区北半に比べて低くなっている、125.1m～125.7m（盛土上面からの深さ0.2m～1.0m）となってい



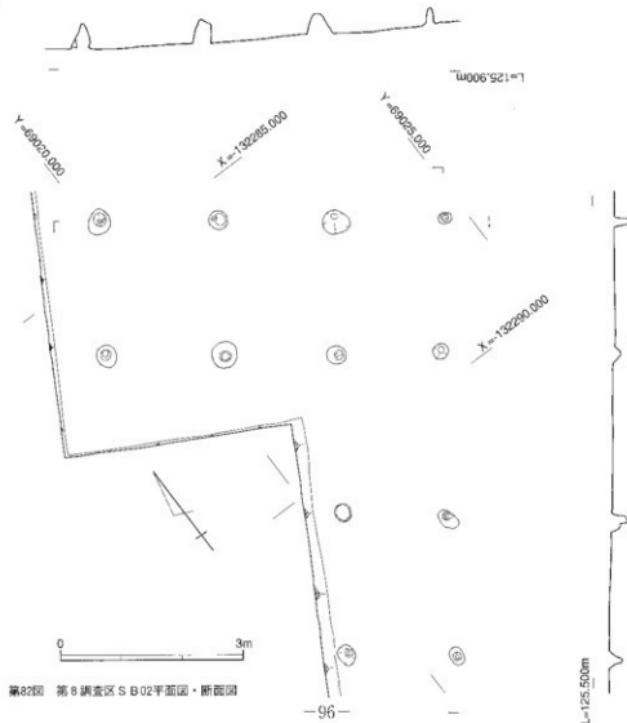
第8図 第8調査区4、5平面図

る。4区南半との比高差は0.5~0.6m、5区北半との比高差は0.1~0.8mである。

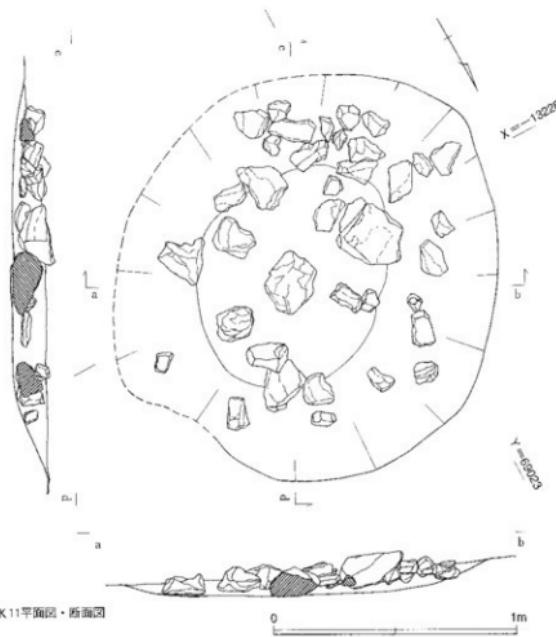
S B01 平面形が方形を呈する堅穴住居址であるが、削平をかなり受けている。北西半部分の周壁及び周壁溝、ベッド状遺構のわずかなちあがりを確認したにとどまる。コーナー部分が明確でないために規模については不明であるが、一辺が10m弱のものと推定される。ベッド状遺構が全周するものかどうかについても不明である。主柱穴についても明確ではない。検出中あるいは遺構掘削中には奈良時代以降の上器しか出土していないため、明確な時期について把握することは困難であるが、平面形からは古墳時代頃のものと考えられる。

S B02 S P 10・11・13・15・21・22・31・32・35・36・47・53から構成される、3×3間以上の掘立柱建物で西側に延びる可能性もある。出土遺物から判断すると、十三世紀前半の遺構と考えられる。また、この建物は建て替えが行われた可能性が高い。S P 31・35は建て替え後も使用したものと考えられ、その他S P 12・16・20・33・37・44・48によって構成される建物が先行すると考えられる（北東隅の1間分の柱穴は検出されなかった）。ただし、この建て替え前後のそれぞれの建物存続時期の違いについては、出土遺物には明確な時期差が認められないため、不明である。さらにS B02の東接する位置にあるS X03については、この建て替えに伴って、あるいはそれ以後に構築されたものと判断される。

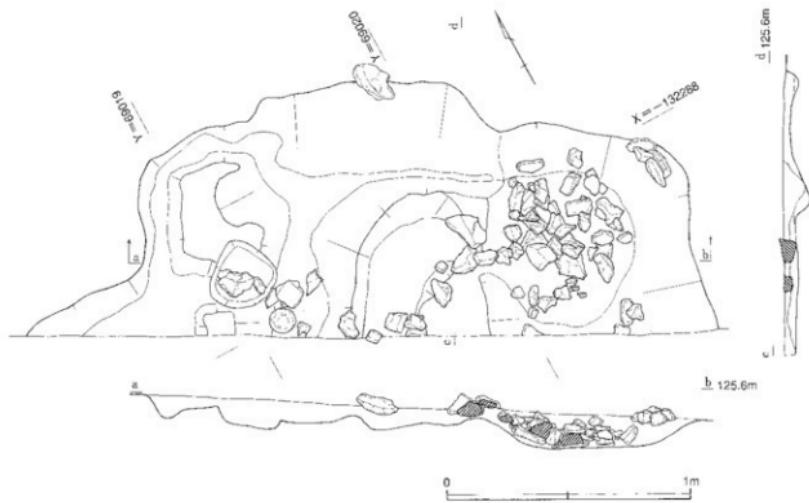
そのほか、S P 24・26・27・28・30や、S P 46・49・50なども建物の可能性があるが、調査区内でそのまとまりを確認するまでに至らなかった。



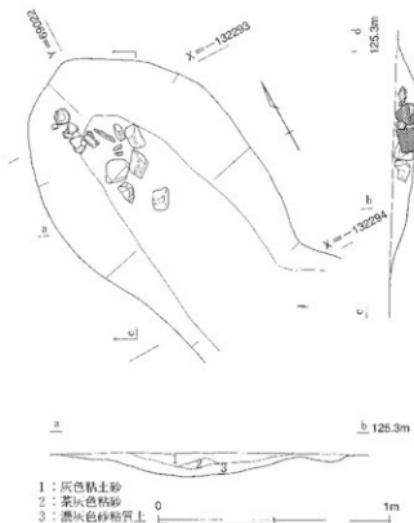
第82図 第8調査区 S B02平面図・断面図



第83図 SK 11平面図・断面図



第84図 SK 12平面図・断面図



第85図 S X01平面図・断面図



第86図 S X01平面図・断面図

S K11 1.75×1.3m、深さ14cmの楕円形の土坑と考えられるが、東部は削平されているため、正確な規模については不明である。

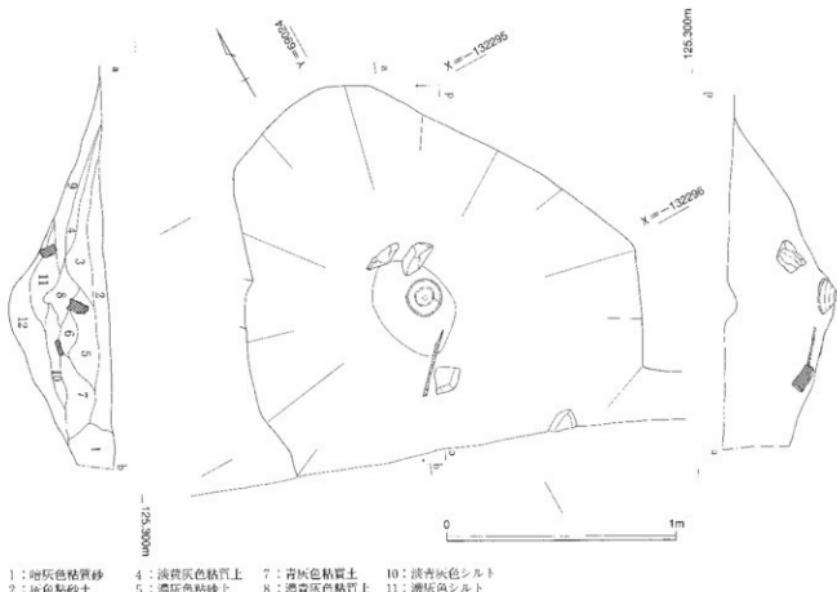
拳大から人頭大の礫とともに中世の土器が少量出土している。

S K12 半ばが調査区外に延びているため、正確な規模は不明であるが、調査区内の規模は2.86×1.04mを測る。底面は平坦ではなく、凹凸がみられる。最深部は東部にあり、深さ14cmを測る。埋土中には炭がやや多く含まれており、特に下層に多く含む。また、拳大前後の礫を含むが、特に東部に多い。

S D01~03 並行して西から東へ流れる幅30~50cmの3条の溝で、途中で合流して東へと流れていたようである。S D01は一度水たま状遺構のS X03に一度注ぎ込むような形態で、S X03の余水がS D02・03と合流して東へ流れるようである。奈良時代から中世の土器が出土している。埋土はS D01が灰色シルト質細砂及び灰色シルト、S D02が淡灰色～灰色シルト、S D03が淡灰色シルト質細砂である。

S X01 幅44~89cm、深さ11cmの溝状の落ち込みで、北端部で拳大くらいの礫とともに中世の須恵器・土師器・青磁が出土している。

S X02 1.74×1.8m以上の楕円形に近い平面形を呈する、水溜状遺構と考えられる。最深部の深さは45cmを測る。東側は真っ直ぐに延びる溝状の遺構が取りついており、余水を東側へ流すためのものである可能性が考えられるが、調査区外に延びているために詳細は不明である。最深部で十三世紀前半の完形の須恵器碗が出土している(図88-156)。埋土の堆積状況をみると人為的に埋められたものと判断される。最深部の完形土器は、埋め戻しに際し、何らかの祭祀のために置かれた可能性が考えられる。



1:暗灰色粘質砂
2:灰色粘砂土
3:淡茶灰色粘質土
4:淡黄灰色粘質土
5:深灰色粘砂土
6:淡灰茶色粘質土
7:青灰色粘質土
8:深青灰色粘質土
9:深青灰色シルト
10:淡青灰色シルト
11:深灰色シルト
12:暗灰色シルト

第87図 S X03平面図・断面図

水溜状遺構

2.63×3.1m、深さ19cmを測る、平面形が隅丸方形の水溜状遺構と考えられる遺構である。北東部と南西部で拳大から人頭大の礫が検出された。十三世紀前半の須恵器・土師器・白磁が出土している。

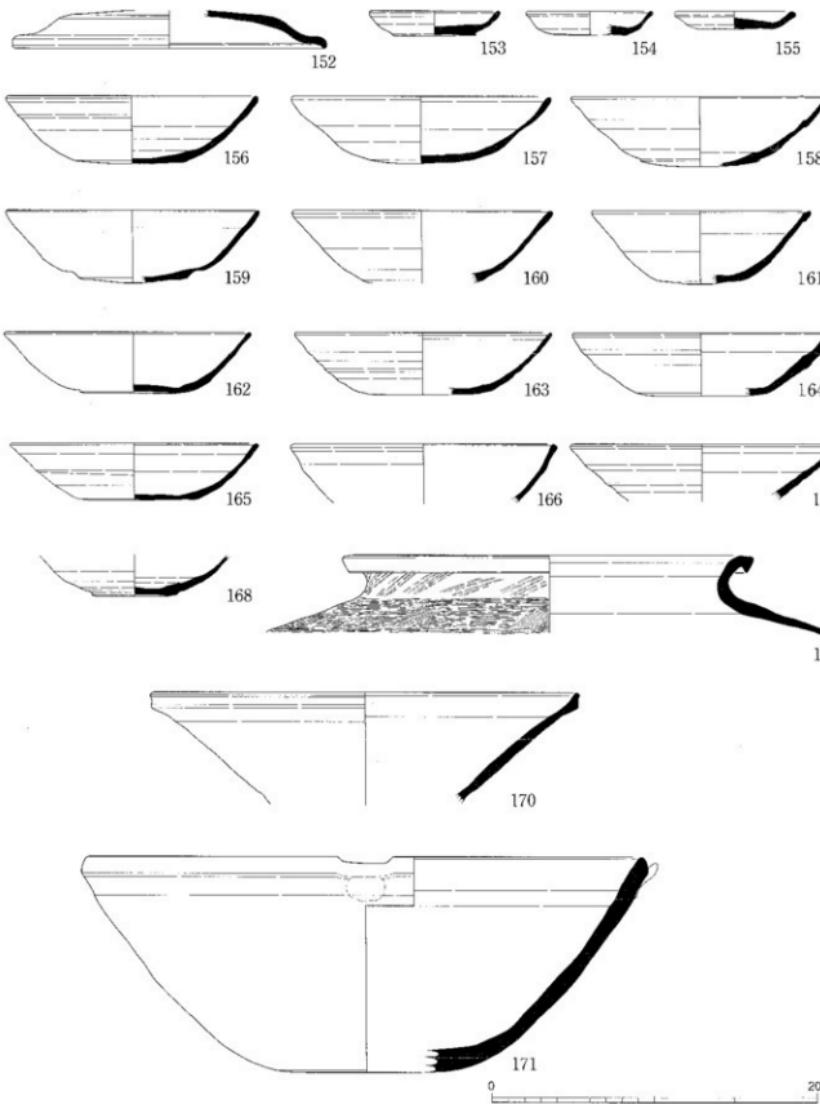
(2)出土遺物

第8調査区で出土した土器は、28点入りのコンテナで約8箱であるが、その大半が4・5区で出土したものである。ここでは、遺構内出土土器を中心にして31点の図化を行った。時的には奈良時代後半から平安時代前半のものと、鎌倉時代のものに大別される。奈良時代後半のものは包含層及び遺構内から出土しているが、この時期に特定できる遺構ではなく、中世の遺構に混入したものと考えている。第88図は須恵器、第89図は土師器及び磁器である。

須恵器

152は壺B蓋で、奈良時代後半に比定される。口径19.1cmを測る。奈良時代のもので図化したのはこの1点のみである。152は旧耕土層出土のものであるが、前述のように包含及び中世の遺構内からも奈良時代後半あるいは平安時代前半の土器が出土している。他は鎌倉時代のものである。

壺153～155は口径7.0～7.8cm、器高1.1～1.6cmを測る小皿、156から168は壺、169は甕、170・171は片口鉢である。156は口径15.2cm、器高4.2cmを測る完形品で、水ため状遺構S X02の底面の上面で出土した。13世紀前半のものと考えられる。157はSK12下層出土のもので、口径15.7cm、器高4.1cmを測る。13世紀前半のものと考えられる。158はSX



第88圖 第8調查區4·5出土土器(1)

03出土のもので、口径15.7cm、器高4.3cmを測る。159はS D01出土のもので、口径15.4cm、器高4.5cmを測る。161・162はS X01出土のもので、161は口径13.4cm、器高4.5cmを測る。162は口径15.8cm、器高3.8cmを測る。166・167はS B02出土土器である。166はS P22、167はS P32出土で、口径は15.9cmと16.1cm、器高は3.7cmと3.5cmをそれぞれ測る。168はS P54出土で、底部のみの残存である。底径5.2cmを測る。甕169はS X03出土の甕で、口径25.3cmを測る。鉢170はS X03出土の鉢で、口径26.0cmを測る。片口鉢と考えられるが、片口部は残存していない。胎土は砂粒が多く含むが精良で、焼成も良好である。171は片口鉢で、口径34.0cm、底径11.1cm、器高13.3cmを測る。底部内面は使用による腐耗が顕著である。胎土は170に比べて粗く、焼成も甘い。造りもやや雑な感じである。

土師器

図化したのは小皿6点、甕1点、羽釜1点、底部1点である。173はS X03、177・178はS B02、181は旧耕土層、182はS X02出土で、他はS K12出土のものである。

小皿は回転台成形のものと手捏ね成形のものがある。回転台成形のものは口径がやや大きく、器高もやや高い172・173と、小振りなもの174～176がある。172は厚手のつくりで、口径9.6cm、高さ1.6cm、底径6.2cmを測る。173は口径8.8cm、高さ1.5cm、底径5.6cmを測る。174は口径7.8cm、高さ1.2cm、底径6.0cmを測る。175は口径7.8cm、高さ1.2cm、底径5.2cmを測る。176は口径7.4cm、高さ1.5cm、底径4.6cmを測る。177は口径7.4cm、高さ1.5cmを測る。手捏ね成形によるもので、口径7.4cm、器高1.5cmを測る。

甕178は口径24.4cmを測る。体部内面は横方向のハケ、外面はヨコナデを施す。

羽釜179は口径20.8cmを測る羽釜で、口頭部に鶴が巡る。口縁部はヨコナデ、体部はやや粗雑なヨコナデを施す。内面は不明瞭であるが、ヘラケズリを施している。

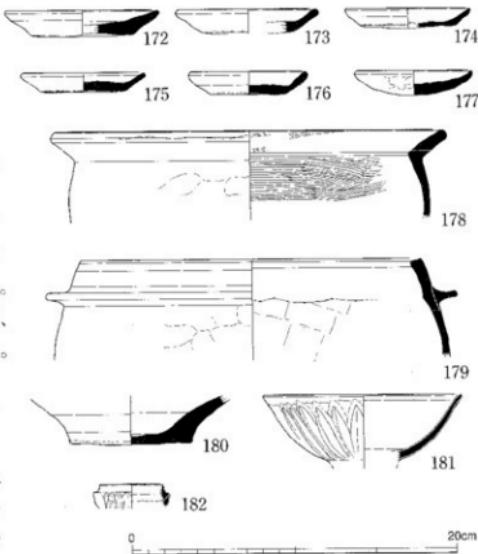
底部180は大型の甕あるいは鉢の底部で、底径7.5cmを測る。

青磁

青磁はいずれも破片で数点出土しているが、図化できたのは1点である。碗181は龍泉窯系の碗で、口径12.4cmのものである。体部に鍋蓮弁文を施す。口縁部はわずかに外反する。

青白磁

合子182はS X02出土の合子で、口径4.0cmを測る。体部に蓮弁文を施す。



第89図 第8調査区4・5出土土器(2)

出土した土器は、152を除き時期的には概ね十三世紀前半のものである。ただし包含層及びその上層の旧耕土層から出土した土器のなかにはやや遅る時期のものも若干含まれている。

G. 第9調査区

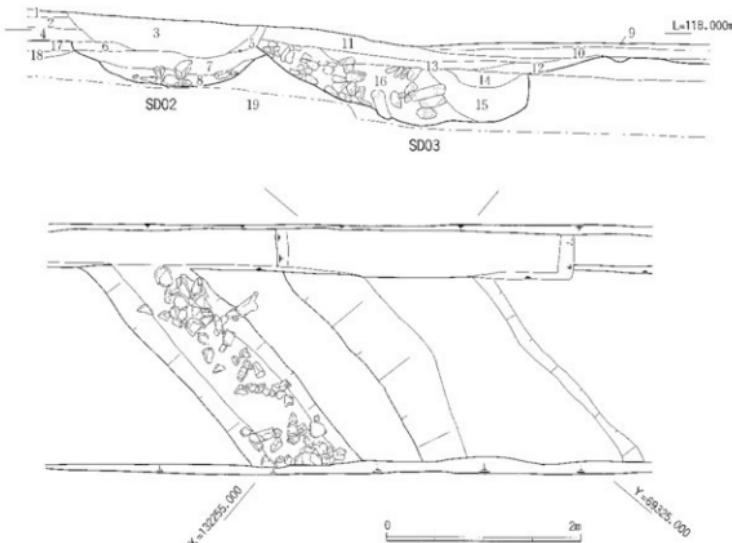
第9調査区は、第21号支線排水路部分の工事掘削範囲（全長115m、幅2.5m）を、調査区は、調査杭毎にA～Dの地区割りを設定し調査を実施した。

調査区は、A区北東部で湿地状の地形を形成し、B区付近になると立ち上がり微高地状を呈する。そして河川に向けて緩斜面を形成している。調査区の基本層序は、現地表面から0.2～0.4mまでは現代耕作土・床土・旧耕作土で、中世～現代の陶器・土器等が出土している。旧耕作土の直下に遺物包含層が残存する部分があるが、ほとんど地山面が遺構面であった。

(1) 検出遺構

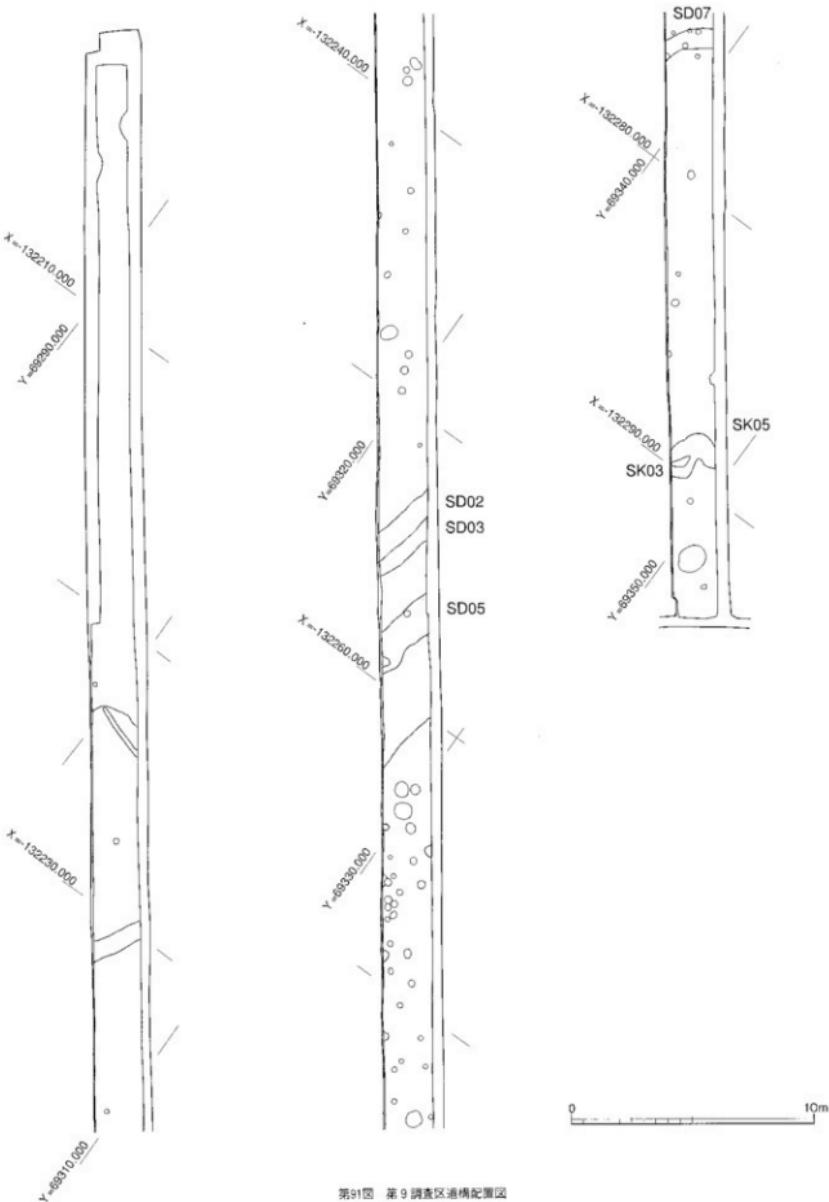
A・B区

A区はほぼ全体が湿地状に落ち込んでいて南西端付近で立ち上がりをみせ、黄茶色シルトの地山面で遺構を検出した。B区は旧耕作土上下に中世の遺物包含層が堆積し、直下に黄茶色シルトの地山面を検出した。溝1条直徑0.2m、深さ0.2mのピットを11基検出したが、ピットは建物としてまとまらない。湿地は植物茎痕などがみられ、比較的長期間存在して



- | | | | |
|---------------|---------------|-------------------|------------------|
| 1. 黄茶褐色シルト質粗砂 | 6. 淡灰褐色砂質シルト | 11. 淡褐色シルト質細砂 | 16. 灰色砂質シルト (理化) |
| 2. 黄茶褐色シルト質粗砂 | 7. 緑色灰色シルト質細砂 | 12. 淡灰色シルト | 17. 暗茶褐色シルト |
| 3. 黑灰色シルト質粗砂 | 8. 黑灰色シルト質細砂 | 13. 暗茶褐色シルト | 18. 黑茶色シルト |
| 4. 淡灰色シルト質粗砂 | 9. 淡灰色シルト質細砂 | 14. 灰色砂質シルト | 19. 黄茶色シルト |
| 5. 灰色粗砂 | 10. 黄茶色シルト質細砂 | 15. 灰色シルト (植物遺体含) | |

第9回 第9調査区 SD02・SD03平面図・断面図



いたものと考えられる。埋土から平安時代の須恵器坏身187が出土している。

S D01 A区南西端でされた東から西に走る断面U字形の素掘りの溝である。幅0.2m前後、深さ0.1mを測り、2.5m分を検出している。埋土からは遺物は出土していない。

C区 旧耕作土下に中世の遺物包含層が堆積し、直下に黄茶色シルトの地山面上に遺構を検出している。遺構は互いに平行して走る溝3条、土坑3基、直径0.4m前後、深さ0.3m前後のピット31基を検出した。ピットは建物としてまとまらない。

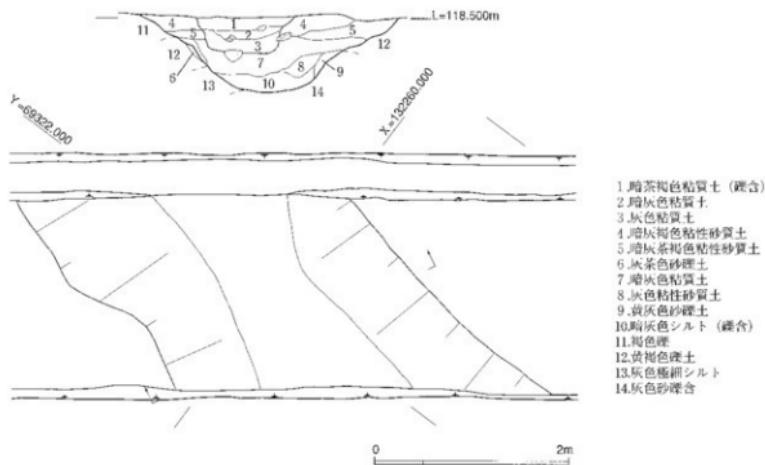
S D02 北東部で検出された北から南に走る断面皿形の素掘りの溝である。幅0.9m、深さ0.4mを測り、2.7m分を検出している。底部には直径20cm程度の砾が投棄された様な状況で多量に出土している。埋土は2層に分かれ、須恵・土師器片が出土している。

S D03 北東部で検出されたS D02の西に位置する北から南に走る断面皿形の素掘りの溝である。幅1.6m、深さ0.7mを測り、2.2m分を検出している。東肩部には最大長20~30cm程度の砾が多量に出土している。護岸を目的としたものと考えられる。そのため溝として機能していたのは幅1m、深さ0.7mの部分であったものと考えられる。埋土は大きく3層に分かれ、上層から鎌倉時代前半の塊193が出土している。

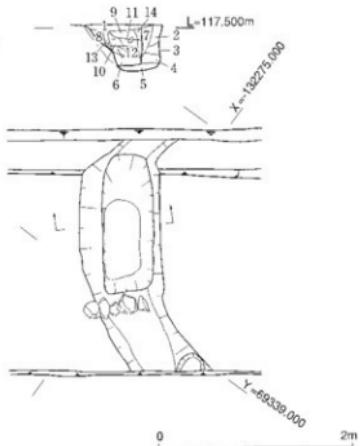
S D05 北東部で検出されたS D03の西に位置する北から南に走る断面U字形の素掘りの溝である。幅2.7m、深さ0.75mを測り、2.5m分を検出している。埋土は大きく2層に分かれ、1度完全に埋没した段階で再掘削が行なわれている。上層から平安時代の須恵器坏身185・皿184、下層からは奈良時代後半の須恵器坏身183・186などが出土している。

S K02・04 いずれも直径0.6m前後、深さ0.2mを測る。埋土はレンズ状に堆積する。須恵・土師器
・06 細片が出土している。

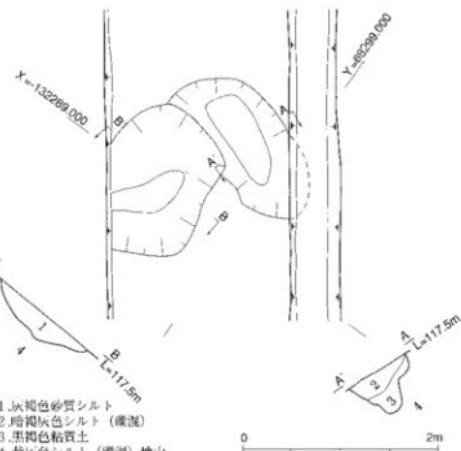
D区 旧耕作土下に中世・弥生時代の土器を含む遺物包含層が堆積し、灰褐色混疊シルトの地山面上で遺構を検出した。遺構は溝1条、土坑3基、直径0.2~0.3m、深さ0.3m前後のピットを11基を検出した。ピットは建物としてまとまらない。



第92図 S D05平面図・断面図



1.暗茶灰色砂質シルト
2.暗茶黄色シルト
3.暗茶灰色シルト
4.出現色シルト
5.灰黑色シルト
6.暗灰黑色シルト
7.淡茶褐色シルト
8.暗茶褐色シルト
9.暗茶灰色砂質シルト
10.暗茶黑色シルト (土壠含)
11.暗茶黑色砂質シルト
12.暗褐色シルト (土壠含)
13.暗茶色砂質シルト
14.淡灰茶色砂質シルト



第94図 SK03・SK05平・断面図

第93図 S D07平・断面図

S D07 北端で検出された南から東へ緩く弧を描き走る断面U字形の素掘りの溝である。幅0.8m、深さ0.5mを測り、2.6m分を検出している。溝中央では長辺1.5m、短辺は0.8m、深さ0.35mの長方形の土坑が溝の埋没の途中で掘り込まれている。埋土は4層に分けられる。溝から弥生土器の壺口縁部194が出土している。

S K01 南端で検出された円形の土坑である。直径1m前後、深さ0.2mを測る。埋土は2層に分かれ、須恵・土師器細片が出土している。

S D03 南端で検出されたやや崩れた楕円形の土坑である。長径1.5m、短径1.2m、深さ0.25mを測る。埋土からは須恵・土師器細片が出土している。

S K05 南端で検出されたやや崩れた楕円形の土坑である。長径1.7m、短径0.8m、深さ0.5mを測る。一部S K03に切られている。埋土は2層に分かれ、上下層から弥生土器細片が出土している。

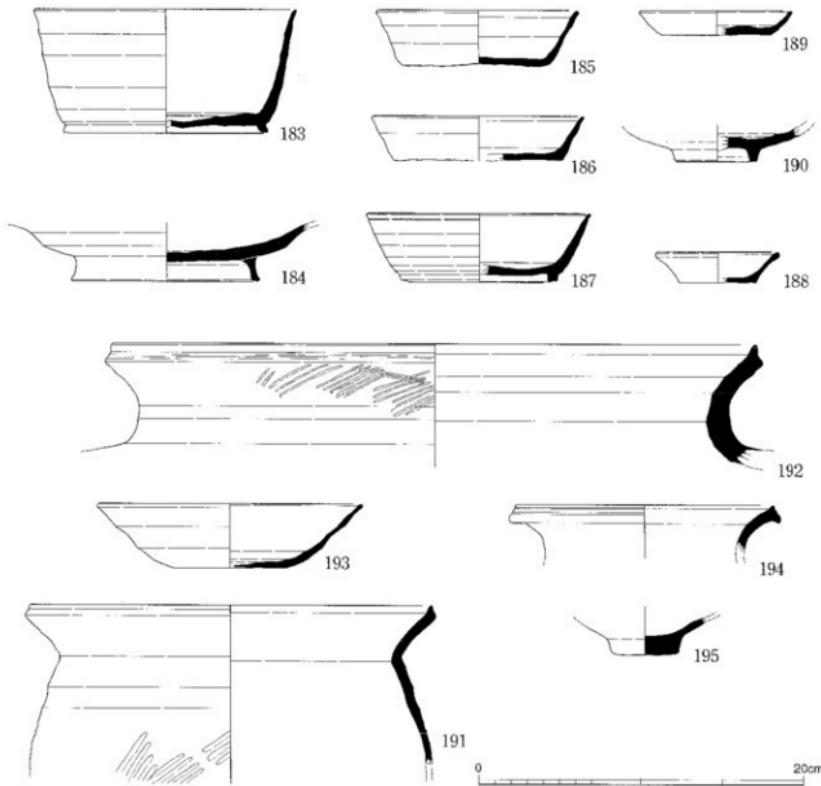
(2) 出土遺物

S D05 上層からは壺A185、壺B183、下層からは壺A186、皿B184が出土している。

壺A185は法量が口径12.2cm、器高3.45cmである。体部は外方に開き、底部との境は明瞭である。口縁部と体部中位に大きくナデを施す。底部外面は未調整で粘土絆痕が残存する。粘土紐は幅1~1.5cmである。

壺B183は法量が口径16cm、器高7.6cm、底径12.6cmである。体部は若干外方に開き、高台脚部は短く、外方に開き内面に接地面をもつ。底部はナデにより中央がくぼみ、底部外面にはヘラによりX印が線刻されている。底部から口縁部にかけて回転ナデを行なう。

壺A186は法量が口径13cm、器高2.7cmである。体部はやや外方に開き、底部境界は明瞭である。底径は10.4cmでやや底広である。全体に回転ナデで体部中位に大きくナデが施さ



第9調査区・出土遺物実測図

れている。底部外面は未調整で粘土紅痕が残存する。

皿B184は高台部分の破片で、底径11.4cmである。脚部は細くやや外方に踏ん張っていて、外面に接地面がある。体部外面の脚部付近では回転ヘラケズリを行うが、その他の部分は回転ナデを行う。底部外面はナデで仕上げている。

坏B187は法量が口径13.8cm、底径9.2cm、器高4.2cmである。体部はやや外方に開き、口縁端部はナデにより更に外方に開く。底部内面は中央部が若干高くなる。脚部は底部と体部の境界から垂直に下り、内面に接地面をもつ。底部内面はナデにより仕上げている。

皿B188は回転台土器である。法量は口径7.4cm、底径4.6cm、器高1.9cmである。体部は外方に大きく外反し、口縁端部はナデ上げられる。底部外面は糸切り痕が明瞭に残存する。

その他の造構

塊193はS D03から出土し、法量は口径16.2cm、器高3.95cmである。体部は大きく外方に開き、見込みに段はもたない。底部外面を除きナデで仕上げる。

広口壺194はS D07から出土した口縁部で、口径は14.5cmである。口縁部は大きく外反し、端部には凹線文を2条施す。

包含層

小皿189はC区から出土したもので、法量は口径9.2cm、器高1.5cmである。底部は中央部で凹みをもつ。全体に回転ナデを行い、底部のみ未調整で糸切り痕が残存する。

碗190は青磁碗高台部でB区から出土した。底径は4.8cmである。脚部はやや内傾している。釉薬は全体的に施され、内部に重ね焼痕が残る。

鍋191はB区から出土した土師器鍋口縁部から胴部片で、口径は24.6cmである。口縁は外方に開き、端部はツマミ上げられる。体部は口縁部径より大きくならない。頸部付近はナデ、体部はタタキを行う。

甕192はD区から出土した口縁部で、口径29.6cmである。頸部は外方に開き、口縁端部はツマミにより上げられる。頸部には細かいタタキが施される。

弥生土器195はD区から出土した底部片である。摩滅により調整は確認できない。

I. 第10調査区

全長30m、幅2.5~3.8mの道路拡張による切土部分の調査である。

調査区は、河岸段丘の裾部にあたり、南側は道路により削平されている。基本層序は現地表下1m~50cmまでが現耕作土および旧耕作土・床土、水田造成時の盛土であり、この直下は地山層である黄褐色シルト層であった。この地山層を削平して、水田の造成が行われており、盛土下にも旧耕作土・床土が存在したことから、数度造成が行われたものと推定される。遺構は検出されなかった。

盛土中より、微細な中世の須恵器・土師器が出土している。



写真7 第10調査区全景

第2節 小 結

第4次調査地のうち第3～第7調査区は、第3次調査地の段丘および段丘崖からつづく低地部分を調査した。調査の結果、飛鳥時代の掘立柱建物や溝、奈良時代の掘立柱建物・溝、中世の溝・土坑などを検出した。従来、第3次調査などで飛鳥時代～中世の継続的な集落の存在が明らかになったが、今回の調査では第4・5調査区の西部で第3次調査地と同様な集落の一部を検出した。第4・5調査区と第3次調査地との間には、遺跡の立地の節でも明らかなように谷地形があり、沼地状の湿地が広がっていたと考えられ、段丘上および斜面の高い部分に居住域を占めていたと考えられる。一方、第5調査区の東部・第7調査区など湯山街道西側の低地では、遺構は散漫になり谷地形部分では居住域としては利用されなかつたと考えられる。

また出土遺物では、第5調査区のS D01からは鉄鉢形の須恵器や薬壺形の須恵器壺・蓋が出土するなど器種構成も多彩であり、当時の都城遺跡にひけをとらない遺物が出土している。さらに第6調査区では、風字梗の破片と考えられる遺物が出土し、第7調査区でも硯の破片が奈良時代の須恵器と共に伴して出土している。このような遺物の出土は、勝雄遺跡検出の集落が、通常の農村集落ではなく官衙的性格が濃厚な集落であった可能性を考えられる。

第8調査区と第2調査区では中世の掘立柱建物2棟と脛穴住居1棟を検出している。弥生時代の遺構は第3次調査でも高位の段丘上確認されており、散在的だが弥生時代後期には勝雄地区に定住する人々が居たことを裏付けている。第9調査区は、東側は低位の段丘上、西側は低湿地となっている。遺構は段丘上に集中して弥生時代後期の溝・土坑、平安時代の溝が検出され、淡河川右岸に近接する低位段丘面においては、弥生時代には周溝墓等の墓域、平安時代から中世には集落が形成されていたと考えられる。

第VII章 総 括

今回報告する勝雄遺跡における発掘調査は、土地改良事業に伴う調査であり、排水路および水田造成切り土部分に限定した調査であったが、断続的に弥生時代後期から室町時代におよぶ、広範囲な遺跡であることが判明した。

とともに淡河町では、勝雄遺跡東隣の中村遺跡〔村尾1992〕において縄文時代から中世の集落遺跡が発見されており、また淡河川左岸の淡河城周辺においても弥生時代終末期から古墳時代初頭の堅穴住居が検出されている。〔宮本1977〕このように中村・本町地区周辺は原始・古代の遺跡が集中する地域として注目されてきた。今回の勝雄遺跡における調査の結果、勝雄地区をも含めた各遺跡相互の検討が必要と考えられる。本稿では、周辺の遺跡と勝雄遺跡の有り様を検討しつつ、勝雄遺跡の歴史的位置付けを行いまとめたい。

弥生時代

今回の調査で検出された弥生時代の遺構・遺物は、第1次調査S X01出土の台形土器、第3次調査-3の段丘上で検出した隅丸方形乃至は五角形の屋内高床部を造り付ける堅穴住居1棟と方形の小型堅穴住居1棟、そして第4次調査第9調査区で検出された溝内に埋納坑をもつ溝などである。

第1次調査第2トレンチS X01出土の台形土器は弥生時代中期に始まる器種で、神戸市内では西区玉津町出合遺跡第27次調査河道1出土品〔富山1994〕に類例がある。この台形土器が出土したS X01はカギ形にめぐる浅い溝状遺構であり、後世の開田による削平のため溝の底部分を残存させていると考えれば方形周溝墓の一部であった可能性もある。今後の付近での調査をもって検討する必要がある。器種としては弥生時代後期には見られない点から、第1次調査地点付近に弥生時代中期の遺跡が存在していたと考えられる。

第3次調査第1調査区-3の段丘上で検出した弥生時代後期の屋内高床部を有する堅穴住居は、弥生時代中期から後期に東播磨に多い形態の堅穴住居と考えられる。これまでに知られていた淡河川流域の弥生遺跡は、勝雄地区から西へ木梨峠を越えた三木市志染町戸田の戸田遺跡〔毛利1986〕である。この淡河川右岸河岸段丘上の戸田遺跡では弥生時代終末期の溝が検出され、溝内より複合口縁壺形土器が出土している。この複合口縁壺形土器は、神戸市西区玉津町玉津田中遺跡〔兵庫県教委1996〕でも同一形態の壺形土器が出土しており、胎土と形態から四国讃岐地方からの搬入品と考えられている。この戸田遺跡出土の複合口縁壺形土器については実際に出土品を確認していないため、明確ではないがほぼ同一形態の壺形土器と考えてよいであろう。

第4次調査第9調査区で検出された溝は、溝内に埋納坑をもち、埋納坑は箱状の木製容器を納めていたと想定される。こういった埋納坑は、方形周溝墓の溝内埋葬を想定させる。しかしながら埋納坑の規模は小さく小児棺とも考えられるが明確でない。なお、第9調査区の西側段丘上での試掘調査で弥生土器が出土していることから、低位段丘面にもかなり広域に弥生時代後期の遺跡の広がりが考えられる。このように弥生時代後期になると加古川の支流である志染川・淡河川の流域に現在までのところ点々と遺跡の存在が確認されつつ

つあるが、今回の勝雄遺跡における広域にわたるトレンチ調査で一部のみに弥生時代の道構・遺物を検出するにとどまることから、散村的に集落が形成されたと考えられる。

弥生時代中期頃から定住し始め、開拓が開始されたと考えられる勝雄遺跡では、弥生時代に続く古墳時代初頭の堅穴住居は確認されているが古墳時代の明確な遺構・遺物は恵まれていない。ただ、東隣の淡河中村遺跡において古墳時代中期後半の堅穴住居2棟が昭和63年度の神戸市教育委員会実施の調査で確認されている他、平成元年淡河中村遺跡調査開による調査で、韓式系土器や布留式土器を置き留めた状態で焼失した堅穴住居が検出されている。しかし、古墳時代前・中期の集落の検出は淡河城南東地点と淡河中村遺跡に限られ、当勝雄遺跡では明らかに古墳時代に属する遺構・遺物は確認されておらず、古墳時代前期頃には弥生時代の散村から、淡河中村地区への拠点的な集落への移動が想定される。

飛鳥時代

～奈良時代

飛鳥時代、七世紀になると勝雄遺跡の北東部に竈を造り付けた方形の堅穴住居による集落が出現する。この集落は当初堅穴住居で構成され、扇状地・段丘上に広く集落域をもっていたが、七世紀の中頃になると淡河八幡神社境内周辺の扇状地上と、段丘崖下の沖積地にその集落域を集中させる。第1調査区-2で検出されたS D07のような大溝とも呼ぶべき長期にわたって掘り返し使用された痕跡をとどめる溝が開削される。この大溝の北西側には飛鳥～奈良時代の掘立柱建物は検出されず、大溝は集落域を区画していた可能性が高い。この区画溝の区画内には、2間×3間・2間×4間の束柱をもたない掘立柱建物が建てられる。その時期は、第1調査区-3の堅穴住居S B27焼失後前後と考えられ、堅穴住居と掘立柱建物は一時期併存しながら、堅穴住居から掘立柱建物へと住居構造を変えていったと考えられる。この掘立柱建物による集落の廃絶時期は、大溝の最終埋没土内出土遺物から八世紀前半の中にみると考えられる。このように勝雄遺跡は、七世紀前半に古墳時代以来の在地集落を基盤とせずに、形成された集落といえる。

勝雄遺跡と同様に、七世紀に竈を造りつける堅穴住居と掘立柱建物を検出した遺跡は、神戸市とその周辺では北区長尾町宅原遺跡〔神崎1990・安田1990〕、八多町下小名出遺跡〔神崎1989〕、三木市久留美田井野遺跡〔兵庫県教委1996〕、志染町戸田遺跡と勝雄遺跡の東隣に位置する淡河中村遺跡がある。このうち宅原遺跡では「評」と記された墨書き土器が発見され、古代都制以前の地方行政組織に関わる施設等が存在していた可能性が指摘されている。田井野遺跡は奈良時代・平安時代に継続するが、堅穴住居S H01床面から土製馬が出土しており、畿内中央の祭祀を執り行う先進的集団の姿をその集落にみることができる。一方、弥生時代の頃でも述べた勝雄遺跡の内に位置する戸田遺跡では、一辺3m前後の竈を造りつける方形堅穴住居が確認調査で検出されている。この堅穴住居の埋土内から宝珠つまみをもつ蓋が出土しており、七世紀段階の堅穴住居と考えてよいと思われる。また、淡河中村遺跡ではS B11・S B08など大型柱掘形を採る掘立柱建物の掘形内から飛鳥II期前後の須恵器が出土している。さらに、この掘立柱建物の周辺で時期不明ながら竈を造りつける堅穴住居が検出されていることから、ほぼ同時期に淡河中村遺跡においても勝雄遺跡と同様な集落が形成されたものと考えられる。

従来、堅穴住居は七世紀になると、畿内中枢部においては平地式の掘立柱建物に取って

代わられる傾向にあるが、兵庫県神戸市宅原遺跡・三重県四日市市貝野遺跡〔林1969〕・京都府綾部市青谷南遺跡〔綾部市教委1982年〕などでは、なお竪を造り付ける竪穴住居がもちいられており、掘立柱建物と併存する例もある。このように、なお七世紀の段階では畿内周縁部においてこの傾向は顕著であり、勝雄遺跡におけるひとつの特質といえる。

縮見屯倉

勝雄遺跡の属する美義郡は「縮見屯倉」の領域であり、淡河地域は志染里の東部山間部にあたり、古墳時代以来所謂人和政権の宣情地として、開発が進められた地域と考えられる。この「縮見屯倉」に関する風土記の記載には、縮見屯倉首が山林の管理と鉄などを鉱物資源の管理、そして鍛冶に必要な炭の生産をつかさどる山部連の氏を与えられたという説話がある。また、同じく「縮見屯倉」と考えられる神戸市押部谷町の地名「押部」は、金属精錬・鍛冶を職掌とした忍海漢人の部民に因む地名とされる。このように、「縮見屯倉」は山林管理と金属精錬・鍛冶を営む渡来人によって経営され開発された地域と考えられている。〔和田1992〕

淡河地域における渡来系の出土遺物には、淡河中村遺跡における古墳時代中期の竪穴住居出土韓式系土器があげられる。また、勝雄遺跡での第1次・第2次調査において遺構に伴わないが鉄滓が少なからず出土しており、この2点をもって淡河地域における渡来人居住を示すとは考え難いが、少なくとも当地域が縮見屯倉中枢と関連していたことを窺せる例といえる。

このように考えると「縮見屯倉」では七世紀に入る頃、田井野遺跡・戸田遺跡・勝雄遺跡・淡河中村遺跡などの遺跡で、突如として造り付けの竪を設ける竪穴住居で構成される集落が出現し、掘立柱建物へと建物構造を変えつつ奈良時代まで営まれる。このような集落は、三重県伊勢地方などでも古墳時代後期の集落からの継続が意外と認められず、七世紀前半後に集落の開始期が求められる傾向にある。〔竹内1997〕この「縮見屯倉」内の辺縁部への集落の拡散・移動は竪穴住居構造と掘立柱建物構造が並んで、同一時期に多くの建物が建てられている点、そして、古墳時代後期の集落からの継続性がない点などから、これらの集落が開拓民の集団移動による「開拓村」であったとも考えられよう。

この七世紀初めは天皇家直轄支配地である壬生部・屯倉の設置がさかんに行われ、耕地拡大が図られた時代である。それに伴って、地方の中小豪族が冠位十二階の制定など天皇家直属の官僚として、天皇家直轄支配地の経営にあたったと考えられている。〔門脇1970〕

勝雄遺跡は、七世紀～八世紀における畿内周縁地域での村落がどのような経緯で成立したかを検討するうえで、重要な資料を提供する遺跡と考えられる。

註

阿部嗣治編1993 『淡河中山遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 淡神文化財協会

明本東海1968 『神戸市淡河の歴史』

綾部市教育委員会1982年 『青谷南遺跡発掘調査概報』『綾部市文化財調査報告』第9集

有井 基1996 『改訂版 北区の歴史』 神戸市北区役所まちづくり推進課

- 岩崎直也他編1997 『萩原城遺跡発掘調査報告書』 阪神文化財調査会
- 岩崎直也他1999 『東畠・南浦遺跡発掘調査報告書』 阪神文化財調査会
- 岡田章一他1999 『勝雄遺跡』『平成10年度年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 門脇慎二1966 『日本歴史講座』 原始・古代 東京大学出版会
- 川吉謙二他編1992 『淡河萩原遺跡発掘調査報告書(Ⅰ)』 淡神文化財協会
- 神崎 勝1988 『神戸市北区長尾寺原遺跡宮之元地区的調査1986年』 妙見山麓遺跡調査団
- 黒田恭正他1996 『淡河・萩原城遺跡 第1次調査』『平成5年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 黒田恭正他1997 『淡河・萩原城遺跡 第3次調査』『平成6年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 黒田恭正他1998 『淡河・萩原城遺跡 第5次調査』『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 新修神戸市史編集委員会編1990 『新修神戸市史』歴史編・自然・考古
- 須藤 宏他1994 『行原遺跡第2・4次調査』『平成3年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 高瀬一嘉編1996 『奥遺跡・宮ノ沢城跡・淡河上中遺跡』 兵庫県教育委員会
- 高瀬一嘉他1996 『川井野遺跡』兵庫県文化財調査報告第154冊
- 竹内英昭1997 『飛鳥・奈良時代の集落遺跡の検討—伊勢地方を例にとって—』『研究紀要』6

三重県埋蔵文化財センター

- 谷 正俊1992 『淡河中村遺跡』『平成元年度 神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- 丹治康明他1994 『淡河中村遺跡』『平成3年度 神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- 富山 直人1994 『出合遺跡 第27次発掘調査報告書』 神戸市教育委員会
- 林 博通1969 『貝野遺跡』四日市市教育委員会
- 兵庫県教育委員会編1976 『兵庫県の中世城館・莊園遺跡』 一兵庫県中世城館・莊園遺跡緊急調査報告一
- 兵庫県史編集専門委員会編1987 『兵庫県史』資料編 中世2 兵庫県
- 兵庫県立歴史博物館編1992 『兵庫の経塚』博物館普及資料第10集
- 兵庫県教育委員会1996 『玉津田中遺跡』第5冊
- 松岡千寿1996 『室町期の六十六部回国納経・神戸市勝雄経塚』 『季刊 考古学』雄山閣
- 丸山 潔他1994 『淡河中村遺跡』『昭和63年度 神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- 美義郡教育会1925 『兵庫県美義郡誌』
- 宮本郁雄1976 『南僧尾A・B地点発掘調査概要』 神戸市教育委員会
- 宮本郁雄1977 『淡河城遺跡発掘調査概要』 神戸市教育委員会
- 村尾政人編1992 『淡河中村遺跡』 淡神文化財協会
- 村尾政人他1992 『下小名田遺跡』(その1)淡神文化財協会
- 村尾政人編1992 『淡河萩原遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)』 淡神文化財協会
- 村尾政人他1999 『淡河萩原遺跡 第Ⅲ・Ⅳ・V次発掘調査報告書』 淡河萩原遺跡調査団
- 毛利哲夫1986 『戸田遺跡確認調査』『三木市埋蔵文化財調査概報』昭和50年度～昭和59年度 三木市教育委員会
- 安田 澄1990 『宅原遺跡』『昭和62年度 神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- 安田 澄1994 『宅原遺跡』『昭和63年度 神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- 山岸常人編1993 『神戸の茅葺民家・守社・民家集落』一神戸市歴史の建造物実態調査報告書一 神戸市教育委員会
- 吉田 异1988 『地福窯跡』『青野ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(2)兵庫県教育委員会
- 和田 萩1988 『古墳の時代』『大系日本の歴史』2 小学館

写真 図版



1. 勝雄溝跡全景（北より）



2. 勝雄溝跡全景（東より）

第1次調査

図版
2

1. 第1トレーンー1区全景
(東より)



2. 第2トレーンー全景
(西より)



3. 第2トレーンー西部
(北より)



第1次調査



1. 第3トレンチ南部全景（北より）



2. 第3トレンチ北部全景（南より）

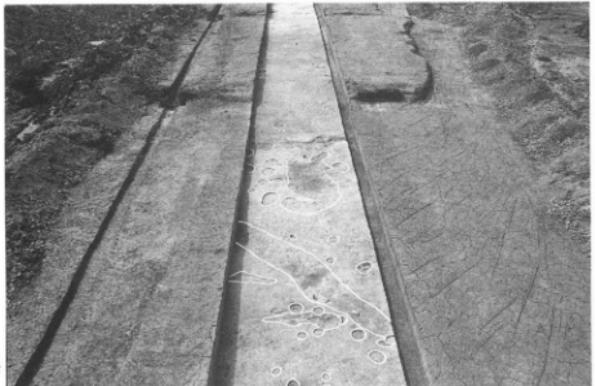


3. 第1トレンチ4区SX 01（東より）



4. 第2トレンチSK 01

第2次調査



1. 第4トレンチA・B区全貌
(南東より)



2. 第4トレンチI区全貌
(北西より)



3. 第4トレンチI区SP 01断面
(北東より)

第2次調査

図版
5



4. 第5トレンチA区全景（北西から）



5. 第5トレンチA区全景（南東から）



6. 第5トレンチB区全景（北西から）



7. 第5トレンチB区全景（南東から）

第3次調査－1

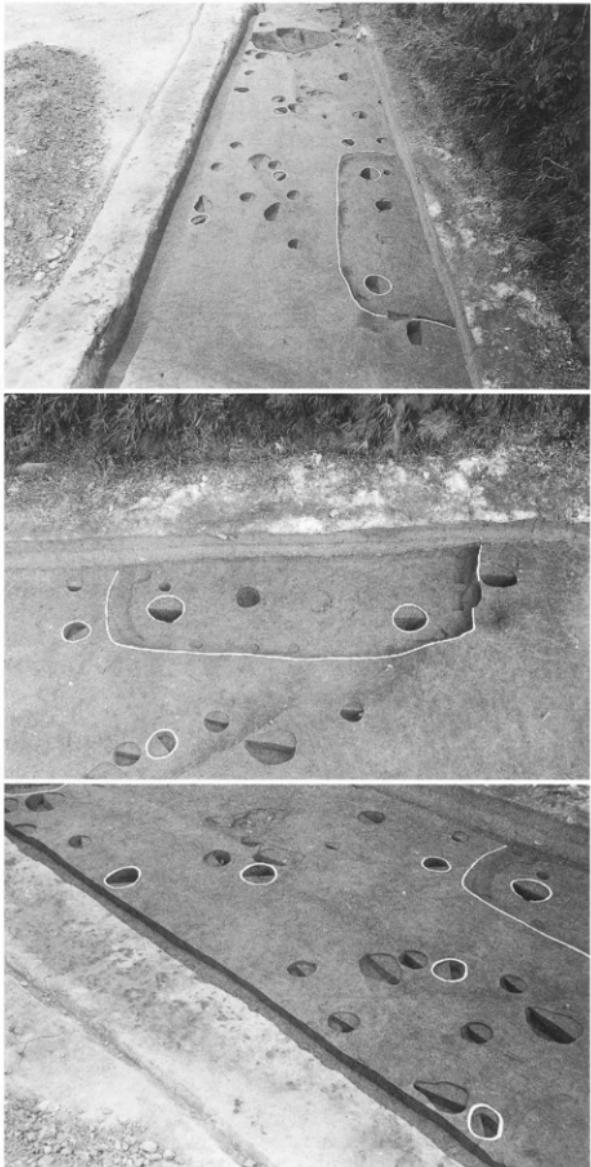
第1調査区－1

図版
6



第3次調査
第1調査区-1

図版7

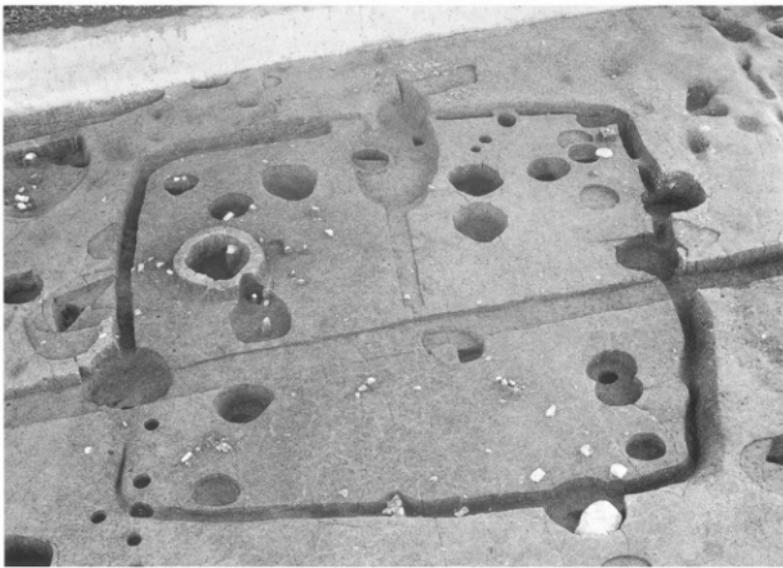


第3次調査

第1調査区-1



1. C・D区全景(北より)



2. 壁穴住居S B 03(北東より)

第3次調査
第1調査区-1

図版9



1. 壁穴住居SB 20 (西より)



2. 壁穴住居SB 11 (東より)



3. 捩立柱建物SB 04 (西より)

第3次調査

第1調査区-1

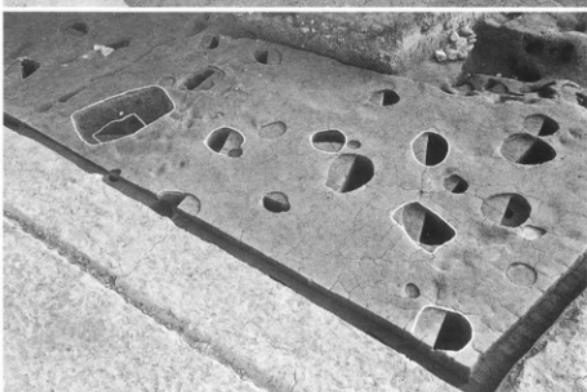
図版
10



1. 挿立柱建物 S B 03 (北東より)



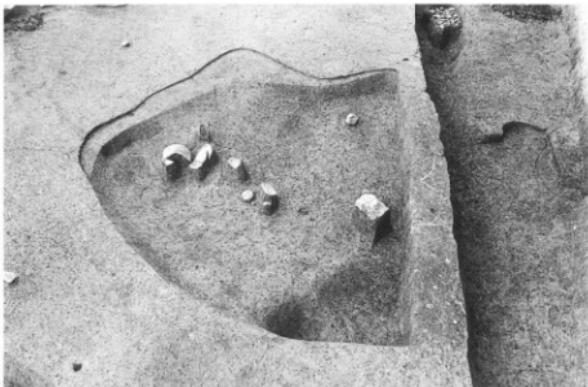
2. 挿立柱建物 S B 03 (西より)



3. 挿立柱建物 S B 07 (北より)

第3次調査
第1調査区-1

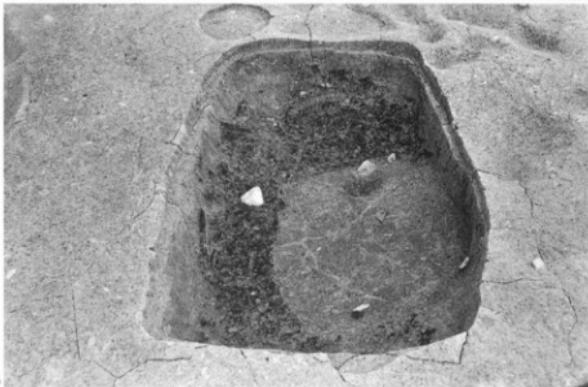
図版
11



1. 土坑SK 04 (西より)



2. 墓塚ST 01 (東より)



3. 墓塚ST 02 (北より)

第3次調査
第1調査区-1



1. E区全景(西より)



2. 壁穴住居S B 13(西より)

第3次調査

第1調査区-1

図版
13



1. 鋸穴住居 S B 18 (西より)



2. 鋸穴住居 S B 14 (北より)



3. 挿立柱建物 S B 08 (西より)

第3次調査
第1調査区-1

図版
14



1. 捩立柱建物 S B 23 (南より)



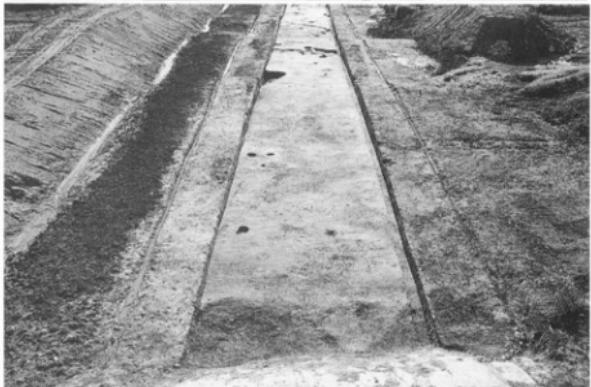
2. 捩立柱建物 S B 12 (西より)



3. 土坑 S K 08 (北より)

第3次調査
第1調査区－2

図版
15

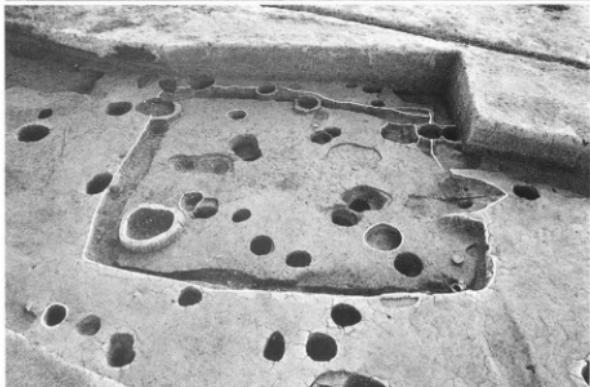


第3次調査
第1調査区-2

図版
16



1. 整穴住居 S B 19 (南東より)



2. 整穴住居 S B 19 (北東より)



3. 整穴住居 S B 19 調査出土状況
(南東より)

第3次調査

第1調査区-2

図版
17



1. 挿立柱遺物 SB 05・06
(南より)



2. 挿立柱遺物 SB 12
(西より)



3. 挿立柱遺物 SB 16・17
(南西より)